

高柳遺跡

2000年3月

大阪府教育委員会

巻頭図版



航空写真（遺跡の東から淀川を望む）



施釉陶器

はしがき

大阪府寝屋川市を中心とする地域は、『古事記』・『日本書紀』に「茨田堤」が築かれたとの記述があるように、淀川の氾濫原として古来より水とのたたかいがくり広げられてきたところであります。その後の文献資料をみましても、洪水や堤に関する記事が数多く残っています。1802年の「点野・仁和寺切れ」と言われる大洪水はその一つであります。

この周辺の古代の人々の残した足跡については、よくわからない状態が続いてきました。というのも、氾濫原のため、そうした人々の生活の痕跡などは、残っていないものと考えられていたからです。ところが、この10年ほどの間の再開発事業の進捗に伴い、かつて人々が果敢に挑戦した足跡をとどめた、多くの遺跡が発見されるようになってきました。

高柳遺跡はそうした遺跡のひとつです。いままでは、平安時代の遺跡として周知されていましたが、今回の調査により、新たに弥生時代・古墳時代の遺構・遺物が検出され、この地域の土地利用がさらに古く遡ることがわかつてまいりました。

洪水の危険にさらされながらも、利用しようとした背景には、当時の人々がこの地を重要な場所だと認識していたからだと思われます。こうしたことは、この地域の今日にいたるまでの歩みを考える上で、非常に重要な成果であると言えましょう。

現代社会は、都市化が急速に進んだ結果、どこに行っても、同じような顔つきになりがちです。埋蔵文化財はその生き証人なのです。

21世紀を迎えるにあたり、さまざまなところで価値観の転換が要請されています。これらの街づくりにおいて、発掘調査の成果を何らかの形で反映させることができれば、街の個性化を演出することにもなり、大きな意味を持つことになると考えています。埋蔵文化財は決して過去のことを振り返るだけのものではないのです。

今後とも、埋蔵文化財の保存と活用にご理解、ご協力を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。

平成12年3月

大阪府教育委員会
文化財保護課長 小林 栄

例　　言

1 本書は、平成8年度から平成10年度にかけて実施した、都市計画道路千里丘寝屋川線建設予定地内で実施した高柳遺跡の発掘調査報告書である。

2 本事業は、大阪府土木部の依頼を受け、大阪府教育委員会事務局文化財保護課が実施した。

3 現地の調査は、調査第2係技師杉本清美・福宜田佳男を担当者として実施した。調査の分担は以下の通りである。

平成8年度	A・B・C区	杉本清美
平成9年度	D区	杉本清美
平成10年度	E・F区	福宜田佳男

調査終了後、整理事業に着手した。整理事業は、杉本の助言を受けて福宜田がおこない資料係が補佐した。

4 調査ならびに整理にあたっては、高柳自治会 寝屋川市教育委員会、大阪府土木部などの関係者をはじめ、以下の方々のご指導・ご助言をいただいた。記して感謝の意を表します。

石野博信（徳島文理大学） 浅川滋男・綾村宏・山下信一郎（奈良国立文化財研究所）

塩山則之・濱田延充（寝屋川市教育委員会） 森下友子（香川県埋蔵文化財センター）

橋本久和（高槻市教育委員会）、相京建史・石守見（群馬県埋蔵文化財調査事業団）

石井克巳（子持村教育委員会）、大塚昌彦（淡川市教育委員会）

5 本書の執筆は、杉本、福宜田、藤原彩子（大阪府教育委員会調査員）が分担した。文責は、文末に記している。また、あわせて、樹種鑑定結果、花粉・プラントオパール分析結果、蛍光X線分析結果、府営高柳住宅受水槽建設に伴う発掘調査の結果も掲載している。

本文目次

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査の経過	1
第2章 環境	
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境	3
第3節 既往の調査	6
第3章 調査成果	
第1節 A 区の調査成果	7
第2節 B 区の調査成果	23
第3節 C 区の調査成果	35
第4節 D 区の調査成果	49
第5節 E 区の調査成果	79
第6節 F 区の調査成果	81
第4章 まとめ	85
第5章 自然科学分析の結果	92
(付載) 府営高柳住宅受水槽建設に伴う発掘調査	107

挿図目次

第 1 図 既往の調査地、今回の調査位置図	1
第 2 図 地区割り方法	2
第 3 図 調査地区割設定図	2
第 4 図 周辺遺跡分布図	4
第 5 図 A 区、基本層序模式図	7
第 6 図 A 区、第 1 面・全体図	8
第 7 図 A 区、第 2 面・全体図	9
第 8 図 A 区、第 2 面・掘立柱建物 1・2・3 平・断面図	10
第 9 図 A 区、第 2 面・遺構断面図 (1)	11
第10図 A区、第2面・遺構断面図(2)	12
第11図 A区、第2面・遺構断面図(3)	12
第12図 A区、第2面・土坑98 平・断面図	13
第13図 A区、第3面・全体図	14
第14図 A区、第3面・掘立柱建物4 平・断面図	15
第15図 A区、第3面・掘立柱建物5・6 平・断面図	17
第16図 A区、第3面・遺構断面図	19
第17図 A区、第3面・溝18・土坑142 平・断面図	20
第18図 A区、遺構・包含層出土遺物 (1)	21
第19図 A区、出土遺物 (2)	22
第20図 B区、基本層序模式図	23
第21図 B区、第1面・全体図	24
第22図 B区、第2面・全体図	26
第23図 B区、第2面・土坑3・4 平・断面図	27
第24図 B区、第3面・全体図	28

第25図	B区、第3面・土坑7 平・断面図	30	第48図	D区、第2面・掘立柱建物12 平・断面図	63
第26図	B区、第3面・土坑33 平・断面図	31	第49図	D区、第2面・井戸172 平・断面図	64
第27図	B区、遺構出土遺物	33	第50図	D区、第3面・溝500 平・断面図	66
第28図	B区、包含層出土遺物	34	第51図	D区、第3面・遺構断面図	67
第29図	C区、基本層序模式図	35	第52図	D区、第3面・井戸1029・998 平・断面図	68
第30図	C区、第1~3面・遺構全体図		第53図	D区、第3面・土坑1049 平・断面図	69
		37~38	第54図	D区、第3面・遺構断面図	71
第31図	C区、第2面・掘立柱建物1 平・断面図		第55図	D区、遺構出土遺物実測図(1)	75
		39	第56図	D区、遺構出土遺物実測図(2)	76
第32図	上 C区、第2面・溝9 平・断面図	40	第57図	D区、包含層出土遺物実測図(1)	77
	下 同・土坑46 土器出土状況	40	第58図	D区、包含層出土遺物実測図(2)	78
第33図	C区、第3面・堅穴住居内炭化材・板材 跡検出状況	42	第59図	E区、東壁断面図	79
第34図	C区、第3面・堅穴住居 平・断面図	44	第60図	E区、全体図	80
第35図	C区、第3面・堅穴住居 主柱穴・中央土 坑断面図	46	第61図	F区、東壁断面図	81
第36図	C区、遺物実測図(1)	48	第62図	F区、全体図	82
第37図	C区、遺物実測図(2)	49	第63図	F区、出土遺物実測図	83
第38図	D区、基本層序模式図	50	第64図	高柳道路 遺構変遷図	89~90
第39図	D区、第1面・全体図	51			
第40図	D区、第1面・掘立柱建物1 平・断面図	53			
第41図	D区、第2~4面・全体図	55~56			
第42図	D区、第2面・掘立柱建物2 平・断面図				
		57			
第43図	D区、第2面・掘立柱建物3・4 平・断 面図				
		58			
第44図	D区、第2面・掘立柱建物5~8 平・断 面図				
		59			
第45図	D区、第2面・掘立柱建物9 平・断面図				
		60			
第46図	D区、第2面・掘立柱建物10 平・断面図				
		61			
第47図	D区、第2面・掘立柱建物11 平・断面図				
		62			

図版目次

- 図版1~3 A区
- 図版4、5 B区
- 図版6~8 C区
- 図版9~11 D区
- 図版12 E区
- 図版13 F区
- 図版14 A区出土遺物
- 図版15 A・B区出土遺物
- 図版16 B区出土遺物
- 図版17 C区出土遺物
- 図版18 C・D区出土遺物
- 図版19~23 D区出土遺物
- 図版24 特殊遺物

第1章 調査の経過

第1節 調査に至る経過

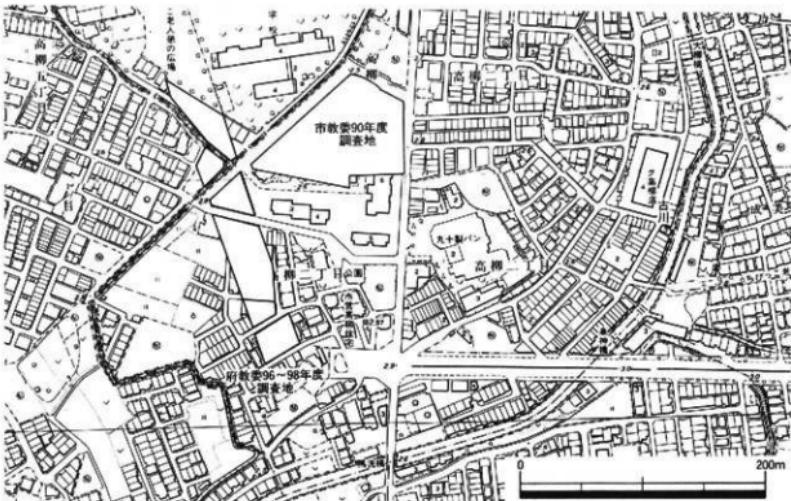
高柳遺跡は、寝屋川市高柳周辺に広がる、平安時代の集落跡である。大阪府土木部は、遺跡を継続する形で都市計画道路千里丘寝屋川線の建設を計画した。この道路は、淀川によって分断された左岸・右岸の両地域の一体化と、寝屋川市内の慢性的な渋滞を緩和することを目的として計画されたものである。

本府教育委員会はそうした計画を受け、土木部と協議を重ね、1995年度に道路予定地の試掘調査を行った。その結果、道路建設予定地において、遺物の包含が認められたので、1996年度以降に発掘調査を実施することになった。
(福宜田)

第2節 調査の経過

現地における発掘調査は、文化財保護課主幹堀江門也、調査第2係長中井貞夫の指導のもと、1996・1997年度は調査第2係技師杉本清美、1998年度は同じく福宜田佳男を担当者として実施した。

1996年度は、A・B・C区の調査をおこなった。調査は1996年11月20日、C地区から着手し、B区、A区の順で進め、1997年3月31日に終了した。



第1図 既往の調査地、今回の調査位置図

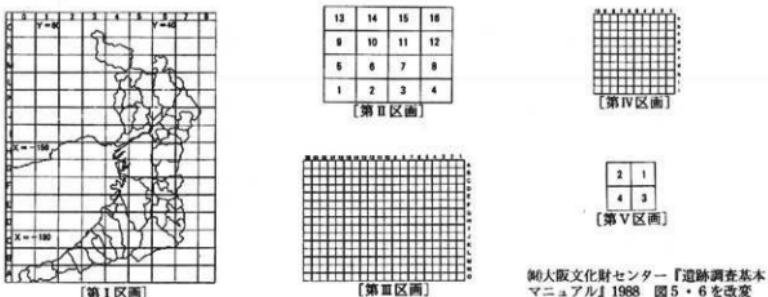
1997年度は、D区を調査した。1997年10月23日に着手し、1998年3月25日に終了した。この調査区では、平安時代の遺構がまとまって検出された。当該地における歴史を考える上で非常に重要な成果であると判断し、記者発表をおこない、1998年2月28日に現地説明会を実施したところ、約200人ほどの一般市民の参加を得た。

1998年度は、E・F区の調査をおこなった。1998年8月24日にE区の方から着手し、終了後にF区に入り、埋め戻しを含め12月25日にすべての現地調査を終了した。

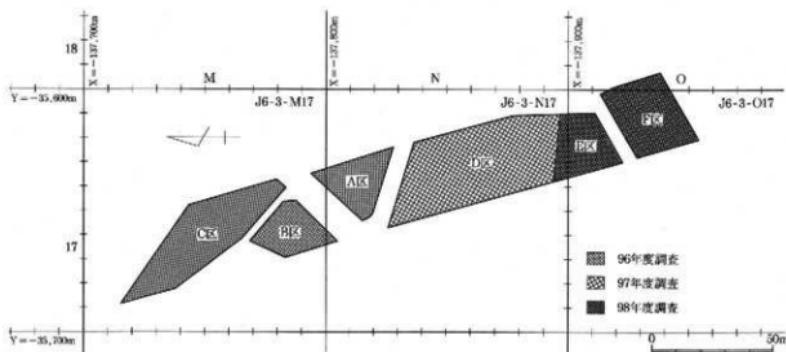
整理作業は1999年度におこなった。整理に際しては、調査第2係主査岩崎二郎が統括するなか、資料係技師井西貴子、三木弘の協力を得て、福宜田が担当した。ただし、1996年度・1997年度の調査については、杉本の指示に基づいて進めた。この間、付論に掲載した自然科学分析も実施した。

こうして、2000年3月31日、全ての作業を終了した。

(福宜田)



第2図 地区割り方法



第3図 調査地区割設定図

第2章 環境

第1節 地理的環境

高柳遺跡は、寝屋川市高柳2丁目・4丁目・5丁目一帯に広がる遺跡である。

遺跡の所在する寝屋川市は、大阪府では北東部に位置する。市域の東側には丘陵が広がるのに対して、西側は標高3m程度の低地となっている。この低地部は、淀川左岸の氾濫原にあたり、従来は遺跡の稀薄な地域とされていた。ところが、近年の調査の進展で、後述するように、多くの遺跡の発見が相次ぐようになっている。高柳遺跡も、そうした遺跡のひとつである。

遺跡の東側には、淀川の支流である古川がある。この川は北から南へと流れているが、遺跡のある周辺で西へ大きく蛇行している。高柳遺跡は、古川の旧流路によって形成された、自然堤防上に立地していることになる。

(福宜田)

第2節 歴史的環境

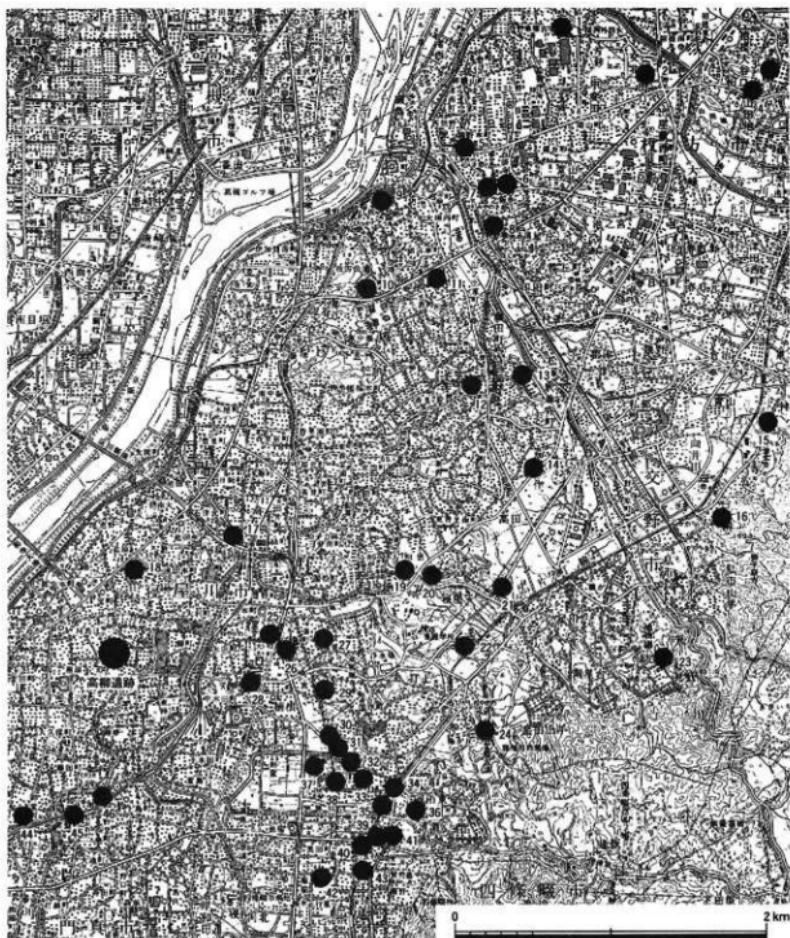
ここでは、寝屋川市を中心に、場合によっては少しエリアを広げ北河内地域のことにも触れながら、遺跡の動向をみていくことにしよう。

旧石器時代の遺跡のほとんどは、枚方市・交野市・四條畷市・大東市そして寝屋川市東部など生駒山系西麓部に点在している。寝屋川市では、伝寝屋長者屋敷跡遺跡・太秦遺跡・高宮遺跡・譲良川遺跡で、国府型ナイフ形石器が出土している。そのほかに、有舌尖頭器が発見された交野市神宮寺遺跡・四條畷市南山下遺跡、木葉形の尖頭器が出た四條畷市岡山南遺跡、ナイフ形石器等が出土した四條畷市更良岡山遺跡などがある。

縄文時代にはいると寝屋川市では、前期末に出現する高宮遺跡が最も古い。そして、高宮遺跡の南約600mの譲良川沿いに前期末から中期初頭に譲良川遺跡が現れる。この遺跡では、4つの貯蔵穴が見つかり、その内の1つより、縄文土器・獸骨・貝層・クリなどが検出された。これは、貯蔵目的以外の用途として使われていたとする新たな資料となるものである。また、四国・中国・北陸・東海・中部など他地域の膨大な量の土器や石器が出土していることから、縄文時代中期の拠点集落の1つであると考えられている。なお、譲良川遺跡の上流300mのところでは更良岡山遺跡が後期から晩期にかけて継続して営まれている。

弥生時代前期には、四條畷市雁屋遺跡や門真市普賢寺遺跡などで遺物が見つかっている。

寝屋川市では、前期前葉から中期中葉まで続いた高宮八丁遺跡が代表的な遺跡である。住居跡や墓は発見されてはいないが、炭化米・壺・甕などの土器、石鎌や石包丁などの石器、玉作りが行われていたことを示す碧玉製管玉の製品及び原石と木製品や、碧玉の剥片・穿孔具・玉砥・玉鏡に利用した工具が見つかっている。また、ヒスイ製の獸形勾玉は日本海地域との交流を伺わせ、舟の櫂や刺突具等の漁具類、鍬・鋤等の農具類、織物類、椀等の容器類、弓等の狩猟具類といった木製品の出土とともに原材料、未製品も発見された。のことから、この集落は生産の場であるとと



1 牧野草塚古墳	13 藤田山古墳	25 高宮八丁遺跡	37 砂遺跡
2 交北町ノ山遺跡	14 斎子作遺跡	26 法復寺遺跡	38 奈良田遺跡
3 長尾西遺跡	15 神宮寺遺跡	27 太宰遺跡・高塚古墳	39 中野遺跡
4 田口山遺跡	16 森古墳群	28 長保寺遺跡	40 奈良井遺跡
5 白雉塚古墳	17 桃遺跡	29 高宮遺跡・高宮庵寺跡	41 正法寺跡
6 百濟寺跡	18 進田西遺跡	30 小路遺跡	42 櫛屋遺跡
7 中宮下ノバ遺跡	19 池の瀬遺跡	31 讃良川遺跡	43 南野木崎遺跡
8 星丘西遺跡	20 寝屋遺跡	32 更良岡山遺跡	44 曾賢寺遺跡
9 万年寺山古墳	21 伝森屋長者裡數跡遺跡	33 忍岡古墳	45 茨田堤
10 蘆原山遺跡	22 球屋古墳	34 忍ヶ丘駅前遺跡	46 大和田遺跡
11 山之上天窓遺跡	23 紗見山古墳	35 南山下遺跡	
12 中山觀音寺跡	24 石宝殿古墳	36 岡山南遺跡	

第4図 周辺遺跡分布図

にも、近江・播磨地方の上器や日本海地域のヒスイ等から他の地域との交流を知ることができ、この地域の拠点集落であると考えられる。そして、この遺跡が廃絶すると、中期中葉から後期まで太秦の丘に太秦遺跡が成立することから両者は密接な関係があると言えよう。

枚方市では、中期に方形周溝墓群と竪穴式住居が発見された交北城ノ山遺跡、高地性集落として知られる田口山遺跡、天野川丘陵上にある星丘西遺跡がある。また、四條畷市では雁屋遺跡で中期から後期の方形周溝墓群が見つかっている。

後期にはいると北河内では遺跡が爆発的に増加する。寝屋川市では長保寺遺跡、池の瀬遺跡、寝屋遺跡、小路遺跡で土器の出土が知られている。そして今回の調査地である高柳遺跡では、焼失住居1棟が検出され、この遺跡の北にある池田西遺跡でも焼失住居が確認されている。

周辺地域を見ると、枚方市では、鉄器がまとまって検出された鷹塚山遺跡、六角形の竪穴住居が発見された山之上天堂遺跡、焼失住居が発見された長尾西遺跡、方形周溝墓が発見された茄子作遺跡、終末期～古墳初頭の墳丘墓が発見された中宮ドンバ遺跡などがある。

古墳時代にはいると、それまでは、寝屋川市域の東側丘陵に見ることのできた集落が、しだいに中央および西側の低湿地帯に移ってくる。

寝屋川市では、前期だと法復寺遺跡、長保寺遺跡、讚良郡条里遺跡で庄内式土器、讚良川遺跡と高宮八丁遺跡などで布留式土器の甕が出土している。中期になると、長保寺（讚良郡条里遺跡）では竪穴住居や扉材や舟材を転用した井戸枠などが検出されている。また、法復寺遺跡では陶質土器、桶遺跡では韓式系土器、初期須恵器、馬齒、製塩土器、素文鏡、倉庫の扉材などが発見された。後期になると、桶遺跡、池田西遺跡、長保寺遺跡、讚良郡条里遺跡などの集落が知られている。

古墳としては、太秦の地に中期から後期にかけて太秦古墳群が形成され、その中に周濠を有する高塚古墳が現存する。また、後期には北河内最大規模の横穴式石室をもつ寝屋古墳が築かれ、終末期には、石宝殿古墳がある。

周辺地域での前期集落の様相は明確にはなっていない。四條畷市南野米崎遺跡で庄内式土器が出土している。古墳としては、枚方市万年寺山古墳、藤田山古墳、交野市森古墳群、妙見山古墳、四條畷市では竪穴式石室をもつ忍ヶ丘古墳がある。中期の集落では、枚方市交北城ノ山遺跡、茄子作遺跡、四條畷市南野米崎遺跡、中野遺跡、奈良井遺跡などがある。また、岡山南遺跡で初期須恵器・韓式系土器が見つかっており注目される。古墳では、前方後円墳の牧野車塚古墳、禁野車塚古墳がある。後期には、枚方市の白雉塚古墳、宇山一号墳、交野市の清水谷古墳、倉治古墳群などが挙げられる。

飛鳥・奈良時代にはいると、遺跡数は増加する。寝屋川市では古川を挟んで集落ができる。

寝屋川市の高宮遺跡では、豪族の居宅と推測される大型建物と欄列が発見され、東に隣接する白鳳時代創建の高宮廃寺との関係があるとされている。また、長保寺遺跡は奈良時代後半の掘立柱建物数棟が発見されているし、茨田郡の都寺に指定された聖德太子四十六ヶ寺のひとつ「茨田

寺」とも比定する考え方のある高宮廃寺（推定）からは、骨蔵器が出土している。

周辺地域では、枚方市の九頭神廃寺、中山觀音寺跡、百濟寺跡、交野市の廃長宝寺、四條畷市の正法寺跡、讚良寺跡といった古代寺院が多く建立された。また、枚方市の楠葉平野山瓦窯では、四天王寺創建時の瓦を生産し供給していた。

（藤原）

参考文献

- 大阪府教育委員会『池田西遺跡発掘調査概要』 1994
大阪府教育委員会『更良岡山遺跡発掘調査概要』 1992
寝屋川市教育委員会『高宮廃寺』 1985
寝屋川市教育委員会『高宮遺跡』 1986
寝屋川市教育委員会『神田東後遺跡』 1989
寝屋川市教育委員会『高柳遺跡』 1991
寝屋川市教育委員会『高宮八丁遺跡』 1992
寝屋川市教育委員会『長保寺遺跡』 1993
寝屋川市教育委員会『中神田遺跡』 1998
四條畷市教育委員会『雁屋遺跡』 1994
枚方市文化財研究調査会『図録・枚方の遺跡』 1988
藤沢一夫『寝屋川市域の古代寺院』『寝屋川市史』 1966

第3節 既往の調査

高柳遺跡の本格的調査は、1990年に、寝屋川市教育委員会により府営住宅の建て替えに伴っておこなわれたものが最初である。

この時の調査では、調査区の東半で、幅30mを越える自然河川が検出され、調査区の東側を流れる古川の旧流路と考えられている。そして、その西側の微高地からは、11棟の掘立柱建物跡が検出された。時期は平安時代中期頃と考えられており、建物の軸の方向から3時期に変遷することが明らかになっている。

遺物として注目されるのは、縁軸陶器・灰釉陶器とともに、墨書き土器、巡方と呼ばれる石帶などが検出されたことである。このほか、土師器、黒色土器、須恵器、白磁、鉄製刀子、簪なども確認されている。墨書き土器は土師器で、「宅」という文字が書かれていた。これらの遺物の出土は、この遺跡が、当時の一般集落とは異なる性格を有していることを示している。

今回の調査区は、前回の調査区の西側にあたり、同じような内容の遺構・遺物の検出が予想された。そして、二つの調査成果を総合することによって、この遺跡の性格の一層の解明が期待されていたのである。

（福宜田）

第3章 調査成果

第1節 A区の調査成果

A区は平成元年度に寝屋川市教育委員会が発掘調査を行った府営寝屋川住宅の西側にあたる。東側に府営住宅、北西側および南側を道路で区切られるほぼ三角形の調査区で、面積は約540m²を測る。

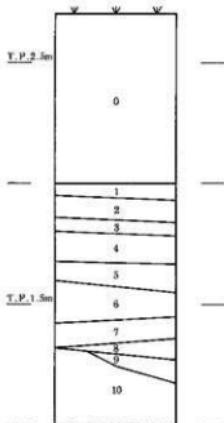
遺構面は3面検出した。第1面では近世から中世頃の耕作溝を検出した。第2面では中世および平安時代中期から後期の掘立柱建物、溝、土坑と建物ピットなどを検出した。第3面では古墳時代後期から平安時代の建物と耕作跡、溝などを検出した。ただし、第2面および第3面において、一部深く掘り下げた部分があるため、下層の遺構も同一面で検出している。遺構番号は各遺構面ごとに通し番号を付けた。

第1項 基本層序

A区は北側から南側にかけて、また西側に向けて徐々に低くなる地形を示す。土層の堆積状況は地点により若干異なるが、ほぼ平均を示す位置の土層をもってA区の基本層序とする。

0. 機械掘削土で現代の盛土および現代の耕作土層。厚さは約70cm。1. 洪水砂層。厚さは5～7cm。近世遺物を検出。2. 灰オリーブ色シルト層。厚さは約10cm。中世から近世の耕作土層。上面が第1面に相当。3. オリーブ灰色粘質シルト層。厚さは約5cm。4. オリーブ褐色粘質シルト層。厚さは約12cm。中世他の遺構を検出。上面が第2面に相当。5. 暗オリーブ灰色粘質シルト層。厚さは8～12cm。平安時代の集落が廃絶した後の整地層。層全体に焼土、炭化物、土器小片を多く含む。6. オリーブ黒色粘質シルト層。厚さは10～17cm。南側に向かって薄くなる。炭化物、土器小片を含む。平安時代中期他の遺構を検出。上面が第3面に相当。7. オリーブ灰色粘質シルト。厚さは8.5～10cm。平安時代の集落が形成される以前の耕作溝を検出。8. 暗緑灰色粘質土層。厚さは約8cm。調査区の中央部から西側にかけて堆積する層。上面で奈良時代の遺構を検出。9. オリーブ灰色シルト層。厚さは5～10cm。調査区の中央部より南側に堆積する層。上面で古墳時代の遺構を検出。10. 灰オリーブ色または灰色粘質土層。厚さは17cm以上を測る。

(杉本)

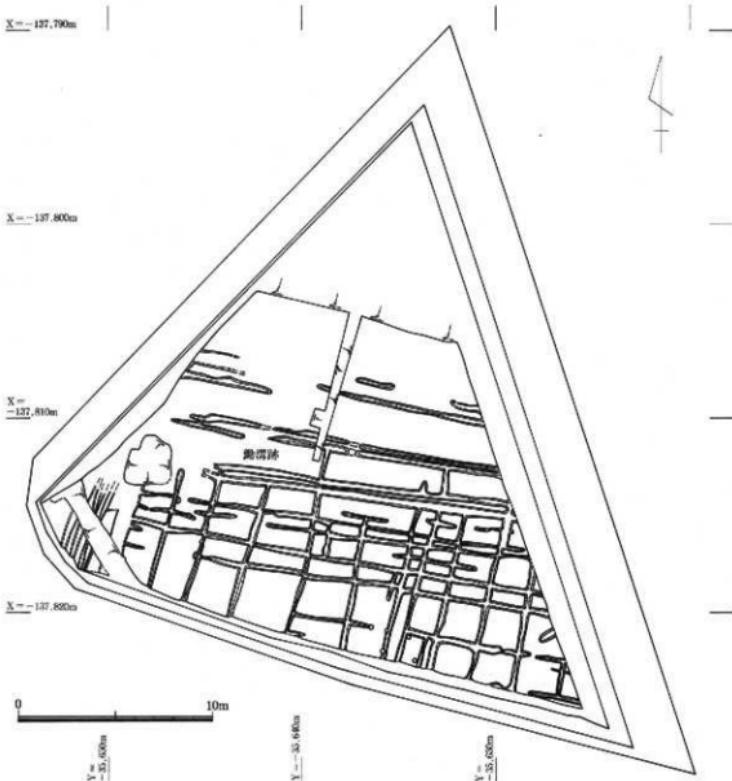


第5図 A区、基本層序模式図

第2項 遺構

(1) 第1面

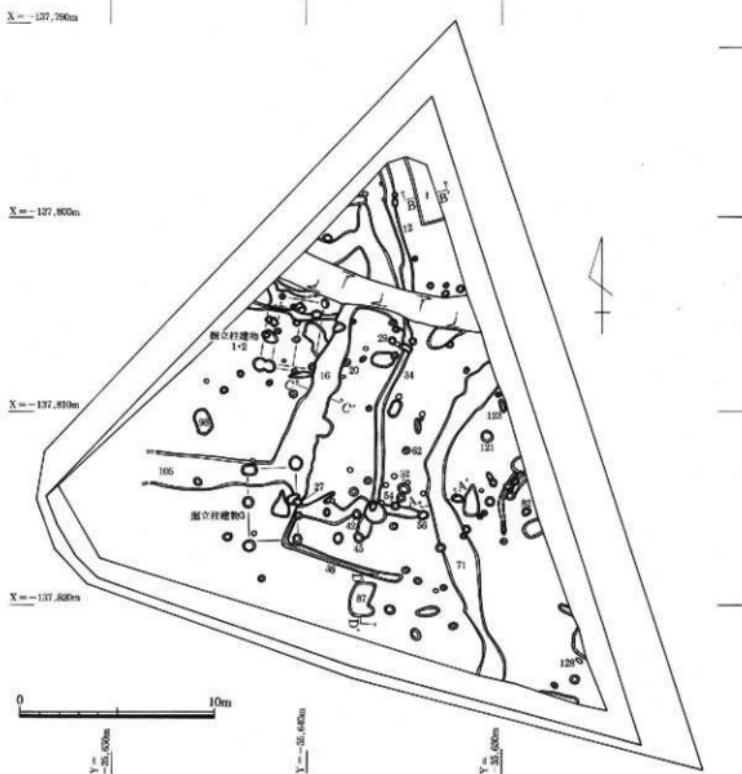
第1面では中世から近世の鋤溝跡を検出した。検出面はT.P. 1.66 ~ 1.78 mを測る。地形的にはほぼ平坦であるが、調査区の北側から南側に向けて僅かに低くなる。上面の洪水砂層を取り除くと、整然とした小溝を検出した。小溝は東に約3度傾く南北溝と、それらに直行する東西溝で耕作溝である。南北溝は検出幅が10~20cm、深さは3~5cmを測る。埋土は灰オリーブ色砂である。耕作溝は一部に重複が見られるが、約2.5~3mの間隔で1単位を成す。東西溝は南北溝に直交するもので、検出幅は7~15cm、深さは2~3cmを測る。埋土は灰オリーブ色砂である。約2mの間隔で1単位を成す。耕作溝はいずれも幾度かの重複が認められることから、



第6図 A区、第1面・全体図

長期にわたり耕作が行われていたと考えられる。耕作溝に伴う遺物はなく、時期を確定することはできなかったが、包含層から瓦器碗片、土師器片、青磁、白磁碗片などが数多く出土している。また、上層を覆う洪水砂層に近世陶磁器等を含んでいる。中世から近世にかけての耕作跡である。

現在、調査地周辺で水田が見られるが、第1面で検出した耕作溝の方向とは異なる方位を示す。現代の水田では主に道路や水路の方向に基づいて土地区分がなされている。検出した耕作溝は上層を厚い洪水砂によって埋められているため、洪水以降はかつての土地区分が踏襲されなかつものと思われる。近世における大洪水の記録として、享和2年（1802年）の「点野・仁和寺切れ」が知られている。耕作溝の上層を覆う厚い洪水砂はこの大洪水の跡と推定できる。



第7図 A区、第2面・全体図

(2) 第2面

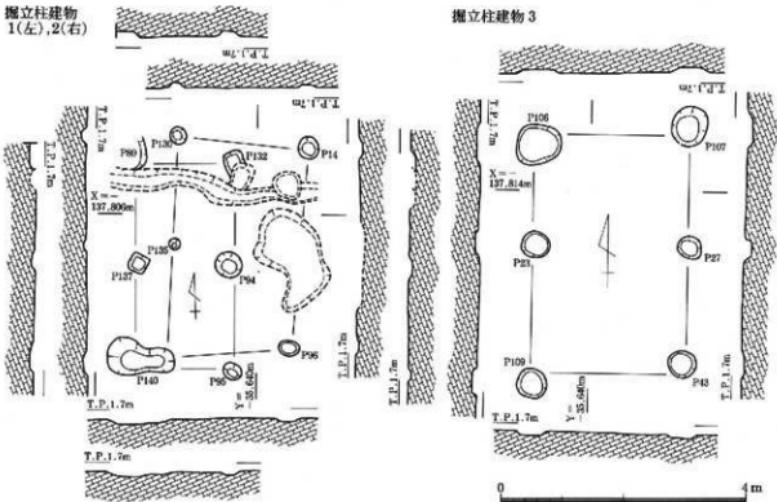
第2面では平安時代中期以降の掘立柱建物、溝、土坑と建物ピットなどを検出した。検出面はT.P.1.63m～1.66mを測る。地形的にはほぼ平坦である。

掘立柱建物 第2面では掘立柱建物を検出した。検出時において掘立柱建物は7棟であると考えていたが、整理した結果3棟が復元可能であった。そこで、復元可能な掘立柱建物1、2、3について報告する。

掘立柱建物1 調査区中央部の西側に位置する1間(1.8m)×2間(3.5m)の南北棟。柱間寸法は桁行が約1.8mを測る。主軸方向はN-5°-Eである。柱穴の平面形は円形および方形で、検出径が40～80cm、深さは3～10cmを測る。埋土は灰オリーブ色ないしオリーブ褐色粘質シルトである。出土遺物は瓦器、土師器などの小片である。

掘立柱建物2 1間(2.2m)×2間(3.5m)の南北棟。柱間寸法は桁行が約1.8mを測る。主軸方向はN-10°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円形で、検出径が20～40cm、深さは3～9cmを測る。埋土は灰オリーブ色ないしオリーブ褐色粘質シルトである。出土遺物は土師器甕、瓦器、土師器などの小片である。掘立柱建物1と重複しているが、前後関係は不明である。

掘立柱建物3 調査区の南側に位置する1間(2.5m)×2間(4.0m)の南北棟。柱間寸法は梁間が2.5m、桁行が2.0mを測る。主軸方向はN-5°-Wである。柱穴の平面形はやや歪んだ隅丸方形で、検出径が30～70cm、深さは6～11cmを測る。埋土は灰オリーブ色粘質シルトでわずかに炭化物を含む。ピット27より黒色土器A類碗が出土している。平安時代中期に相当す

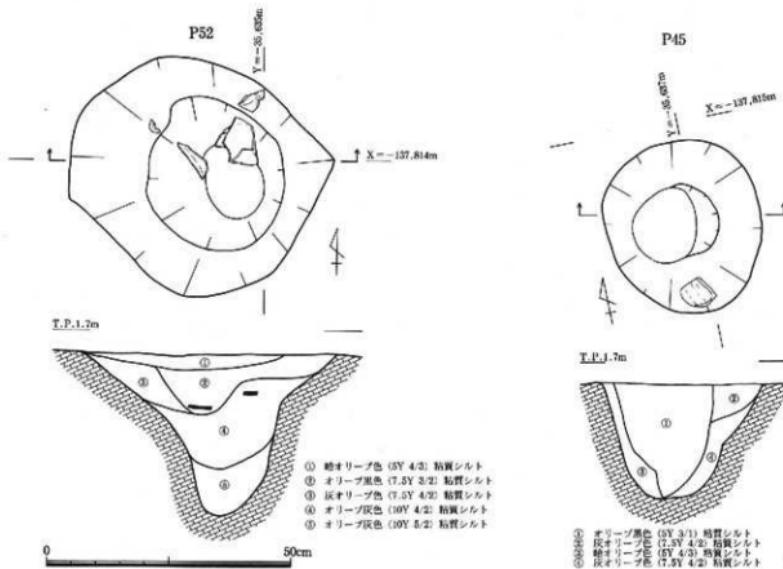


第8図 A区、第2面・掘立柱建物1・2・3 平・断面図

る。掘立柱建物 1 と 2 は重複するが、さほど時期を隔さず建て替えられたものと思われる。

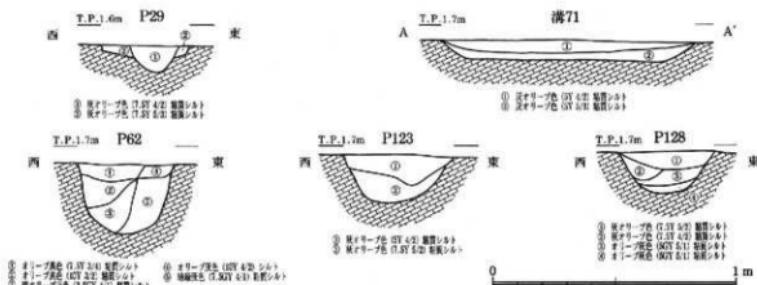
建物ピット 検出した掘立柱建物 3 棟のほかに建物の復元はできなかったが、掘立柱建物の柱穴である可能性のあるものを幾つか検出した。以下では、これらの柱穴を建物ピットと呼称する。

ピット 52、54、56、62、45 調査区の中央部あたりで検出したピット群である。ピット 52 は平面形がほぼ円形で、直径 52cm、深さは 34cm を測る。埋土はオリーブ黒色ないしオリーブ灰色粘質シルトで炭化物を含む。出土遺物は土師質壺片・羽釜片・古鏡などである。古鏡は磨耗が著しく文字の判別はできなかった。ピット 54 は平面形がほぼ円形で、直径 35cm、深さは 23.7cm を測る。埋土はオリーブ黒色および暗オリーブ色粘質シルトで炭化物を含む。柱根を抜いた痕跡が見られる。出土遺物は瓦器碗・土師器片などである。ピット 56 は平面形がほぼ円形で、直径が 52cm、深さは 18cm を測る。埋土は灰オリーブ色粘質シルトである。出土遺物は土師質羽釜片・瓦器小片などである。ピット 62 は平面形がほぼ円形で、直径が 40cm、深さは 28cm を測る。埋土はオリーブ黒色ないし暗オリーブ色粘質シルトで炭化物を含む。出土遺物は瓦器・須恵質壺片などである。ピット 45 は平面形がほぼ円形で、直径が 55cm、深さは 6cm を測る。埋土はオリーブ褐色およびオリーブ粘質土で炭化物を含む。出土遺物は土師質羽釜片などである。いずれの埋土にも炭化物を含むが、柱根が抜かれた後、柱穴内に炭化物が堆積したものと思われる。平安時代終末期から鎌倉時代に相当する。

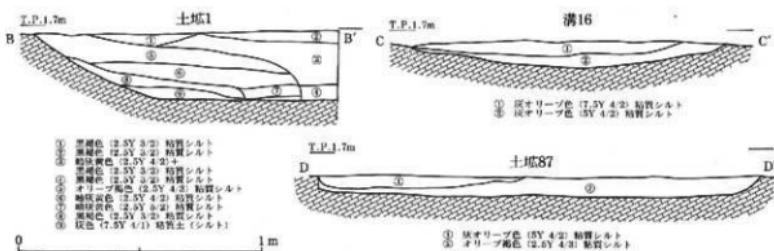


第9図 A区、第2面・遺構断面図（1）

ピット20、82、121、123、128 調査区の中央部から東側で検出した建物ピットである。ピット20は調査区の北側中央部で検出した。平面形はほぼ円形で、直径が38cm、深さは39.5cmを測る。埋土は灰オリーブ色粘質シルトである。出土遺物は黒色土器碗、土師質土器片などである。ピット82は調査区の東側中央部で検出した。平面形はほぼ円形で、直径が49cm、深さは26.3cmを測る。埋土は灰オリーブ色粘質シルト、黒褐色粘質シルト、オリーブ黒色粘質土で炭化物を含む。柱根を抜いた痕跡が見られる。出土遺物は黒色土器碗、土師質小皿などである。ピット121は調査区の東側中央部で検出した。平面形は円形を示す。検出径は60cm、深さは12cmを測る。埋土は灰オリーブ色粘質シルトで炭化物を含む。出土遺物は土師質杯、土師質壺である。ピット123は調査区の東側中央部で検出した。平面形は楕円形で、検出長形が45cm、短径が25cm、深さは20cmを測る。埋土は灰オリーブ色粘質シルトで炭化物を含む。出土遺物は土師質土器片などである。ピット128は調査区の南東部で検出した。平面形は楕円形で、長径が40cm、深さは17cmを測る。埋土は灰オリーブ色ないしオリーブ灰色粘質シルトで炭化物を含む。建物ピットは平安時代中期に相当する。



第10図 A区、第2面・遺構断面図（2）



第11図 A区、第2面・遺構断面図（3）

溝 16、溝 105、溝 38 調査区の西側で検出した溝。溝 16 は南北方向に伸びるもの。溝 105 は溝 16 から西側へ屈曲し東西方向に伸びる。溝 38 は溝 16 から分岐して南下し、途中で東側へ屈曲し東西方向に伸びる。溝 16、105 の検出幅は 0.8 ~ 2.0m、深さは 6 ~ 10cm を測る。溝 38 の検出幅は 40cm、深さは 6cm を測る。溝の断面形は緩やかな U 字形を示す。埋土は灰オリーブ色粘質シルトまたは暗オリーブ色粘質シルトで炭化物を含む。自然に埋まつた状況を示す。溝の方向は約 20° 東に傾き、直線的に南北方向に伸びる。また途中で東西方向へ垂直に屈曲する。出土遺物は溝 16、38 から土師質壺片・羽釜片・小皿・皿、瓦器碗片などである。特に溝 16 から屈曲して東西方向に伸びる溝 38 の北側にピット 45、52、54、56 がみられることから、溝 16、38 は建物を開む溝である可能性が高い。

溝 71 調査区の西側で検出した溝。北東から南方向に弯曲して伸びる。検出幅は 0.9 ~ 1.5m、深さは 8 ~ 16cm を測る。埋土は灰オリーブ色粘質シルトで炭化物を含む。ゆるく弯曲していることから、自然流路であると思われる。出土遺物は土師質羽釜・壺、黒色土器碗、須恵器片などである。平安時代後期に相当する。

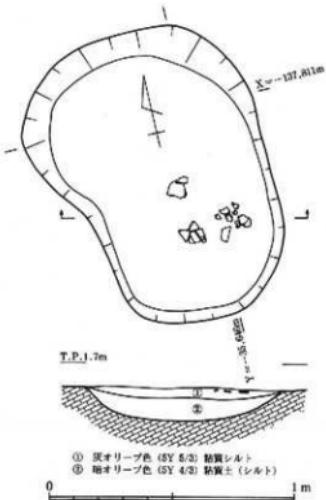
溝 12、溝 34 調査区の中央部で検出した南北溝で、溝 12 に溝 34 が続く。検出幅は 40cm、深さは 6 ~ 10cm を測る。埋土はオリーブ灰色粘質シルトで炭化物を含む。溝はわずかに弯曲するがほぼ南北方向を示す。出土遺物は土師質壺片、黒色土器 A 類碗などである。平安時代中期に相当する。

土坑1 調査区の北側で検出した方形の土坑。

検出幅は南北方向が約 3.7m、東西方向は調査区外に広がるため全容は不明である。深さは 27.5cm を測る。埋土は暗灰黄色粘質シルト、黒褐色粘質シルトで炭化物を含む。出土遺物は黒色土器 A 類碗・B 類碗、土師質碗・皿・壺、須恵器杯片、無釉陶器片などである。平安時代の集落が廃絶した後、整地を行った際、土器をまとめて廃棄したものと考えられる。

土坑98 調査区の西側で検出したやや扁平な橢円形の土坑。検出幅は 0.8cm、検出長は 1.3m、深さは 13cm を測る。埋土は灰オリーブ色粘質シルト、暗オリーブ灰色粘質シルトで炭化物および小土器片を含む。自然の落ち込みと考えられる。出土遺物は土師質皿、黒色土器片などである。平安時代中期に相当する。

土坑87 調査区の南側で検出したやや歪んだ



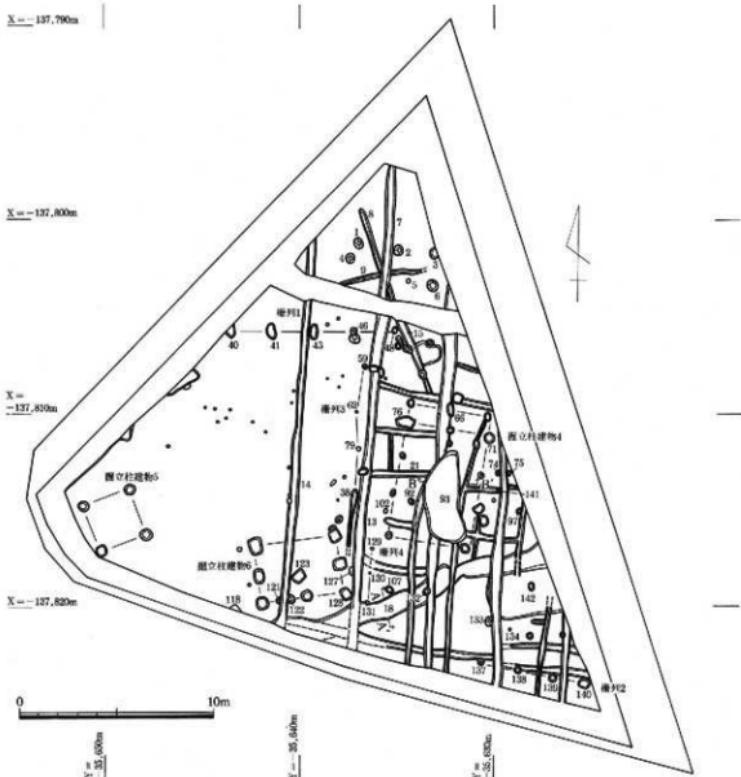
第12図 A区、第2面・土坑98 平・断面図

方形の土坑。検出幅は1.1m、検出長は1.8m、深さは8~10cmを測る。埋土は灰オリーブ色粘質シルト、オリーブ褐色粘質シルトで炭化物を含む。人為的なものではなく、自然の落ち込みと考えられる。出土遺物は土師質壺片などである。

(3) 第3面

第3面では平安時代の掘立柱建物、柵列、溝状造構、土坑と平安時代の建物に先行する建物ピット、土坑、溝などを検出した。検出面はT.P. 1.25~1.50cmを測る。調査区は北側から南側にかけて徐々に低くなる。さらに調査区中央部から西側は低くなり、なだらかに落ち込んでいく自然地形を示す。

掘立柱建物 第3面では掘立柱建物を3棟検出した。これらの建物はそれぞれの主軸方向が異



なり、柱穴の平面形、柱穴内の埋土にも違いが見られた。調査区内で炭化物を多く含む柱穴が幾つか検出された。掘立柱建物が焼失したものと考えられる。焼失した掘立柱建物は平成元年度に行われた寝屋川市教育委員会の調査においても確認されていることから、平安時代中期に相当する。

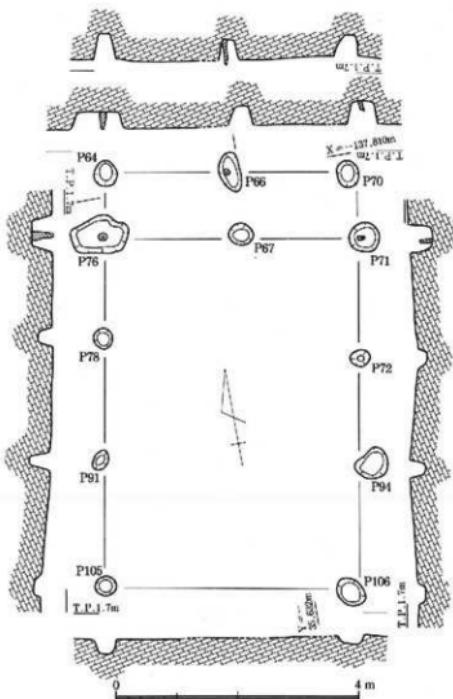
掘立柱建物 4 調査区の中央部東側に位置する2間(4.3m)×3間(5.7m)の南北棟で北側に1間の庇を持つ。柱間寸法は梁間が2.2m、桁行が1.9mを測る。主軸方向はN-10°-Eである。柱穴の平面形はほぼ円形である。柱根の抜いた跡が見られるものもある。直径は30~50cm、深さは20~40cmを測る。検出面はT.P.1.52~1.47mである。埋土は暗オリーブ灰色粘質土、オリーブ灰色粘質土、および灰色粘質土で炭化物を多く含む。柱根の残る柱穴(ピット71、66、76)もある。柱が抜いている途中で折れ、柱根が残ったものと思われる。残存する柱根の太さは約15cmを測る。出土遺物は黒色土器碗、土師器杯などの小片である。

掘立柱建物 5 調査区の西側に位置する東西1間(2.5m)×南北1間(2.5m)ほどの建物。

調査区の南西端に位置するた

め、さらに建物の規模は大きくなるものと思われる。主軸方向はN-20°-Wである。柱穴の平面形はやや丸みをもつ方形を示す。規模は一辺が50~70cm、深さは30~43cmを測る。検出面はT.P.1.35mである。埋土はオリーブ黒色粘質土である。出土遺物は土師器、須恵器杯身などの小片である。

掘立柱建物 6 調査区の南側中央部に位置する2間(4.0m)×2間(3.4m)の東西棟。柱間寸法は梁間が2.0m、桁行が1.7mを測る。主軸方向はN-8°-Wである。柱穴の平面形はほぼ長方形を示す。規模は一辺が80cm×70cm、深さは20~33cmを測る。検出面はT.P.1.27mでやや低い位置で検出した。埋土は灰オリーブ色ないしオリーブ黒色粘質土である。



第14図 A区、第3面・掘立柱建物4 平・断面図

出土遺物は須恵器壺、杯片、土師器片などである。

掘立柱建物4、5、6はそれぞれ主軸方向、柱穴の形態が異なることから、時期的に差があるものと思われる。掘立柱建物4の柱穴の埋土に炭化物が多く含まれるが、これは掘立柱建物が焼失した後、残った柱材等を抜き取り整地する際、炭化物が混入したものであろう。掘立柱建物6は掘立柱建物4と主軸方向が大きく異なり、自然地形に沿っている。掘立柱建物5は古墳時代後半に相当する。

建物ピット 検出した掘立柱建物3棟のほかに、建物として復元することはできなかったが建物の柱穴を幾つか検出した。

ピット1、2、3、6、4 調査区の北側で検出した。ピット1、2、3、6は東西方向を示す建物の柱穴と思われる。平面形はほぼ円形を示す。直径は30～50cm、深さは20～40cmを測る。検出面はT.P.1.37mである。埋土は暗緑灰色粘質土およびオリーブ黒色粘質土で炭化物を多く含む。ピット2では検出径が10cmの柱根を検出した。出土遺物は土師器片、黒色土器片などである。ピット4は平面形が円形を示す。検出径は45cm、深さは34cmを測る。埋土は灰オリーブ色粘質土で炭化物を含む。

ピット74、75、92、141 調査区の中央部から東側で検出した。柱穴の平面形はいずれもほぼ円形を示す。直径が30～50cm、深さは19～33cmを測る。検出面はT.P.1.46mである。埋土は暗オリーブ灰色粘質シルトおよびオリーブ灰色粘質シルトで炭化物を含む。遺物は黒色土器片、土師器片などの小片が出土している。

ピット97 調査区の中央部東側の側溝付近で検出した。柱穴の平面形は円形を示す。直径は30cm、深さは40cmを測る。検出面はT.P.1.48mである。埋土は灰色粘質土で炭化物を含む。遺物は出土しなかった。ピット97から約2m北の東側側溝内、さらに約2m北の東壁内にも同様の形態を示す柱穴痕が見られた。これらの柱穴は掘立柱建物4の建物ピットから約2mの距離をもって対置することから、掘立柱建物4に付随するピット、または同時期に近接して建っていた掘立柱建物の建物ピットであると思われる。

ピット102、107、132 調査区の中央部やや南側で、掘立柱建物4に近接して検出した。柱穴の平面形はいずれも円形を示す。直径は15～30cm、深さは12～29cmを測る。検出面はT.P.1.48mである。埋土はオリーブ黒色粘質土で炭化物を含む。遺物はピット102から土師質杯が出土している。平安時代中期に相当する。

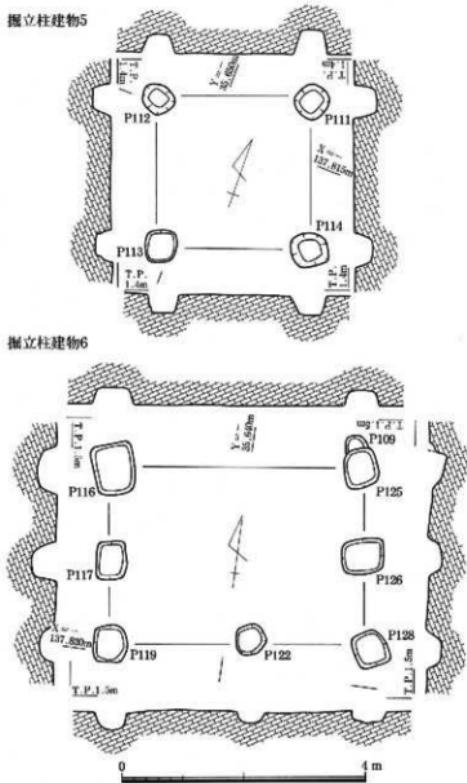
ピット118、121、122、123、127 調査区の南側中央部で検出した。柱穴の平面形は長方形を示す。一辺が40cm、深さは20cmを測る。検出面はT.P.1.27mである。埋土はオリーブ黒色粘質土ないし暗オリーブ灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。柱穴の形態、埋土の堆積状況から掘立柱建物6と同時期に相当する。

検出された建物ピットはおおむね掘立柱建物4と同時期の平安時代中期に相当する。調査区の南側中央部で検出したピット118、121、122、123、127は掘立柱建物6と同時に相当する。

平安時代の建物ピットは調査区の中央部から東側で重複して多く検出しているが、掘立柱建物4より西側では柱穴も希薄となる。さらに調査区の東側壁内からもいくつか柱痕跡が観察されていることから、建物群は東側に広がるものと思われる。

構列1(遺構40、41、43、46、48) 調査区の北側中央部で検出した。東西方向に伸びる。各遺構の平面形は扁平な楕円形を示す。検出幅が20~50cm、深さは19~35cmを測る。検出面はT.P. 1.28~1.40mである。埋土は灰オリーブ色粘質土ないし暗緑灰色粘質シルトである。遺構間寸法は2.0~2.2mである。遺物は土師器片、須恵器片などが出土している。

構列2(遺構137、138、139、140、133) 調査区の南東隅で検出した。ほぼ東西方向に伸びる。各遺構の平面形はほぼ円形を示す。直径は30~40cm、深さは14~23cmを測る。検



第15図 A区、第3面・掘立柱建物5・6 平・断面図

出面は T . P . 1.25 m である。遺構間寸法は約 1.8m である。埋土はオリーブ灰色粘質シルトである。掘立柱建物 4 と主軸方向が合うことから同時期に相当する。

柵列 3 (遺構 23、59、62、79、溝 38) 調査区の中央部で検出した。南北方向に伸びる。各遺構の平面形はほぼ円形を示す。直径は 20 ~ 30cm、深さは 6 ~ 24cm を測る。検出面は T . P . 1.32 ~ 1.42 m である。埋土は暗オリーブ灰色粘質土あるいは暗緑灰色粘質シルトである。溝 38 は柵列 3 に続く溝である。溝 38 の検出幅は 10 ~ 20cm、深さは 6cm を測る。埋土は暗緑灰色シルトである。遺物は出土しなかった。

柵列 4 (遺構 129、130、131) 調査区の中央部南側で検出した。南北方向に伸びる。各遺構の平面形は円形を示す。直径が 10 ~ 20cm、深さは 17 ~ 20cm を測る。検出面は T . P . 1.27 m である。埋土はオリーブ黒色ないしオリーブ灰色粘質シルトで炭化物を含む。遺物は出土しなかった。

耕作溝 調査区の中央部から東側で検出した南北方向、および東西方向に伸びる溝。南北溝は検出幅が 30 ~ 40cm、深さは 10 ~ 20cm を測る。検出面はおよそ T . P . 1.30 m である。溝の間隔は約 3.5m である。東西溝は検出幅が約 20cm、深さは 8 ~ 20cm を測る。溝の間隔は約 2.2m である。埋土は暗オリーブ灰色ないしオリーブ灰色粘質シルトである。出土遺物は土師器高杯、黒色土器片などである。検出面はほぼ平坦に整地されている。調査区の西側には耕作溝は見られず、小さな木杭跡が多く見られる。おそらく西側に向かってやや低くなるため、耕作域には適さなかつたものと思われる。

溝 18 調査区の南側で検出した。北東から南西に向かって低くなる自然地形に沿って、直線的に伸びる溝。検出幅は 0.5 ~ 1.0m、深さは 15 ~ 40cm を測る。検出面 T . P . 1.28 m である。埋土は上層がオリーブ黒色ないし暗オリーブ灰色粘質土、下層が暗緑灰色粘質シルトである。出土遺物は土師器、壺・高杯脚底部、須恵器杯身である。古墳時代後半に相当する。

溝 8、9、15 調査区の北側で検出した。溝 8、15 はやや西に約 15 度傾く南北溝で、溝 9 は溝 8、15 に直行する東西溝である。検出幅は 15 ~ 20cm、深さは 9 ~ 14cm を測る。検出面はおおよそ T . P . 1.35 m を測る。埋土は暗オリーブ灰色粘質土である。遺物は出土しなかった。耕作溝であると思われる。これらの溝は溝 18 と同様に自然地形に沿った方向で検出された。

土坑 93 調査区の中央部東側で掘立柱建物 4 の内側に形成された土坑である。検出形は南北に長く、ややひずんだ楕円形を示す。検出幅は長辺が 4.7m、短辺が 1.9m、深さは 50cm を測る。埋土は暗緑灰色粘質シルトおよびシルトである。出土遺物は黒色土器 A 類碗、土師質羽釜、須恵器壺、台付杯底部などである。須恵器台付杯は墨書き土器で、底部に「卑」あるいは「伊」と思われる文字が記されている。なお須恵器杯の内面底部がすれていることから、硯に転用していたものと思われる。

土坑 142 調査区の東側の側溝沿いで検出した平面形が長方形の土坑。検出幅は 1.4m、深さは 80cm を測る。平面形は長方形として検出しているが、後世の溝などで切られ変形しているもの

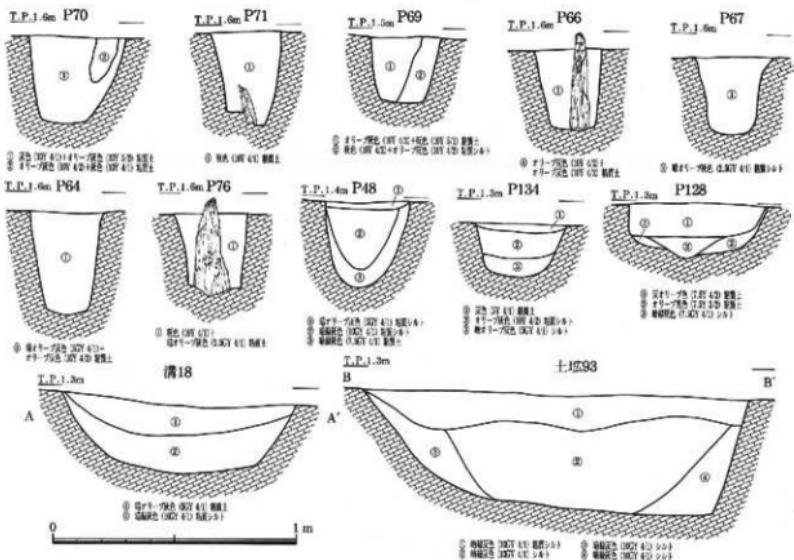
と思われる。本来は楕円形ないし円形の堀形で、おそらく素掘りの井戸であったと思われる。埋土は2層に大別することができる。遺構の断面実測図において下層の堆積状況の実測に欠損が見られたため一部復元している。1層(③～⑥)はおおむね暗オリーブ灰色ないし黒色粘質シルトで、井戸の廃棄後の埋め戻しの際に堆積したものと推測される。2層(⑦～⑨)は灰オリーブ色粘質土およびシルトで、井戸の機能時に堆積したものと推測される。遺物は1層から土師器長頸壺がほぼ完形で出土している。その他、須恵器杯身、土師器壺・高杯脚部などが出土している。2層からは須恵器甌、滑石製の有孔円盤、滑石製の小玉1個、須恵器杯身、土師器壺などが出土している。滑石製の小玉は須恵器甌の中から出土した。出土した遺物に完形品や石製品などが含まれることから、井戸を埋める際、なんらかの祭祀行為に関連して埋納されたものと考えられる。井戸の廃棄された時期は古墳時代後期に相当する。近接する溝18においても同時期の遺物が出土していることから、溝8、9、15および掘立柱建物5も同時期に相当する。

(杉本)

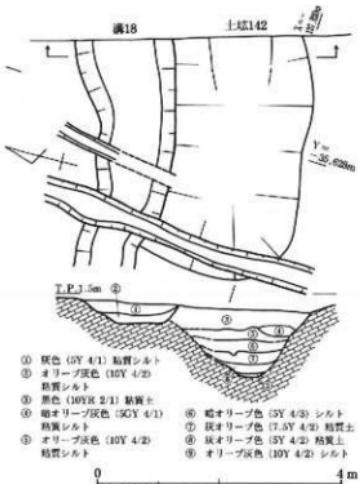
第3項 遺物

遺物の説明に入る前に、本報告書の遺物掲載の仕方について説明しておきたい。

この遺跡から出土した遺物の多くは小片であり、調査面積の割には図化に耐えられるものは少ない。しかも、A区からD区にかけての各面を覆う遺物包含層の内容は、第1面から第3面に至るまで、



第16図 A区、第3面・遺構断面図



第17図 A区、第3面・溝18・土坑142 平・断面図

同じ内容となっているので、見ずらくなっているが、ご了承いただきたい。

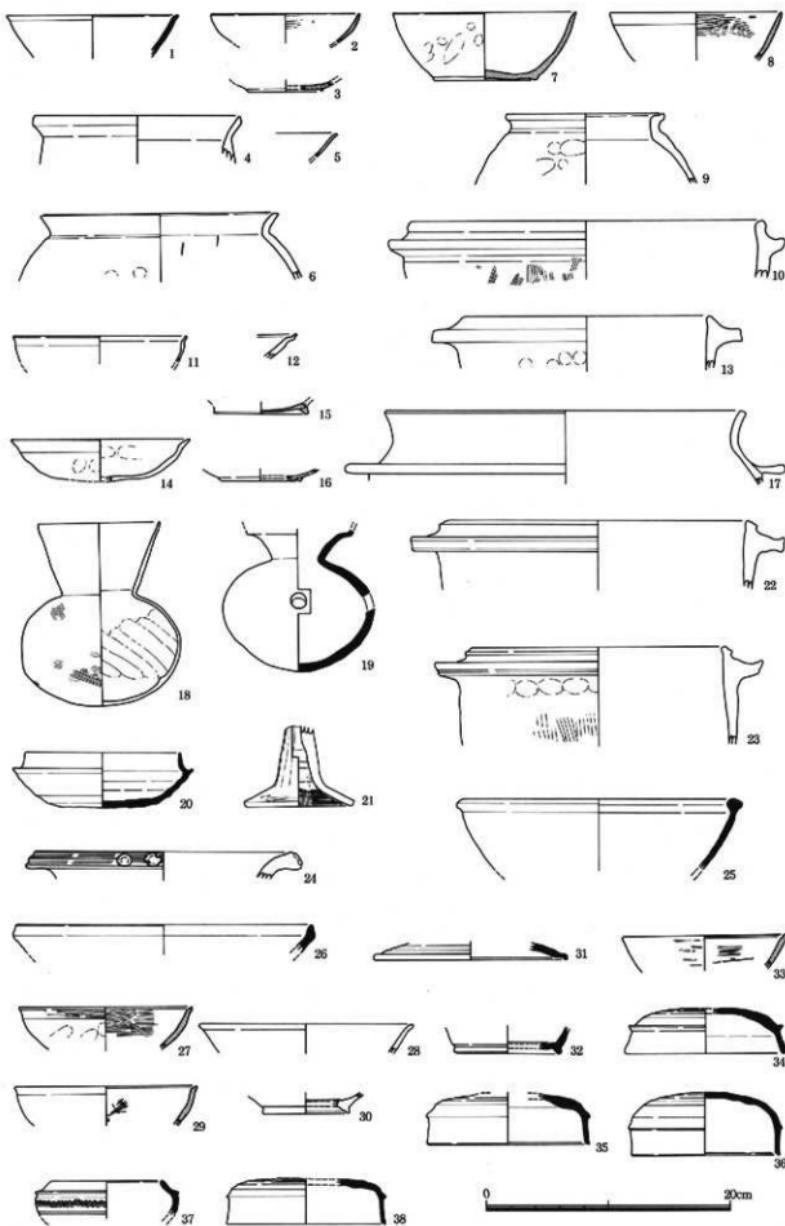
(1) 遺構出土

では、A区出土の遺物を説明することにしよう。この調査区ではコンテナ12箱分の遺物が出た。(1)～(17)は第2面で検出した遺構出土の土器である。(1)～(6)は土坑1から出土した。いずれも小さな破片であり、遺存状況はよくない。(1)は、須恵器の杯の口縁部。(2)・(3)は黒色土器A類の碗である。(4)・(6)は土師器の壺、(5)は灰釉陶器の口縁部である。(7)・(8)・(12)は土坑82から出土した。(7)・(8)は黒色土器A類の碗である。(7)の場合、表面のミガキはまったく観察できない。(9)の土師器の壺と(10)の土師器の土釜は溝71より出土した。後者は、口縁直下に鉛をつける形態で、菅原氏の分類による摂津C型に相当する。クサリ縛と思われる赤色砂粒が目立つ。外面には、縱方向の粗いハケ調整が施されている。このほかにも、(14)が土坑121、(17)が土坑42から出土している。(15)は掘立柱建物3のピット27から出土した黒色土器A類の碗の高台部である。この他にも、(11)が溝16、(13)が溝34、(16)が溝12からそれぞれ出土した。

(18)～(23)は第3面で検出した遺構出土の土器である。(18)～(20)は土坑142から出土した。(18)は土師器の壺であり、全体は非常に薄く作られている。(19)は須恵器の甌だが、口縁部は欠損する。体部にはヘラ記号が認められる。(20)は須恵器杯身の破片である。これらは、時期幅が見られるが、(20)がこの遺構の埋没時期を示すのであろう。また、(21)のような高杯脚部の破片が溝18から出土している。これらは古墳時代の遺構と考えられる。一方、(22)・

基本的に同じである。つまり各層の遺物を見ると、第1面の近世造構面をおおう包含層からも、縁軸陶器が出土している。逆に、第3面を覆う遺物包含層だからといって、残りがいいというわけでもないのである。そうなった要因としては、古い時期の遺物が後世の耕作等で巻き上げられたためということくらいしか、適当な解釈は見いだせない。遺構内の遺物を含め出土した破片が全体に小さいというのが、このことを示唆しているのかも知れない。

以上のような状況で、高柳遺跡の古墳時代や平安時代の様相を理解するためには、遺物に関しては、出土層位や遺構に関わらず、特徴的なもの、残りのいいものを掲載する必要があると判断した。包含層出土の遺物については、遺構面の時期を示していないことになり、各層とも



第18圖 A区、遺構・包含層出土遺物（1）

(23) に示した土釜が溝 21、が土坑 93 より出土している。

(2) 包含層出土

(24) ~ (38) は包含層出土の遺物である。第 1 面の上層からは、(24) ~ (26) が出土した。近世遺物も出ているが、図化はしなかった。(24) は、弥生土器の壺の口縁部の破片である。角閃石を含む、いわゆる生駒山西麓産の胎土をもつ。(25) は、篠窯で生産された鉢の破片である。体部から口縁部にかけては段を形成することなく続き、丸い口縁部をもって終わっている。(26) も同じ層から出土した東播系の鉢の破片である。非常に小さく口径は不正確。(27) は、第 2 面直上層出土の瓦器椀の小破片。口縁内面に沈線が施されている。(29) は黒色土器 B 類の椀である。口縁端部はやや外反する。(30) は縁釉陶器の底部で、高台は内側に段のつく輪高台である。

(31) と (32) は第 2 面の上層より出土した須恵器の蓋と杯である。

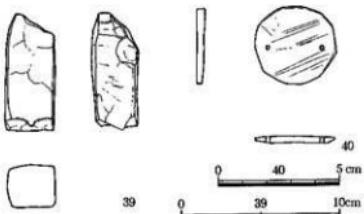
(33) は第 3 面の上層より出土した黒色土器 B 類の椀である。内外面に炭素が吸着している。

この調査区で注目されるのは、(34) 以下の古墳時代の須恵器である。(34) は蓋で、口縁部は外側に開き気味になり、端部は丸く終わる。外面には、やや外側に突きだした形の突帯が回る。(35)・(36)・(38) も蓋である。(36) は天井部が丸みをもっており、天井部から口縁部に移行するところにつく段はやや丸みをもっている。一方、(38) は天井部が平坦で、段は鋭利に作られている。(37) は有蓋高杯の破片である。立ち上がりは内傾し端部は丸く終わっている。受け部直下に波状文が施され、その下には 1 条の沈線がつく。色調は内外面とも灰色。これが有蓋高杯だとすると、大東市の堂山 1 号墳出土の須恵器に類似したものと認められる。小破片のため、器種としては杯身や鉢の可能性もないわけではないが、こうした器種が一般集落から出てくるとは考えにくい。ここでその性格を即断するわけにはいかないが、周辺に初期須恵器を保有する何らかの施設が存在していたことだけは指摘できよう。これらの須恵器は、TK 73 ~ 23 型式に併行する時期のものである。

寝屋川市域には、遺跡のように初期須恵器を出す遺跡が存在するので、今後はこれらの遺跡との関係も問題となつてこよう。

特殊遺物として、(39) が第 3 面上層の包含層出土の砥石、(49) が第 2 面土坑 142 出土の有孔円板である。径 3.3cm、厚さ 0.35cm を測る。

(福井田)



第19図 A区、出土遺物（2）

第2節 B区の調査成果

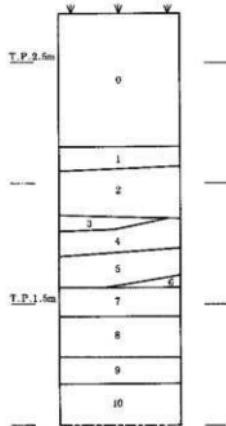
B区はA区の北側、C区の西側に位置する。北側を道路、東側および南側は水路によって区切られ、西側は民家に隣接する調査区である。面積は約380m²を測る。

遺構面は3面検出した。第1面では近世から中世の溝と不定形土坑などを検出した。第2面では平安時代中期から後期の溝と焼土坑などを検出した。第3面では平安時代中期の溝、焼土坑、不定形土坑などを検出した。各面を通して遺物を伴う遺構が少なく、性格を明確に把握できるような遺構はわずかであった。B区は後背湿地的な状況で低い位置に当たることから、自然地形に沿った溝、流路などが多く見られた。住居地や耕作地には適さなかったものと思われる。遺構番号は調査時に付けた番号をそのまま採用し、通し番号を付けている。

第1項 基本層序

B区は東側および南側を水路で区切られている調査区である。調査区の東側は旧古川の自然堤防状の微高地である。西側はやや微高地となっている。北側から南東側に向けて穏やかに低くなっている。B区内で堆積土層の状況は地点により若干異なるが、ほぼ平均的な堆積状況を示す位置をもってB区の基本層序とする。

0. 機械掘削土。現代の盛土および耕作土層。厚さは約55cm。1. 洪水砂層。厚さは8~10cm。近世陶磁器等の遺物を検出。2. 灰オリーブ色粘質シルト層。厚さは約20cm。3. 暗オリーブ灰色粘質シルト層。厚さは5~8cm。4. 暗灰黄色粘質シルト層。厚さは約10cm。2~4層はいずれも鉄分の沈着がみられる。中世から近世の耕作土層。上面が第1面に相当。5. オリーブ灰色粘質シルト。厚さは約13cm。6. 暗オリーブ灰色粘質シルト。厚さは5cm。焼失した平安時代中期の建物跡の整地層を含む。上面が第2面に相当。7. 灰オリーブ色粘質土層。厚さは14~20cm。8. オリーブ黒色粘質土層。厚さは10~20cm。炭化物を含む。西側に向けて徐々に薄くなる。9. 暗オリーブ灰色粘質土層。厚さは約12cm。炭化物を含む。西側に向けて徐々に薄くなる。平安時代中期の遺物包含層。上面が第3面に相当。10. 暗緑灰色粘質土層。厚さは16cm以上を測る。古墳時代の遺物を出土。



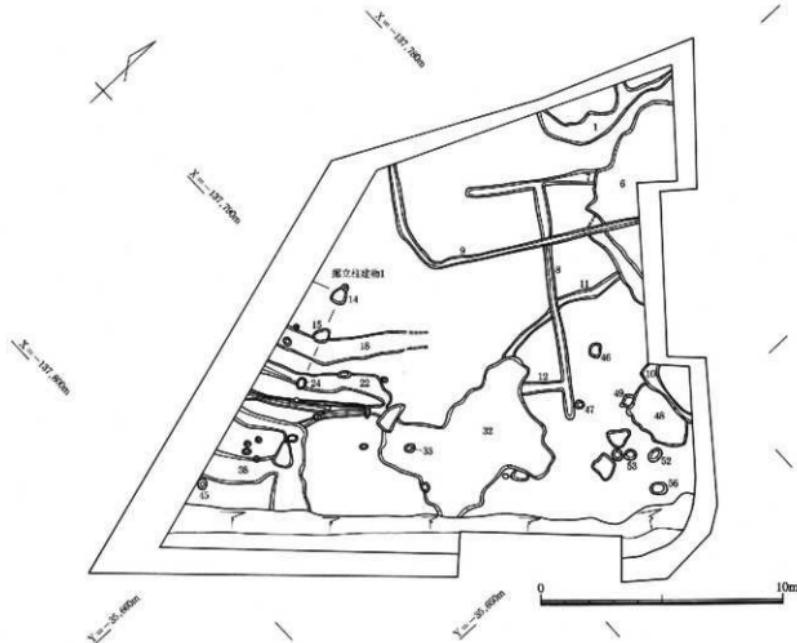
第20図 B区、基本層序模式図

第2項 遺構

(1) 第1面

第1面では中世から近世の遺構を検出した。主な遺構として調査区の西側を区切る水路と同一方向の溝状遺構、浅い窪地状の不定形土坑、溝および建物ピットなどである。検出面はT.P. 1.60 ~ 1.69 mを測る。地形的にはほぼ平坦である。

掘立柱建物1 調査区の西側中央部で検出した2間(2.0m)×1間以上の掘立柱建物。西側は調査区外になるため建物の全容を把握することはできなかった。主軸方向はN-25°-Wである。柱穴の平面形は丸みのある隅丸方形を示す。検出径は40~60cm、深さは4~22cmを測る。検出面はT.P. 1.62mである。埋土は上層が暗オリーブ色粘質シルト、下層がオリーブ黒色粘質土で炭化物を含む。遺物はピット24から須恵器甕、ピット15から瓦器碗などが出土している。
建物ピット(ピット46、47、49、52、53、56) 調査区の東側で検出した。復元はできなかつたが掘立柱建物の柱穴である。建物ピットの平面形は隅丸方形または円形を示す。検出径は30~



第21図 B区、第1面・全体図

46cm、深さは10～19cmを測る。検出面はT.P.1.68mである。埋土は暗オリーブ色粘質シルト、オリーブ褐色粘質シルトで炭化物を含む。遺物はピット46から瓦器碗、土師質甕片などが出土している。

土坑6、32、48 いずれも大きな不定形土坑で、浅い窪地状の堆積状況を示す。人為的な造構でない可能性もある。淀川や古川の氾濫により、調査地周辺が池や沼のように湿地化した名残りであるとも考えられる。土坑6は検出長が南北3.5mである。東側は調査区外に広がるため全容は不明である。深さは4cmを測る。検出面はT.P.1.64mである。埋土は暗オリーブ粘質シルトで鉄分の沈着が見られる。遺物は土師器甕片、灰釉陶器などが出土している。土坑32は検出幅が南北3.5m、東西3.4mに広がる不定形土坑で、深さは15cmを測る。検出面はT.P.1.58mである。埋土は暗オリーブ色粘質シルトで炭化物や土器の小片を含む。出土遺物は瓦器碗、土師器甕、小皿、須恵器瓶子などである。土坑48は検出形が変形した楕円形を示す。検出幅は長径が1.4m、短径0.8m、深さが13cmを測る。検出面はT.P.1.68mである。埋土は暗オリーブ色粘質シルトで炭化物や土器の小片を含む。

溝1 調査区の北西部で検出した溝状造構。ほぼ南北方向に伸びる。検出幅は0.3～1.1m、深さは10cmを測る。検出高はT.P.1.65mである。埋土は灰オリーブ色粘質土、暗オリーブ色粘質土である。自然な堆積状況を示す。遺物は出土しなかった。

溝10、11 調査区の北側で検出した溝状造構。溝11は東に約10度傾くが、ほぼ南北方向に伸びる。溝10はやや湾曲するが、東西方向に伸びる。検出幅は溝10が70cm、溝11が40cmを測る。深さは13～15cm、検出面はT.P.1.61～1.67mである。埋土は灰オリーブ色粘質シルト、暗オリーブ色粘質土で鉄分の沈着が見られる。出土遺物は土師器甕・鉢・皿などである。

溝7、8、9、12 調査区の西側を区切る水路に平行および垂直方向に伸びる溝状造構。溝9、7、12は水路と平行に伸びるもので、溝8はこれらの溝にはほぼ垂直に交差する。検出幅は22～35cm、深さは8～17cmを測る。検出面はT.P.1.64～1.66mである。埋土は暗オリーブ色粘質シルト、オリーブ黒色粘質土で鉄分の沈着が見られる。出土遺物は土師質羽釜片などがある。耕作溝であると思われる。

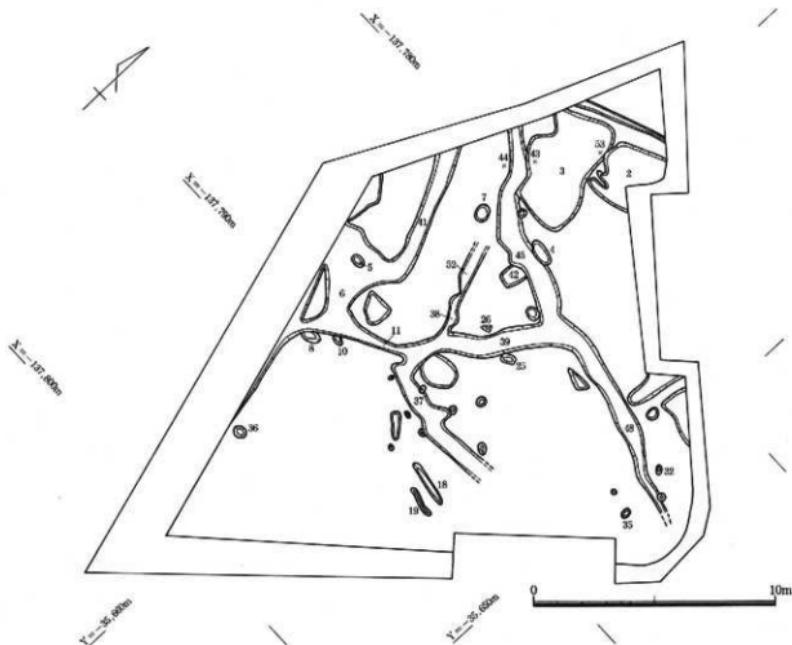
溝18、22、38 調査区の南西側で検出した溝状造構で、調査区の東側を区切る水路と平行方向に流れるもの。北東から南西方向に伸びる。検出幅は0.7～1.3m、深さは5～11cmを測る。検出面はT.P.1.62mである。埋土は暗オリーブ色粘質シルト、灰色粘質土で鉄分の沈着が見られる。出土遺物は土師器甕片、須恵器甕片などである。これらの溝状造構は浅く、一時的に流れれた自然流路であると思われる。

調査区の西側および北側を区切る水路は、古い絵図（寝屋川および古川古図）などにも水路として記されている。古川を船が行き交うことの多かった近世には機能していたものと思われる。耕作溝および自然流路は水路が機能していた時期ものである。

(2) 第2面

第2面では地形的に低く後背湿地状である。北側の微高地から南側に向けてやや傾斜している。東側はやや谷状に低くなる。このような自然地形に沿って流れる溝状遺構と焼土坑などを検出した。第2面の遺構の検出面は T.P. 1.40 ~ 1.50 m である。

土坑3(遺構53、44、43) 調査区の北部で検出した。土坑の平面形は扁平した方形を示す。検出長は東西が 5.0m、検出幅が 2.5m、深さは 4 ~ 10cm を測る。検出面は T.P. 1.44m である。埋土はオリーブ黒色粘質シルトで炭化物、焼土層を多く含む。特に遺構の南側で炭化物や焼土層が多く見られた。炭化物は層状に堆積している。出土遺物は土師質壺・鉢・皿・杯・碗、黒色土器碗、須恵器壺などである。埋土中には黒色土器や土師器などの小片が多く含まれている。土器焼成土坑ではないかと思われる。遺構の北側では土師器壺、須恵器壺片等が出土している。遺構53では須恵器壺の体部片および土師器壺片を検出した。遺構44では須恵器壺体部片を検出した。遺構53の須恵器壺体部片と遺構44の須恵器壺体部片が接合し、同一固体であることが判った。しかしながら、体部片のみであったため実測することはできなかった。遺構43ではほぼ

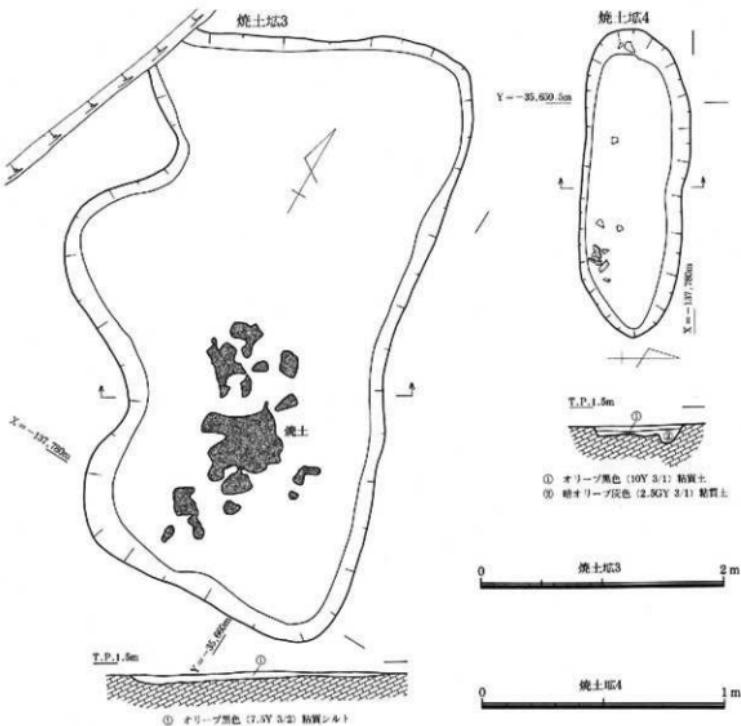


第22図 B区、第2面・全体図

完形の土師器甕と土師器碗片等を検出した。遺構北側の土器は南側の焼土や炭化物の堆積時、あるいはそれ以前に何らかの理由で埋納されたものと思われる。平安時代中期に相当する。

土坑4 調査区の北側で土坑3に近接して検出した。土坑の平面形はやや細長い楕円形を示す。検出長は南北が1.28m、検出幅が45cm、深さは3~8cmを測る。検出面はT.P.1.43mである。埋土は上層がオリーブ黒色粘質土、下層が暗オリーブ灰色粘質土で炭化物や焼土層を多く含む。出土遺物は黒色土器甕、土師器皿、杯などである。遺構内の焼土層は土坑のほぼ全域で検出した。炭化物は筋状に焼土層を全体に薄く覆っている。焼土層には炭化物のほか、須恵器や土師器などの小片なども多く見られた。平安時代中期に相当する。

土坑2 調査区の北側で検出した不定形土坑である。検出形は浅いほぼ四角形を示す。検出幅は南北が5.3m、東西は調査区の東側に伸びているため全容は不明である。深さは12~20cm、

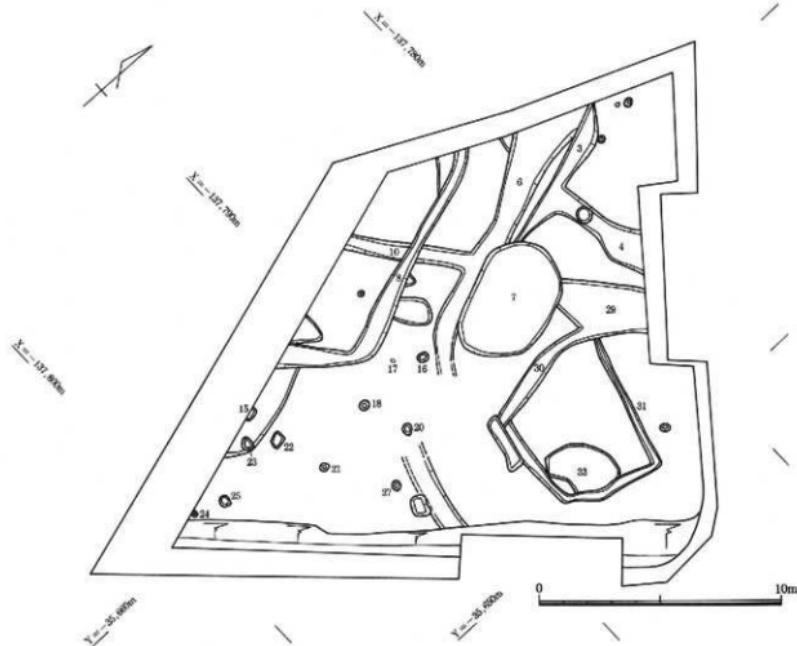


第23図 B区、第2面・土坑3・4 平・断面図

検出面は T.P. 1.44m を測る。埋土はオリーブ黒色粘質土である。遺物は須恵器杯蓋摘み部、黒色土器 A 類碗、土師器皿・小皿・碗などである。

その他の焼土坑 土坑 42 は溝 45 を挟んで対置する土坑 4 に続く遺構である。検出幅は 78cm、深さは 16 ~ 18cm を測る。埋土は土坑 4 と同様に炭化物を含み層状に堆積する。焼土層には炭化物に混じって土器片が多く見られた。出土遺物は土師器皿・杯などである。土坑 7 は埋土に赤く焼けた炉の壁面と思われる焼土塊を多く含むものである。その他、焼土層、炭化物などを含む遺構も幾つか見られることから、土器焼成遺構が点在する生産域であると思われる。

建物ピット（ピット 5、8、32、35、36） 調査区の東側、および西側で検出した。掘立柱建物の柱穴であるが、建物を復元するには至らなかったもの。建物ピットの平面形はおおむね円形ないし梢円形を示す。検出径は 40 ~ 50cm、深さは 10 ~ 55cm を測る。検出面は T.P. 1.42 m である。埋土は上層がオリーブ黒色ないしオリーブ灰色粘質シルト、下層がオリーブ黒色粘質土である。出土遺物は黒色土器 A 類碗、B 類碗、土師器甕片、皿、綠釉陶器片などである。ピット 35 は検出形が梢円形を示すもので、検出径が 40cm、深さが 55cm を測る。埋土はオリーブ黒色粘質土で、



第24図 B区、第3面・全体図

炭化物、焼土層などを多く含む。柱根を抜き取った跡が見られる。出土遺物は黒色土器B類碗、綠釉陶器片などである。

溝18、19 調査区の南側で検出した溝である。東西方向を向き、ほぼ平行方向で検出した。検出幅は30～40cm、深さは10～20cmを測る。溝と溝の間隔は約40cmである。検出面はT.P.1.47mである。埋土はオリーブ灰色粘質シルトで、炭化物を多く含む。耕作溝であると思われる。遺物は須恵器片などである。

溝状遺構（遺構11、39、45、48、6、37、38、41、52） 調査区全域に広がる溝状遺構。調査区全体が後背湿地状であるため、これらの溝状遺構も一時的な自然流路であろう。埋土はオリーブ黒色シルト層と粘土層の互層を成している。一過的な流水と溜水の時期があったものと思われる。出土遺物は土師質甕・碗・小皿、黒色土器碗などである。

第2面では炭化物および焼土層を含む土坑を幾つか検出した。これらの土坑は土器焼成遺構であると考えられる。地形的にB区は窪地状に低い位置に当たるため、居住域ではなく生産域として利用されていたと考えられる。

（3）第3面

第3面では土器と焼土層、炭化物などを多く含む焼土坑や建物ビット、古墳時代の遺物を含む土坑、自然地形に沿って流れる溝などを検出した。検出面はT.P.1.23～1.35mである。調査区内は北側から南側に向けて、さらに南西側にかけてゆるやかに低くなる。

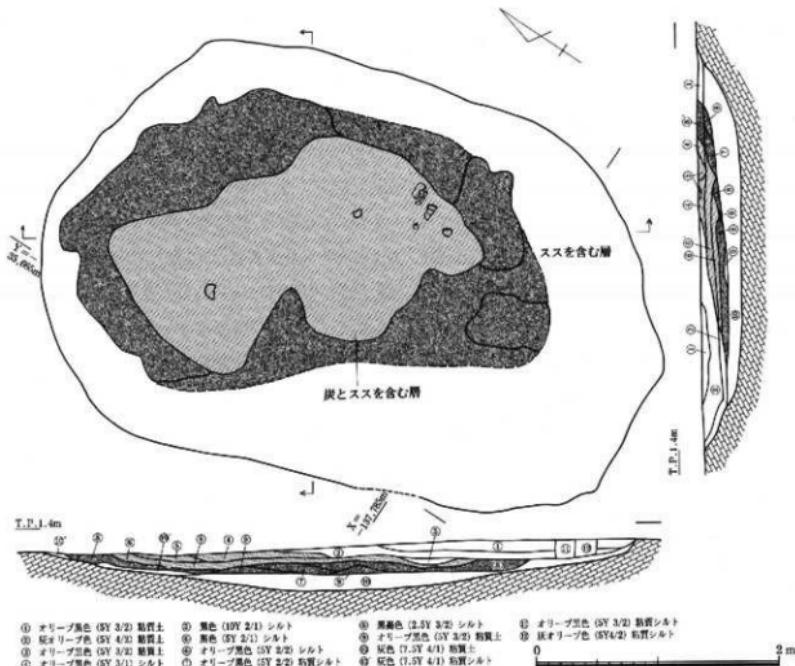
土坑7 調査区のほぼ中央部で検出した検出形が橢円形を示す焼土坑。検出長は南北5.2m、検出幅は東西3.4m、深さは40cmを測る。検出面はT.P.1.33mである。全体に焼土層、炭化物を多く含む。焼土坑の堆積層を大別すると、Ⅰ層（4.5,6,6'）炭化物と焼土を含むオリーブ黒色シルトまたは黒色粘質シルト層、Ⅱ層（7,8,9）焼土と灰を含む黒褐色シルト層、Ⅲ層（10,10'）焼土、炭化物を含まない灰色粘土層に分けられる。焼土坑の中央部は①炭化物と焼土を含むオリーブ黒色粘質シルト層がレンズ状に互層となって幾重にも堆積している。層厚は2～8cmである。この堆積層中に多くの遺物が含まれている。①の下層および周辺に②焼土と灰を含む黒褐色シルト層が広がっている。層厚は2～6cmであるが、周辺部に近い所ほど層が厚く、中央部のⅠ層の下層では薄くなる。灰層はレンズ状に幾重にも堆積している。Ⅰ層とⅡ層の下層およびその周辺にはⅢ層の焼土、炭化物を含まない灰色粘土層が見られる。遺構中央部の下層および遺構周辺部に向かって全体に広がっている。層厚は中央部で8cm、周辺部で2cmを測る。粘土を貼って床状にしていたものと思われる。焼土坑内の北部で②と③の境目あたりに、橙色の焼けた粘土塊がわずかに含まれる。①ないし②から遺物として黒色土器A類杯、土師質甕・碗・杯・皿・鉢・羽釜・施釉陶器、綠釉陶器、須恵器片などが炭化物や焼土塊とともに数多く出土している。平安時代中期に相当する。

このような焼土坑は同時期の遺構を伴う寝屋川市の神田東後遺跡で検出されている。神田東後遺跡は古川を挟んで高柳遺跡の南東方向約400mに位置する遺跡で、平安時代の遺構、遺物を多量に検出している遺跡である。神田東後遺跡において検出された焼土坑は黒色土器焼成の灰原で

ある可能性が高いと考えられている。今回検出した焼土坑7からは黒色土器と土師器皿が多く出土している。また、包含層からふいご羽口片が出土していることから、土器焼成遺構であると考えられる。

土坑 33 調査区の東側で検出した土坑。検出形はやや角を持つ楕円形を示す。検出長は1.85m、検出幅は2.0m、深さは15cmを測る。検出高はT.P. 1.27mである。埋土は上層がオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を含む。下層はオリーブ灰色粘質土である。出土遺物は須恵器堤瓶、長頸壺などである。須恵器長頸壺は遺構のほぼ中央部で押しつぶされたような状況で検出した。また、須恵器堤瓶は遺構の南側縁で検出された。古墳時代後期に相当する。

ピット 堀立柱建物の柱穴あるいは柵列と思われるものである。主に調査区の南側で検出した。ピット15、22、25は平面形が方形を示す建物ピットである。検出幅は一辺が35~50cm、深さは13~32cmを測る。埋土は灰色粘質土およびオリーブ灰色粘質シルトで炭化物を含む。ピット16、20、



第25図 B区、第3面・土坑7 平・断面図

27、21は平面形がほぼ円形を示す。検出径は35~42cm、深さは6~25cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトあるいは灰オリーブ色粘質シルトで炭化物を含む。遺物は出土しなかった。ピット17、18、21およびピット23、24は平面形がほぼ円形を示す。検出径は13~30cm、深さは6~22cmを測る。埋土は暗オリーブ灰色粘質シルトあるいは灰オリーブ色粘質シルトで炭化物を含む。遺物は出土しなかった。

溝31 調査区の東側で検出したコの字型に屈曲する溝である。ほぼ東西方向に6.0m伸びた後南側に屈曲する。そして4.5m伸びた後さらに西側に屈曲して5.0m伸び、南北方向に伸びる溝30に続く。溝31の検出幅は32~38cm、深さは11cmを測る。溝の断面形はゆるやかなU字形を示す。埋土はオリーブ黒色粘質土である。遺物は出土しなかった。やや特異な形態を示すが性格は不明である。

溝3、4、6、8、10、29 調査区の西半分で検出した溝である。主に北東から南西方向に伸びる溝4、10、29と、これらの溝に直行して伸びる溝3、6、8である。検出幅は0.7~1.0m、深さは11~18cmを測る。埋土は暗オリーブ灰色粘質シルトである。検出した溝は相互に交差しているが、自然地形に沿って流れる一時的な流れであると思われる。出土遺物は北東から南西方向に向けて流れる溝10から須恵器杯蓋などがある。古墳時代後期に相当する。

第3面では主に平安時代中期に相当する焼土坑と古墳時代の遺物を含む土坑、溝などを検出した。第2面同様、顕著な建物跡が見られないことから、居住域から外れ土器焼成遺構を伴う生産域であったと考えられる。

(杉本)

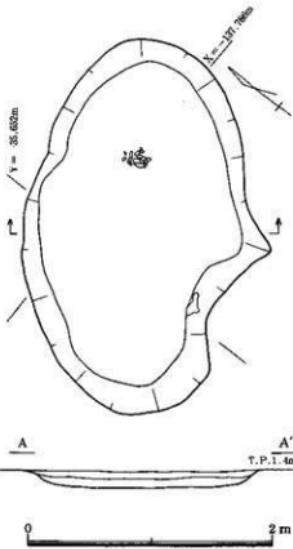
第3項 遺物

B区からは、コンテナにして6箱分の遺物が出土した。

(1) 遺構出土

(41)・(42)は第2面土坑2の土器である。(42)は黒色土器A類の底部である。(43)~(46)は土坑3から出土した。(43)は土師器の皿、(44)は黒色土器A類の椀である。(45)は土師器の杯で、底部から口縁部に移行するところで大きく屈曲する点が特徴。(46)は土師器の壺の完形品である。口径12.0cm、器高7.0cmを測り、口縁端部は平坦気味に終わっている。頸部から少し下がったところに段が認められる。外面はナデにより調整されている。

(47)~(49)は、土坑42出土の土師器皿である。いずれも、口縁端部はつまみ上げられて終わっている。ま



第26図 B区、第3面・土坑33 平・断面図

た、(51)は土坑4から出土した土師器の皿である。

ピットから出てきたのが(50)・(52)・(53)・(54)である。それぞれ、ピット36・25・32・26からの出土である。そのうち、(54)は灰釉陶器の底部である。高台から底面にかけての部分に、釉は施されていない。

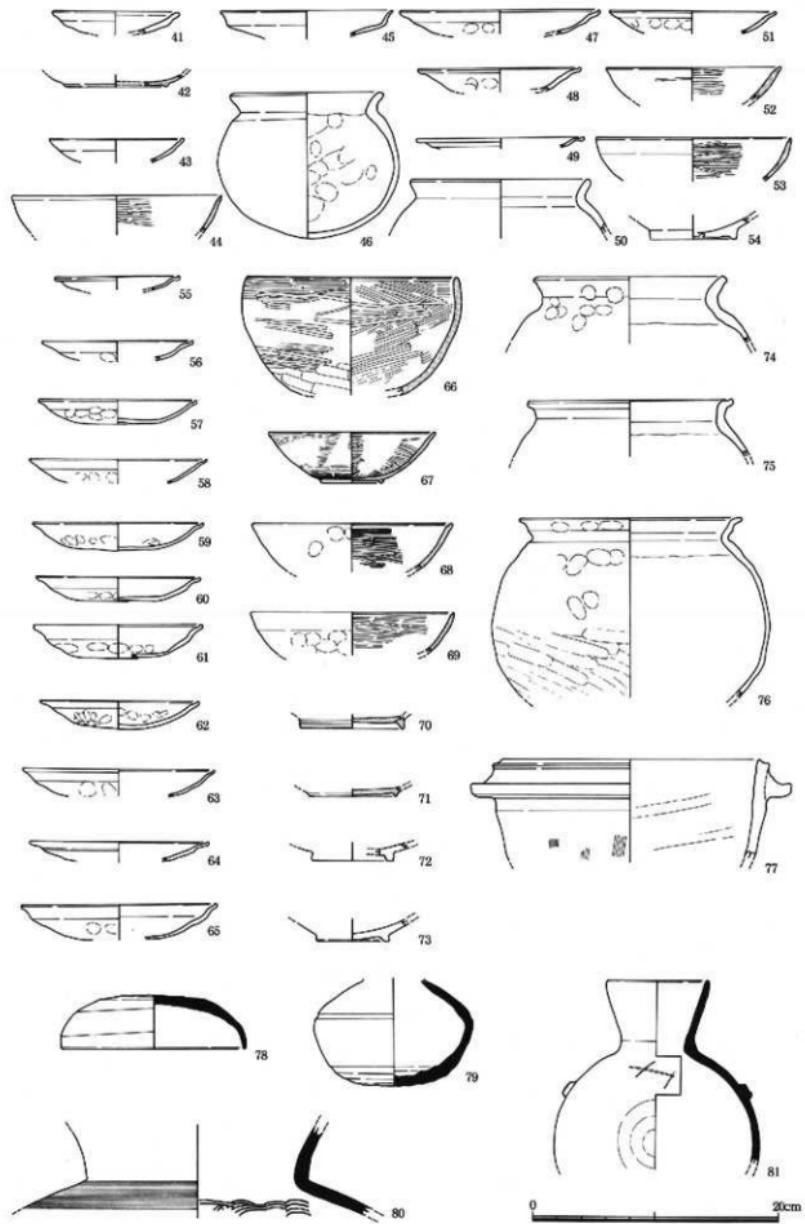
(55)～(81)は第3面で検出した遺構から出土した。(55)～(76)は土坑7の土器である。(55)・(56)は土師器の皿、(57)～(65)は土師器の杯である。口縁部は、すべて強く横ナデされ、端部はつまみ上げられている。(66)は黒色土器A類の鉢である。二次的に火を受けたため、表面は土師器のようになっている。画面ともに、ていねいにミガキがかけられてある。(67)～(71)も黒色土器であるが、火を受けたためか、炭素はとんてしまつて、一見すると土師器のように見える。高台は、比較的高いもの(70)と低いもの(71)がある。(72)は緑釉陶器の底部である。高台の内面から底部にかけての部分には、釉がかけられていない。京都系のものと思われる。(73)も緑釉の底部と考えている。二次的に火を受けているため、釉の色が黒色になっている。釉は高台の内側から底部にかけては認められない。(74)～(76)は土師器壺の破片である。口縁部の形態にはバリエーションがある。(74)の場合は丸く終わっている。(75)の口縁部では、上面が強いナデによってくほんでいる。一方、(76)では口縁部がナデにより大きく外反している。(77)は土釜である。鍔から口縁部にかけては煤が付着している。この他、写真のみの掲載となつたが、(274)のような焼土塊もいくつか出土している。スサを含んでいる。この遺構の時期であるが、土師器の皿の口縁部の形態や黒色土器の様相より、9世紀後半から末頃に比定されるものと考えておきたい。

(78)は溝10より出土した須恵器の杯蓋のほぼ完形品である。(79)～(81)は土坑33から出土した。(79)は焼きが甘く、瓦質になっている。(81)の提瓶は、体部外面上半と口縁部内面に自然釉ならびに窯壁の一部と思われるものが付着している。胎土は粗く、体部上面にヘラ記号が付されている。

(2) 包含層出土

(82)～(86)は第1面上面の包含層出土である。(82)は須恵器の鉢の口縁部片である。口縁部を形成しない形態で、端部は外側にわずかに拡張しながら尖り気味に終わっている。篠塚産と思われる。(83)は弥生土器壺の口縁部片である。口縁端部は拡張し、凹線が施され、円形浮文がつく。口縁部上面には円形の刺突文が施され、こちらは全周するものと思われる。生駒産西麓産の胎土。(84)は口径11.6cmを測る陶器片である。口縁部は逆L字形を呈する。产地等は不明である。(85)は緑釉陶器の底部。形態からは京都系のものと思われる。軟質で釉はとんてしまつている。高台は削りだして作られた、いわゆる蛇の目高台である。(86)は白磁碗の底部である。見込みの部分に1条の沈線が走る。

(87)・(88)は第2面上層から出土した。(87)は灰釉陶器の口縁部片である。口縁端部はわずかに外反している。(88)も灰釉陶器である。高台は断面が方形である。釉薬はハケにより



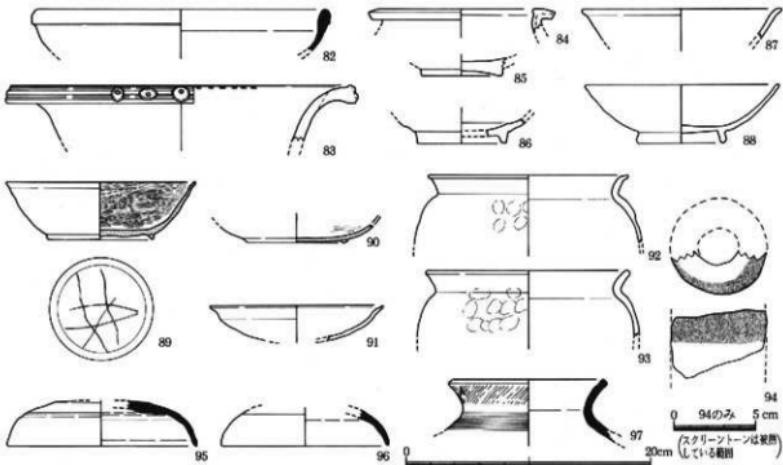
第27図 B区、遺構出土遺物

体部内外面に施されているが、高台内面から底部にかけてはかかっていない。底部内面には重ね焼きの痕跡が認められる。黒鉢 90 号窓式の特徴を有する。

(89)～(97)は第3面の上層の遺物包含層である。(89)は黒色土器であるが、二次的に火を受けており、炭素は吸着していない。底部外面には、図示したようなヘラによる沈線が施されている。(90)も炭素がとんでもしまった黒色土器である。内面には、緻密にヘラミガキが施されている。(91)は土師器の杯。口縁端部はわずかに肥厚している。(92)・(93)は土師器の壺である。

興味深いのは(94)のようなフイゴの羽口の破片が出土した点である。復元すると、径 6cm になるが、残存するのはそのごく一部である。図の上面には長さ 2cm にわたって、火を受けた痕跡が残っている。フイゴの羽口の出土は、この遺跡の特徴を考える上で、小さいながらも貴重な視点を提示したと言える。

(96)・(97)は第3面の上層から出土した。(95)は側溝から出土した須恵器の蓋である。先に示した造構に伴うものなのである。(福宜田)



第28図 B区、包含層出土遺物

第3節 C区の調査成果

C区は寝屋川市立第九中学校の東側に位置する。調査区の西側及び南側は水路で区切られる調査区で、高柳遺跡の調査範囲の中で最も北側に位置する。面積は約 1170 m²を測る。

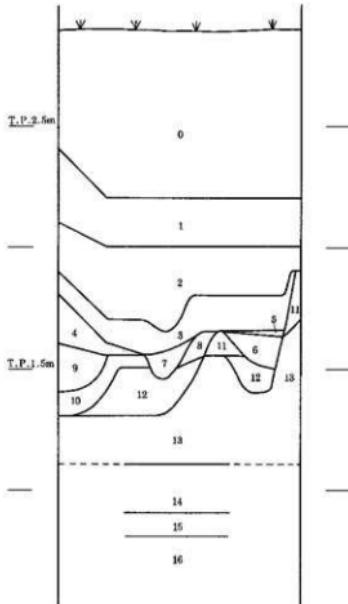
遺構面は3面にわたり検出した。第1面では調査区南側で中世から近世の耕作跡を検出した。第2面では調査区のほぼ中央部で平安時代中期以降の溝、建物跡、平安時代中期の土坑などを検出した。第3面では南側で平安時代中期の建物、土坑などを検出した。また、調査区の北側から弥生時代後期の竪穴住居を検出した。C区は全体に遺構密度が希薄であるため、遺構面を決定するのに困難を伴った。また、部分的に掘削深度の違いから同一面で時期の異なる遺構を検出しているところがある。遺構番号は遺構面ごとに通し番号を付けている。

第1項 基本層序

C区は北東側を寝屋川市立第九中学校および民家で、西側を南北方向に流れる水路で、南側を東西方向に流れる水路で区切られる調査区である。北側は公園になっている。調査区の形はやや歪みのある平行四辺形を示す。地形的には調査

区中央部あたりが谷状にやや低くなっている。中央部より北側は微高地で徐々に高くなる。中央部より南側は谷状地形から堤防状にやや高くなるが、以南は徐々に低くなる。設置時期は定かではないが、調査区南側を区切る水路の自然堤防が見られる。C区内では堆積状況が地点により異なるため、模式的に堆積状況を示し、これをもってC区の基本層序とする。

0. 機械掘削土。盛土および現在の耕作土層。下層に洪水砂層が見られる。厚さは約 70cm。1. オリーブ黒色粘質シルト層。厚さは 10 ~ 30m。近世から中世の耕作土層。上面が第1面に相当。2. 灰オリーブ色粘質シルト層。厚さは 10 ~ 35cm。調査区中央部は谷状地形を示すため、やや深くなる。3. 灰オリーブ色およびオリーブ灰色粘質シルト層。厚さは 5 ~ 20cm。中央部から南側で厚くなる。調査区北側で平安時代中期以降の遺構を検出。上面が第2面に相当。4. オリーブ灰色粘質シルト層。中央部から北側に見られる上層で、北側に向かって堆積が厚くなる。厚



第29図 C区、基本層序模式図

さは約 20cm。5. 暗オリーブ灰色粘質シルト層。調査区の南側に見られる土層。層全体に炭化物を含む。厚さは 2 ~ 5cm。平安時代中期の集落が廃絶した後の整地層。6. オリーブ黒色あるいは暗オリーブ灰色粘質シルト層。調査区の南側に見られる土層。層全体に炭化物を含む。南側に向かって厚くなる。厚さは 10 ~ 15cm。平安時代中期の遺構を検出。上面が第 3 面に相当。7. オリーブ褐色粘質土層。調査区中央部の谷状地形内の堆積層。厚さは約 10cm。8. 暗オリーブ灰色粘質シルト層。中央部谷状地形の南側に見られる土層で、南側に向かって厚くなる。厚さは約 10cm。9. 茶褐色粘質シルト層。調査区の北側に見られる土層で、弥生時代の堅穴住居のベース層。厚さは約 10cm。10. 灰オリーブ色粘質土層。調査区の北側に見られる土層。厚さは 5 ~ 20cm。11. 灰色粘質土層。南側の自然堤防上に見られる土層。厚さは 5 ~ 20cm。12. 灰オリーブ色粘質シルト層。調査区の中央部および南側で部分的に見られる堆積層。厚さは 5 ~ 20cm。13. 暗緑灰色粘質土層。調査区全域で見られる下層堆積層。厚さは 20 ~ 60cm。14 ~ 16 は調査区の中央部でトレーン調査を行った際に確認された堆積層。いずれも水平堆積を示す。14. 緑灰色粘質土層。層の下層に炭化物のラインが入る。厚さは約 20cm。15. 暗オリーブ灰色粘質土層。層の下層に炭化物のラインが入る。厚さは約 20cm。16. 暗オリーブ灰色粘質土層。厚さは 10cm 以上を測る。

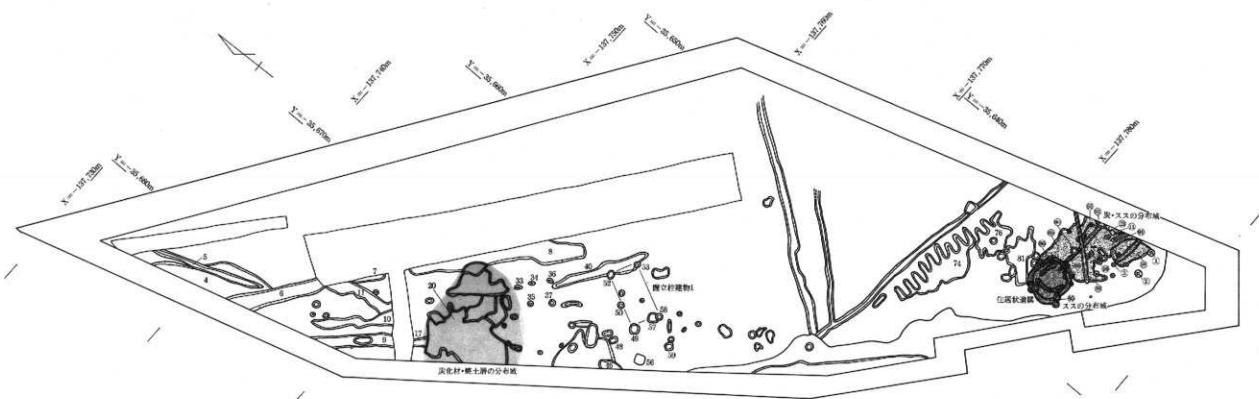
第 2 項 遺構

(1) 第 1 面

調査区の南東側で中世から近世の耕作跡、井戸などを検出した。耕作跡の検出面は T.P. 1.90 ~ 2.00m である。平坦な地形を示す。

第 1 面の上面は厚い洪水砂層で覆われている。洪水砂層を取り除くと幅 50cm ほどの畝跡が見られた。また、畝溝の跡が断面観察においても顕著に現れている。調査区の中央部では東北から南西方向に伸びる畦畔が検出された。畦畔は調査区の南側を区切る水路に垂直になるように設定されている。畦畔の高さは 10cm、検出幅は 40cm を測る。畦畔に沿って杭列が伸びている。杭は径 5 ~ 10cm、杭間は 50 ~ 70cm を測る。耕作地の境界を示すものと思われる。杭列に隣接して素掘りの井戸が見られる。井戸の検出径は 1.0m で埋土中から近世の瓦等が出土している。おそらく井戸が廃棄された際に混入したものと思われる。その他の遺物として青磁碗片、陶磁器片などが出土している。杭列の西側には畦畔と同一方向、また南側の水路に対して垂直に伸びる耕作溝が見られる。耕作溝はやや東に約 40 度傾くものである。検出幅は 20 ~ 30cm、検出長は 3 ~ 8 m を測る。耕作溝間は約 70cm である。埋土は灰オリーブ色ないしオリーブ灰色シルトで、上層の洪水砂が入る。耕作溝内から遺物は検出されなかったが、包含層から近世陶磁器、青磁、白磁碗、瓦質炮烙、上師質羽釜などが出土している。

耕作溝は南面する水路に規制されており、水路は遅くとも近世には設置されていたと思われる。上層を覆っている厚い洪水砂は 1802 年の「点野・仁和寺切れ」の大洪水に伴うものと推測される。



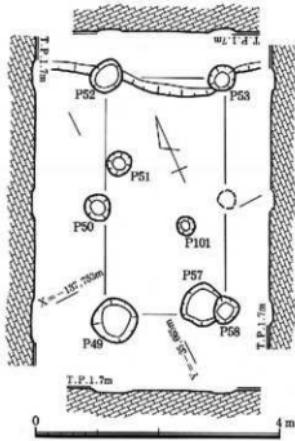
(2) 第2面

第2面では調査区の中央部あたりでの溝、建物跡、建物ピット、土坑などを検出した。南側の一部では粘土取り跡を検出した。調査区の北側は極端に遺構が希薄となる。さらに一部で深く掘削した為、下層の平安時代中期の遺構も同時に検出している。検出面はT.P. 1.53 ~ 1.67mを測る。地形は北側の微高地から南側に向かって低くなる。また、中央部がやや谷状に低くなっている。

掘立柱建物1 (ピット49、50、52、53、58) 調査区の中央部よりやや北西側で検出した。1間(2.0m) × 2間(3.8m)の南北棟。柱間寸法は桁行が1.9mを測る。主軸方向はN-30°-Wである。柱穴の平面形はほぼ円形を示す。検出幅は径35~50cm、深さは4~8cmを測る。検出面はT.P. 1.66mである。埋土は灰オーリーブ色シルトである。遺物は出土しなかった。

建物ピット 主に調査区の北西部で検出した。明確に掘立柱建物として復元できなかったが建物の柱穴を幾つか検出した。建物ピットの平面形は円形ないし隅丸方形を示す。ピット48、59は掘立柱建物の南西側に近接する建物ピットである。柱穴の検出径は50~80cm、深さは3~5cmを測る。検出面はT.P. 1.68mである。埋土はオーリーブ褐色あるいは灰オーリーブ色粘質シルトである。遺物は出土しなかった。ピット33、34、36、37、35は溝8の南西部に位置する建物ピットないし柵列である。柱穴の平面形は円形ないし梢円形を示す。検出径は22~36cm、深さは4~12cmを測る。検出面はT.P. 1.68mである。埋土は黄褐色あるいは灰オーリーブ色シルトである。遺物は出土しなかった。近接する溝8および溝状遺構40の伸びる方向とほぼ同一方向を示す。

溝状遺構 調査区の北西部で検出した。北西から南東側に向かって伸びるもの。地形的に北側の微高地から南側に向かって低くなっているため、自然地形に沿って流れているものであろう。溝状遺構6、7、8は擾乱により分断しているが、同一の遺構である。大半を擾乱により欠損するが、検出幅は1.0~1.6m、深さは10~30cmを測る。検出面はT.P. 1.60~1.67mである。埋土はにぶい黄褐色シルトあるいは暗灰黄色シルトである。遺構の断面形は穏やかなU字形を示す。遺物は緑釉陶器片、白磁碗高台、瓦器碗高台片、須恵器壺片などが出土している。溝状遺構40は溝状遺構8の南側で検出した。検出幅は0.6~1.0m、深さは6cm、検出高はT.P. 1.67cmを測る。埋土はオーリーブ褐色粘質シルトである。遺構の断面形は浅いU字形を示す。遺物は出土しなかった。溝は北西から南東方向に向かって伸びるもので、近接する溝状遺構8とはほぼ同じ方向を示す。溝状遺構10は溝



第31図 C区、第2面・掘立柱建物1
平・断面図

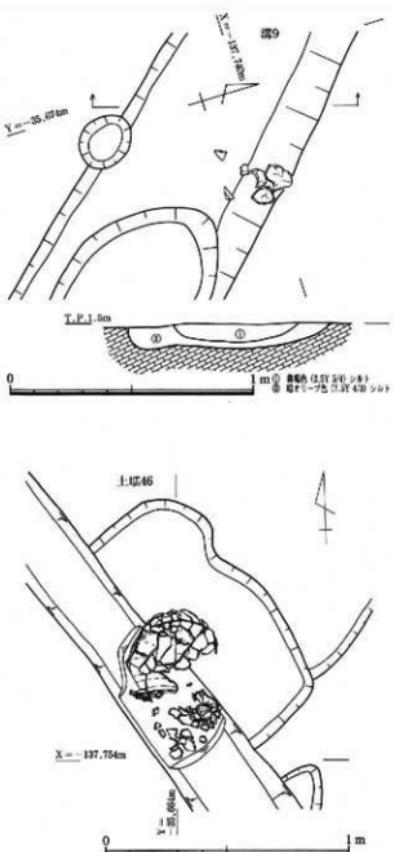
状遺構 6 の南側で検出した。検出幅は 58cm、深さは 10cm、検出面は T.P. 1.52m を測る。埋土は灰オリーブ色シルトである。遺物は出土しなかった。調査区の北側で検出した溝 5、11 は、北北西から南南東方向に向かって伸びるもの。溝 5 は検出幅が 40cm、深さは 15cm、検出面は T.P. 1.60m を測る。溝 11 は検出幅が 60cm、深さは 11cm、検出面は T.P. 1.52m を測る。埋土は灰オリーブ色シルトである。いずれも遺物は出土しなかった。他の溝状遺構とは方向が異なり、遺構の切り合い関係から溝状遺構 6 に先行するものである。溝 9、17 は溝状遺構 10 の南側で検出した。検出幅は 0.9m、深さは 5 ~ 10cm を測る。検出面は

T.P. 1.46 ~ 1.49cm でやや低い位置で検出した。埋土は黄褐色ないし暗オリーブ色シルトである。出土遺物は弥生土器壺片である。

東西溝 調査区の中央部で真西方向に伸びる溝を検出した。検出幅は 60cm、深さは 20cm を測る。この溝の南側はやや高くなり遺構が見られるが、北側は谷状地形を示し、遺構は極端に希薄となる。東西溝は区画溝であろう。現在、調査区の西側を区切る水路は矢板で区切られているが、整備が進む前の水路の東肩を検出している。東西溝はこの水路に流れ込む溝である。溝内から遺物は出土しなかった。

土坑 46 調査区の北西部で西側側溝に切られる形で検出した土坑である。平面形はやや歪んだ方形を示す。検出幅は 1.1m、深さは 20cm、検出高は T.P. 1.65m を測る。埋土はオリーブ褐色粘質シルトである。出土遺物は土師器鍋と把手付鍋が土坑の中央部から 2 個重なって出土した。鍋は上を向いて重ねて設置されていたものと思われる。また、鍋の体部に二次的に火を受けるなどの使用した痕跡が見られないことから、何らかの祭祀の為に埋納したものと思われる。平安時代中期に相当する。

粘土取り跡（遺構 74、76、81） 調査区



第32図 上・C区、第2面・溝9 平・断面図
下・同・土坑46土器出土状況

の中央部付近で多くの突起状の堀形をもつ不定形の粘土取り跡を幾つか検出した。突起状の堀形は溝状に粘土塊の切り出した跡である。突起状の溝の検出幅は40～50cm、深さは6cmを測る。検出面はT.P. 1.55～1.60mである。粘土取り跡の埋土は黄褐色シルトまたはにぶい黄褐色シルトである。埋土から土師質羽釜、その他小土器片が出土している。遺構74の突起状の堀形はほぼ南北方向に伸びている。この粘土取り跡より北側は谷状に窪んでいる。また、調査区の北東部からは遺構がまったく検出されないという不自然な状況にある。下層の粘土層は暗緑灰色粘質土で厚く堆積していることから、一定期間粘土取り作業が行われていたものと思われる。また、同時に前代の遺構を削平したのではないかと推測される。

第2面では遺構に伴う出土遺物が少なく、遺構の性格を明確に捉える事はできなかった。粘土取り跡は中世以降のものと思われるが、明確な時期を決定することはできなかった。土坑46はやや先行するもので平安時代中期に相当する。溝9、17は下層の遺構で弥生土器を伴うことから、弥生時代に相当する。

(3) 第3面

第3面は調査区の南側で平安時代中期の建物跡、焼土坑、溝などを検出した。地形は調査区の中央部あたりがやや谷状地形を示し低くなるが、東西方向に伸びる溝を境に、南側に向けてやや高くなる。C区の遺構検出については、調査区北側の第2面検出に引き続き調査区南側の第3面検出を行ったので、遺構番号は遺構面で区切らず継続番号を付けている。さらに整理した結果、調査時において第3面下層として検出した遺構は、第3面に相当することが判ったため、第3面として合わせて取り扱う。第3面下層で検出した遺構番号は検出時に付けた番号をそのまま採用し追加した。

土坑（遺構85、88、89、91、93、98、92、121） 調査区の南端部で検出した土坑群で埋土に多くの炭化物、焼土を含むもの。土坑群は検出時には細分化して遺構番号を付けているが、検出後の考察から広範囲に炭化物、焼土を含む1つの遺構であると考えられた。土坑の検出幅は南北方向で5.0m、東西方向の幅は4.0m以上でさらに調査区の東側に伸びる。深さは6～13cm、検出面はT.P. 1.70～1.75mを測る。埋土は暗灰黄色粘質土と褐色シルトが層状堆積を示し、炭化物、焼土を多く含む。遺構92、121は焼土坑内に含まれるもので、特に焼土、炭化物の堆積が顕著な部分にあたる。埋土中に鉄滓、土器小片が見られた。焼土坑内の遺物として黒色土器片、土師器皿・甕・須恵器片、鉄滓などがある。出土遺物から平安時代中期に相当する。B区第2面、第3面において焼土坑を多く検出しているが、西側の水路を隔てて合い対する位置にC区における焼土坑があることから、同一生産域に含まれるものと理解される。また、鉄滓などが出土していることから、土器焼成ないし製鉄作業等の焼成遺構であると判断される。

住居状遺構 焼土坑の西側に接する遺構で性格は不明瞭であるが、掘立柱建物状の検出状況を示すもの。遺構の検出形が隅丸方形を示す環状の溝と、さらにその内側に溝が約半周巡るもの。また、内側の溝に付随する形で柱穴が多数検出された。遺構の検出面が赤色化を示し焼土

化している。遺構の検出幅は南北 2.7 m、東西 3.0 mを測る。検出面は T . P . 1.68 ~ 1.70 mである。環状に巡る溝の検出幅は 30 ~ 40cm、深さは 4 ~ 10cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトおよびにぶい黄褐色シルトで炭化物を含む。内側の溝は検出幅が 8 ~ 10cm、深さは 5 ~ 13cmを測る。埋土は暗灰黄色シルトである。溝に付随する柱穴は平面形がほぼ円形を示す。柱穴は検出幅が 20 ~ 38cm、深さは 6cmを測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで炭化物を含む。出土遺物は黒色土器A類碗、土師器壺・杯・皿、その他小土器片などである。この遺構は検出面が赤色焼土化し、埋土に炭化物、鉄滓などが含まれることから、隣接する焼土坑同様に土器焼成作業ないし製鉄作業に関連するものと考えられる。平安時代中期に相当する。

建物ピット 調査区の南端部の焼土坑付近から検出された建物ピットであるが、建物として明確に復元することができなかったもの。建物ピット1、2、9、11、16は柱穴の平面形がほぼ円形で、検出径が 0.5 ~ 1.0 m、深さは 10cm、検出面は T . P . 1.63 ~ 1.68 mを測る。埋土はにぶい黄褐色粘質シルトおよび褐色粘質土で炭化物を含む。出土遺物は土師器皿、黒色土器片などである。



第33図 C区、第3面・竪穴住居内炭化材、板材跡検出状況

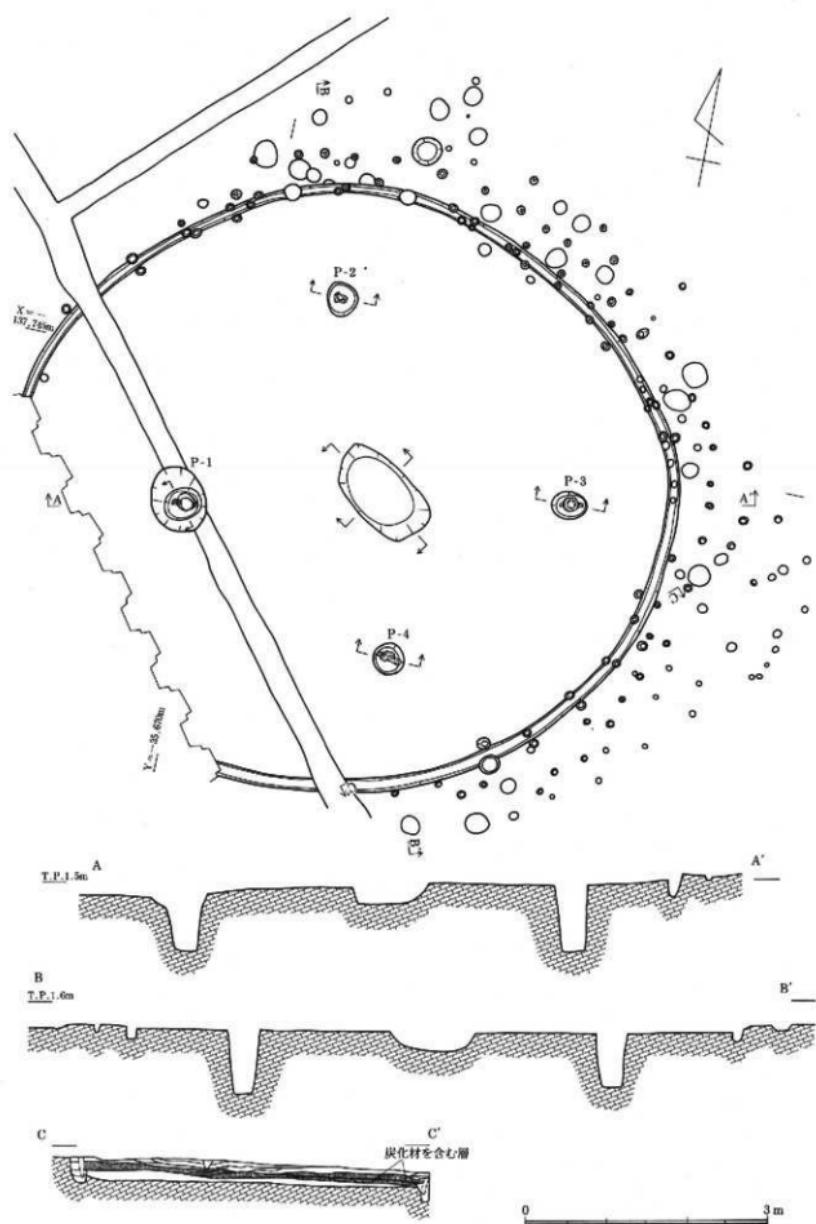
ピット 10、94 は柱穴の平面形が円形を示す。検出径が 50 ~ 68cm、深さは 7 ~ 12cm、検出面は T.P. 1.75m を測る。埋土はにぶい黄褐色シルトで炭化物を含む。遺物はピット 10 から土師器甕、羽釜などが出土している。また、ピット 94 から土師器杯・甕などが出土している。

弥生時代竪穴住居 調査区北側の微高地で弥生時代後期の竪穴住居を検出した。また、床面上から多くの炭化物や焼上等が確認され焼失住居であることが判った。第2面北側の検出時に焼土、炭化物の一部分が露出していたので、幾つもの焼土坑が散在しているものと考えていた。焼土坑として考えていた遺構から弥生土器を検出したため、さらに焼土、炭化物を若干掘り下げ検出作業を進めた。その結果、竪穴住居の輪郭を検出し、弥生時代の竪穴住居であることが判明した。上層で焼土坑として捉えた遺構にそれぞれセクションを設定していたので、竪穴住居の中央部を通る断面観察に有効なセクションを設定することができなかった。可能な限り住居の中央部を通り、また直線に捉えられるようサブ的なセクションを設定して、住居内の埋土堆積状況の把握に努めた。さらに調査の都合上、周辺の調査範囲を狭めてしまったため、周堤等の外部施設を広範囲で捉えることができなかった。限られた範囲で明らかになったことについて報告する。

概要 竪穴住居の外形は直径 7.5 m を測るやや大型の円形プランを示す。竪穴住居の西側は矢板で切られ一部が調査区外に広がる。検出面は T.P. 1.45 ~ 1.60 m を測る。検出時には上層部がほとんど削平されており床面まで 20cm ほどしか残存していないかった。壁溝は調査区外に伸びる地域を省いてほぼ全体で確認された。主柱穴は 4 本検出された。主柱穴の検出形は円形を示す。炉跡は住居のはば中央部で検出した。検出形はやや扁平した東西方向に長軸を持つ梢円形を示す。竪穴住居の床面上から炭化材、炭化物、焼土層などを検出した。炭化材は竪穴住居の中央部に向かってほぼ放射線状に検出された。遺物は竪穴住居の北東部で弥生時代の甕、長頸壺、器台などが出土している。特に長頸壺の頸部および器台の口縁部には朱が塗られていた。また、二次的な焼成や使用痕が見られないことから住居が焼失した後、何らかの祭祀行為を行ったものと考えられる。

炭化材 竪穴住居の床面上に炭化材が放射線状に堆積していた。中央部に屋根材の垂木などが見られた。炭化材には板材と丸太材、割り板材が見られた。幅 10cm ほどの板材が多く、建物中央部から壁溝にむけて並んでいる。検出長は長いものは 60cm を測る。丸太材は径 3 ~ 5cm のもので、板材と同様に中央部から壁溝にむけて並んでいる。割り板材は中央部からやや壁溝部に近いところで見られた。検出長は 10 ~ 20cm あまり長いものは見られなかった。壁溝内に板材の痕跡が見られた。板材は幅 10 ~ 20cm、厚さ 3cm ほどのもので、壁溝内に立てて並べている様子が観察できた。板材は 3 ~ 4 枚ほど並べると木杭で止める構造になっているようである。板材の痕跡と木杭の小ビットが壁溝内に並んでいた。床面中央部では木材だけでなく、草ないし土を含む焼土層が堆積している。おそらく屋根部分に当たると思われる。

床面 竪穴住居の床面は北東から南西方向に向かってやや傾斜している。さらに床面は凹凸が激しく一様に平坦地とは言い難いものである。また、床面は柔らかく、あまり踏みしめられた感はない。



第34図 C区、第3面・竪穴住居 平・断面図

床面上には灰層が覆っており、その上層には炭化物、灰層、焼土層が堆積している。

住居内埋土 検出面から床面まで約20cm程度しか残存していなかったが、埋土の堆積状況をわずかながら観察することができた。竪穴の埋土は5層に大別することができた。第1層（①、②）灰オリーブ色粘質シルト層。炭化物を含む。弥生住居の廃絶後に堆積した埋土。第2層（③）灰オリーブ色シルト層。炭化物、灰を含み、下層に炭化物層が帶状に入る。第3層（④、⑤）灰オリーブ色シルトおよび暗オリーブ色シルト層。中央部に厚く堆積する。垂木材、柱などの炭化材、炭化物、灰層を多く含む。焼失時に上屋根材が倒壊し堆積したもの。場所によっては焼土層を含む。第4層（⑥）暗オリーブ灰色シルト層。中央部でやや厚く堆積する。焼土、灰、炭化物などを多く含む。第5層（⑦）暗オリーブ灰色粘質シルト層。炭化物を含まない床面の下層堆積層である。

主柱穴 炭化材、炭化物、焼土層などを取り除いた床面から主柱穴を検出した。検出面はT.P. 1.40～1.47mである。主柱穴は4本で、規模は直径37～45cm、深さは検出面から60～85cmを測る。主柱穴の埋土は3層からなる。第1層 灰色粘質シルト層で炭化物を多く含む。第2層 灰オリーブ色粘質シルト層で炭化物を含む。第3層 灰色および暗緑灰色シルト層で炭化物を含まない。主柱を設定した際の堀形の埋土である。柱穴内から遺物は出土しなかった。主柱の柱間は北側の東西間（S-2～S-3）が3.75m、南側の東西間（S-1～S-4）が3.10m、東側の南北間（S-3～S-4）が2.96m、西側の南北間（S-2～S-1）が3.20mを測り、やや変形した方形を示す。主軸方向は、N-30°-Eである。

柱根 主柱穴の下部には直径が17～25cm、残存高が40～55cmの柱根が残存していた。柱根の上部は割れており、また柱根の中芯部は腐り空洞となっている。柱根の下端は二股に造り出し、直径約10cm、長さ約40cm程度の丸太の横木に跨がせる「根がらみ」が確認できた。また柱根の下端部は丁寧に面取りされ、二股部を丁寧に造り出している。横木は検出面がおおよそT.P. 0.72mを測る。横木は朽ちて木皮だけになっているものもあり、丸太材であることは確認できたが、1本を省いて他は取り上げることはできなかった。柱根の材質はヤマグワ（主柱3）やカツラ（主柱2）であることがわかった。

炉跡 住居のはば中央部で検出した。検出形はやや扁平した東西方向に長軸を持つ橢円形を示す。東西の長径は1.32m、南北の短径は0.72m、深さは0.24mを測る。検出面はT.P. 1.43mである。炉内は黒褐色シルトの炭層と灰色シルトの灰層、および暗オリーブ色シルトの炭化物と焼土がレンズ状に相互に堆積している。炉跡内から焼けた石が中央部付近から数個検出されたが遺物は出土しなかった。

壁溝 壁際には壁溝がほぼ全周している。溝は壁側から垂直気味に急角度で掘り込まれている。壁溝は検出幅10cmで、深さは床面より10cmを測る。壁溝の断面形は深みを持つU字形を示す。埋土は3層に大別することができる。①灰オリーブ色シルト層。炭化物を含む。住居の内側に堆積する層で壁溝内の木杭、板材などが倒れた際に、炭化物が混入したものと思われる。

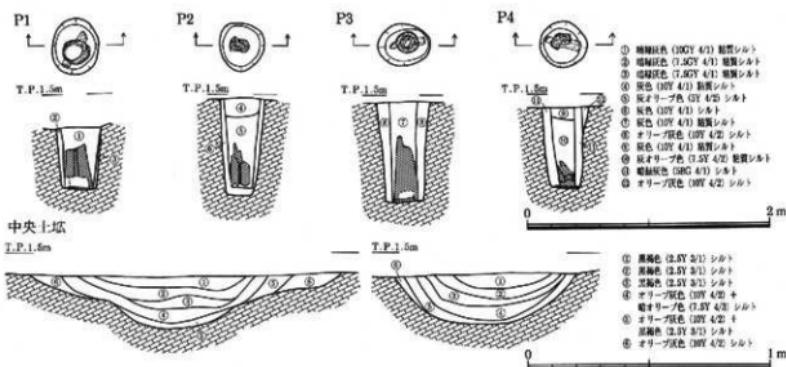
②オリーブ灰色粘質シルト層。壁溝の下層に堆積するもので炭化物を含まないもの。③暗オリーブ灰色粘質シルト層。縦板材の裏込め土である。

壁溝内には厚さ3~5cm、検出幅15~20cm程の炭化物および焼土が入るの痕跡を確認した。おそらく縦板材が並んでいたものと考えられる。また、壁溝内には直径3~5cmほどの木杭の小穴、および炭化した木杭跡を約70cmの間隔で検出した。小穴は垂下に3~10cmほど下がるもので木杭は垂直に立っていたことが判る。壁板材は木杭と木杭の間に並べて固定する縦板壁が想定される。また構造上、木杭の上部でそれぞれの垂木を支えていたものと考えられる。

住居外施設 壁穴住居の壁溝外に40～50cm離れて、住居址とは同心円状に50～70cmの間隔で小柱穴列が巡る。さらに50～70cm外側に離れて、もう一条の小柱穴列が巡る。小柱穴の検出形は円形でおおよそ径10cm、深さは5～10cmを測る。埋土は黄褐色ないし暗灰黄色粘質シルトである。小柱穴の掘形は垂下に伸びるもので、木杭を垂直に立てたものである。おそらく住居外施設として周堤を築く際に、周堤の中心部に芯材として木杭を埋めたものと思われる。また、壁溝部の木杭と周堤部の木杭によって垂木が支えられ、上層の高さを確保していたものと想われる。

遺物 堅穴住居内の北東部において床面直上から壺、長頸壺、器台などが出土している。いずれも弥生時代後期の前半に相当する時期のものと考えられる。さらに壺の体部、長頸壺の頸部、器台の一部に朱が塗られていることが判った。住居内から出土した遺物は極めて少なく、また二次的焼成痕や使用痕が見られないことから、住居の焼失後に何らかの祭祀を行ない、土器を設置したものと考えられる。

炭化材など残りの良い焼失住居であったので、今回の検出状況をもとに壁溝内に残る板材の構



第35図 C区、第3面 竪穴住居 主柱穴・中央土坑断面図

造、上屋の構造について明らかになることを期待したい。

このように、第3面では主に平安時代中期の焼土坑と弥生住居跡を検出した。焼土坑はB区で検出された焼土坑同様に土器焼成ないし製鉄遺構と考えられる。弥生住居跡を検出したことで高柳周辺地域における弥生時代の遺構の広がりが想像される。

(杉本)

第3項 遺物

C区は、面積の割に土器は少なく、コンテナにして7箱分が出土した。

(1) 遺構出土

(98)・(99)・(102)～(108)は第2面検出の遺構から出土した。(98)・(99)は、溝状遺構8からの出土である。前者は須恵器の甕、後者は杯の底部だが、いずれも小さな破片である。(102)はピット3から出た土師器の皿の口縁部である。口縁端部は、丸くつまみあげられている。非常に薄く作られ、精良な胎土である。(103)はピット95からの黒色土器A類の破片で、(104)はピット88からの土師器の皿の小破片である。したがって、口径は多少の前後があるかもしれない。(105)はピット86より出土した、黒色土器A類の底部片である。

(107)・(108)は土坑46出土の土師器である。(107)は、口径29.0cm、残存高19.2cmを測る。口縁端部はつまみ上げられて終わる。外面には、縱方向のハケ目が観察される。(108)は、口径30.0cm、器高は復元すると29cm程度になる鍋である。口縁端部は平坦面をもって終わる。外面はハケ調整が顕著である。この2点には、まったく煤などの付着が認められず、未使用か、ほとんど使用されていないものと思われる。まったくの未使用であれば、この遺構の性格とも関わってくるのかも知れない。

(100)・(101)は落ち込み20から出土した。(100)は土師器の杯であり、端部は外側にわずかに外反させている。胎土は精良。(101)は土師器の甕である。

(2) 包含層出土

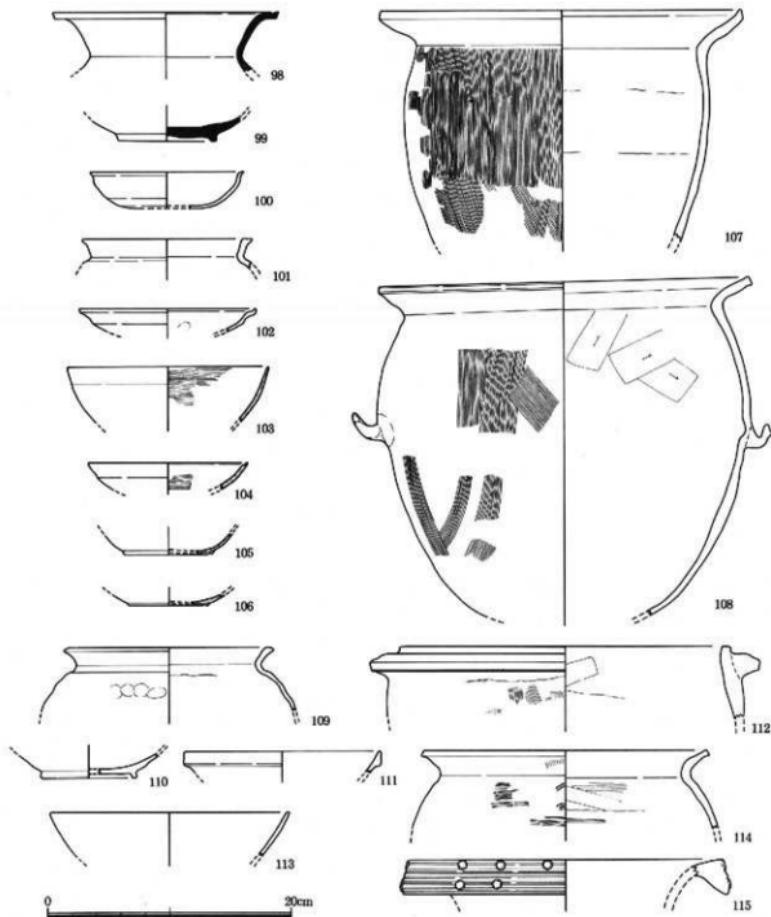
(109)～(112)は第1面の上層出土の遺物である。(109)は土師器の甕。(110)は縦軸陶器の底部の破片で、輪高台をもつ。(111)は白磁碗の口縁部である。口縁端部を拡張させているので、横田賢次郎・森田勉氏の白磁IV類に属する。(112)は口縁の直下に鈎をもうける土釜。外面には、細かな縱方向のハケ調整が施されている。

(113)～(115)は第2・3面を覆う層から出土した。(113)は土師器の碗。(115)は弥生土器の壺の口縁部の破片である。端部は大きく拡張され凹線文と円形浮文で飾られている。いわゆる生駒産西麓産の胎土をしている。

(3) 壺穴住居出土

(116)～(119)は、壺穴住居から出てきた土器である。(116)は長頸壺の頸部である。胴部に移行するところには突帯がまわっているのだが、その部分に、赤色顔料が付着していた。成分についての科学分析結果を付論に掲載している。調整であるが、外面には縱方向のヘラミガキが

施されていた。(117)は、壺の胴部である。表面の遺存状態は悪いが、底部付近にわずかにミガキの痕跡が認められる。生駒山西麓産の胎土である。(118)は器台である。外面の調整だが、上半部は縦方向のハケ調整が加えられ、それ以下には縦方向のヘラミガキが施されている。内面については、横方向のハケ調整が下半部に認められる。口縁部の端面には4つで1単位の円形浮文

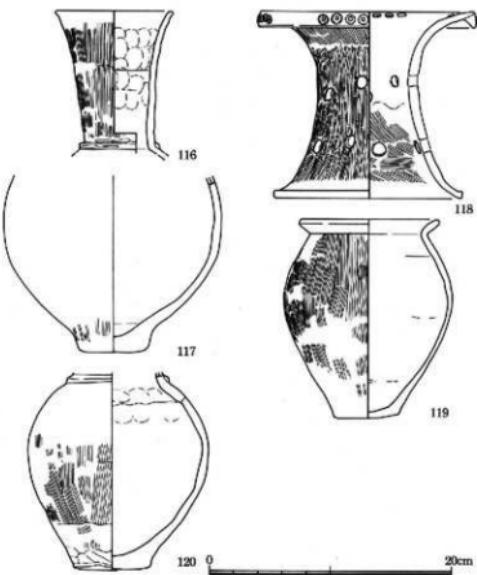


第36図 C区、遺物実測図（1）

がつく。復元すると全体で6カ所になる。また、口縁部上面には、3つで1単位の円形浮文がつき、復元すると5カ所あったことになる。なお、この土器の口縁部にも赤色顔料が付着していた。生駒山西麓産。(119)は壺である。外面には縱方向のハケ調整が施されているけれども、内面には削りの痕跡は認められない。やはり、生駒山西麓産である。(120)も、竪穴住居の炭化材が検出されたなかでは最上層より出土した壺の胴部。頸部に突帯が巡らされている。外面には、ハケ調整が観察される。

これらの遺物の時期は、出土した器種や点数が限られているので明確ではないが、寺沢薰・森井貞雄氏による河内V-1～2様式、すなわち弥生時代後期の前半に比定されよう。

(福宜田)



第37図 C区、遺物実測図（2）

第4節 D区の調査成果

D区は平成9年度に実施した調査区で、A区の南側に位置し、東側は民家、西側は民家と耕作地、北側および南側を道路によって区切られる。調査区の面積は約1900m²を測る。

D区では調査時において遺構面を3面検出した。第1検出面では近世の粘土取り跡と水路、中世の耕作溝、および平安時代中期の掘立柱建物を検出した。第1面として中世遺構を検出する予定であったが、一部深く掘り下げた部分があったため、第2面相当の平安時代中期の掘立柱建物などを同時に検出している。第2検出面では平安時代中期の掘立柱建物、井戸、溝、区画溝など多くの遺構を検出した。また、第2検出面は遺構の掘り込み面より低い層で遺構検出を行ったため、第3面相当層の耕作溝、区画溝、井戸などを同一面で検出している。第3検出面では耕作溝と区画溝、井戸と、第3面下層に相当する溝、井戸、土坑などを同一面で検出している。区画溝に関しては、調査当時第2面相当の遺構として検出したが、遺構の整理を行った結果第3面相当の遺構であることが判った。遺構検出時の記録、写真では遺構の切り合い関係に不都合がみられるが修正を加えるものとする。遺構番号は遺構面にかかわらず1番から通し番号を付けている。しかしながら上層検出面の遺構が下層で別の遺構番号になっているものがあった。重複したものについては上層の遺構番号に修正した。その他、若干の整理を加え報告する。

第1項 基本層序

D区は北側の微高地から徐々に南側に向かって低くなる。特に調査区中央部から南側で一気に低くなり、谷状に落ち込む地形を示す。調査区が南北方向に長いため調査区の北側と南側とではかなりの傾斜が見られる。調査区北側、中央部、南側での堆積状況の変化を表すことができるよう考慮し、土層の堆積状況を模式的に示した。これをもってD区の基本層序とする。

0. 機械掘削土。現在の盛土および現代の耕作土層。厚さは約80cm。1. 洪水砂層。厚さは約5cm。近世遺物を検出。2. 灰色粘質シルト層。厚さは10～15cm。中世から近世の遺構を検出。上面が第1面に相当。3. 灰オーリーブ色粘質シルト層。炭化物を含む。厚さは2～5cm。南側へ向かうほど厚く堆積する。4. 灰色粘質上層。炭化物を含む。平安時代中期以降の整地層。調査区途中から南側で落ち込み、深く堆積する。厚さは2～10cm。5. 暗オーリーブ灰色粘質シルト層。炭化物を多く含む。平安時代中期の遺構を検出。上面が第2面に相当。厚さは10～16cm。6. オリーブ黒色粘質シルト層。炭化物を含む。厚さは10～14cm。平安時代の集落が形成される以前の耕作溝を検出。上面が第3面に相当。7. 灰色粘質シルト層。厚さは10～16cm。南側の落ち込み部で厚く堆積する。上面が第3面下層に相当。8. 暗オーリーブ灰色粘質上層。南

側に向かって一気に厚く堆積する層。厚さは25～

30cm。9. 暗緑灰色粘質土層。厚さは10cm以上

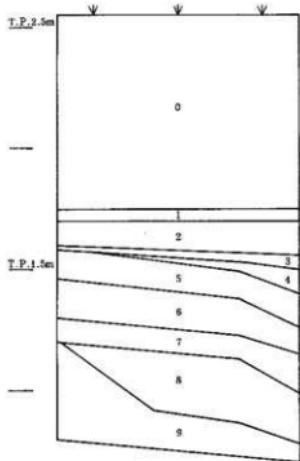
を測る。

(杉本)

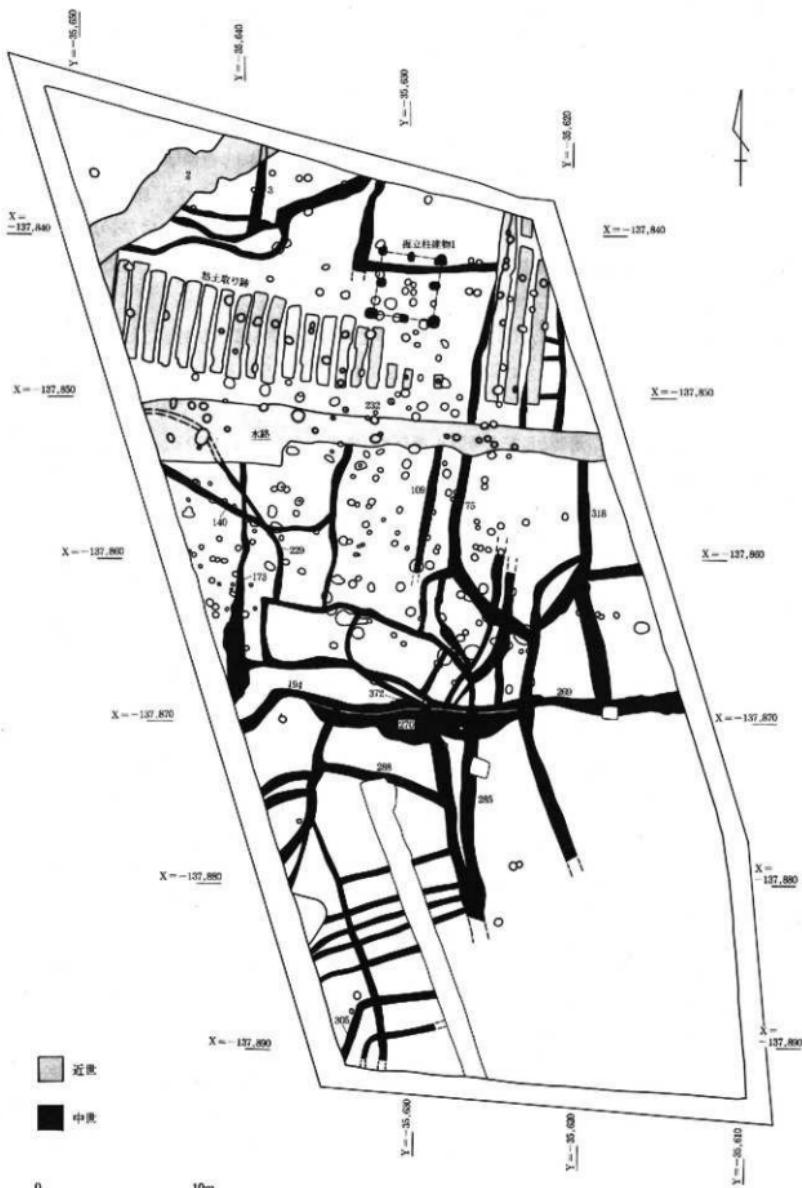
第2項 遺構

(1) 第1面

第1面では近世の粘土取り跡と水路、中世の溝と建物、耕作溝などを検出した。また、第2面相当の平安時代中期の掘立柱建物を同時に検出している。平安時代中期の掘立柱建物については、整理し第2面の遺構として報告するものとする。検出面はT.P. 1.55.～1.60 mである。地形はほぼ平坦であるが、北側から南側に向かって僅かに低くなる。粘土取り跡 調査区の北側で洪水砂層に埋まっていた粘土取り跡を検出した。南北方向に整然と区画された粘土取り跡は25区画確認された。粘土取り跡の区画は短辺が0.7～1.0 m、長辺が5.0 m、深さは15～32cmである。1区画内を鋤で粘土をブロック状に切り出したもので、粘土床に鋤の跡が残る。区画内では南側から北側に向かって粘土を



第38図 D区、基本層序模式図



第39図 D区、第1面・全体図

切り出している。東側の数区画分は10mまで延長しているが、中には3m位で止まっている区画もある。粘土の掘削作業途中で洪水などのために砂に埋まったものと思われる。粘土取り跡に伴う遺物は出土しなかった。

水路 粘土取り跡の南側で東西方向に直線的に伸びる水路。水路の西側で水景を調整する木製の簡単な樋門跡が見られた。水路の検出幅は1.5mであるが、樋門跡より西側は検出幅が3.5mである。検出面での深さは15～40cmを測る。堀形はなだらかなU字型を示す。埋土は上層が洪水砂、中層が暗オリーブ灰色粘質シルトと砂層の互層を成し流水状況を示す。下層がオリーブ黒色粘質シルトである。出土遺物は陶磁器片、土師器片などである。粘土取り作業において切り出した粘土塊を小船などで、水路を使って運び出していたものと思われる。

溝 調査区の北側から中央部にかけての範囲で、不定方向に伸びる溝が広がる。おおよそ北側から南側に向かって低くなる自然地形に沿うものである。中世の一時期に後背地となっていたものと思われる。主な溝の検出幅は0.3～1.0m、深さは5～20cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を少し含む。遺物として土師器小皿などの小土器片が出土している。その他、調査区の東側に位置する溝173から土師器壺、溝229から須恵器杯身が出土している。おそらく下層の遺物が何らかの理由で巻き上げられたものと思われる。

耕作溝 調査区の北東部および南西部で耕作溝を検出した。北東部で検出された耕作溝は南北溝と細い東西溝から成る。南北溝は検出幅が60cm、深さは10～26cmを測る。東西溝は検出幅が30cm、深さは9cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を含む。南西部で検出された耕作溝は細い東西溝と南北溝から成る。南北溝は検出幅が50～80cm、深さは6～10cmを測る。東西溝は検出幅が40～60cm、深さは3～15cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトおよび灰色シルトで炭化物を含む。遺物は埋土中より瓦器碗高台、土師器小皿片などが出土している。調査区の中央部で東西方向に伸びる東西溝を挟んで、耕作溝の方向に違いが見られる。区画溝の北側は南北溝がほぼ南北方向を示すが、区画溝の南側はやや西に傾く南北溝となる。

東西溝（溝194、269） 調査区の中央部で東西方向に伸びる溝。溝の検出幅は0.5～1.3m、深さは10～15cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を含む。出土遺物は土師器片などである。この東西溝を境に南側は徐々に低くなり、造構も極端に希薄となる。また、この溝を挟んで北側と南側の耕作溝の延伸方向に違いが見られる。北側の耕作溝はほぼ南北方向を示すが、南側の耕作溝はやや西に傾く南北方向を示す。東西溝は区画溝の様相を示すものである。

溝状造構 東西溝の下層の造構として溝状造構270がある。溝状造構の検出幅は1.3～2.6m、深さは10～22cmを測る。埋土は暗オリーブ灰色粘質シルトおよびオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を含む。出土遺物として土師器皿、杯、黒色土器、土師器壺、須恵器壺、焼けた石などがある。炭化物は溝状造構を覆うように層状に堆積していることから、平安時代の焼失した建物跡を整地する際、遺物を溝状造構に廻棄したものと考えられる。

掘立柱建物1 調査区の北側で検出した掘立柱建物。2間(3.6m)×2間(4.0m)の南北棟。

柱間寸法は1間が $1.8 \sim 2.0m$ である。柱穴の平面形は隅丸方形を示す。検出幅は $30 \sim 60cm$ 、深さは $20 \sim 45cm$ を測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトおよび灰色シルトである。柱穴は平安時代の建物群が廃絶した後の整地層上面からの掘り込みである。遺物として土師器皿片などが出土している。

第1面では近世の粘土取り跡と水路、中世の溝と耕作溝、掘立柱建物などを検出した。粘土取り跡では規則正しく粘土を切り出した様子を観察することができた。また、水路の利用に

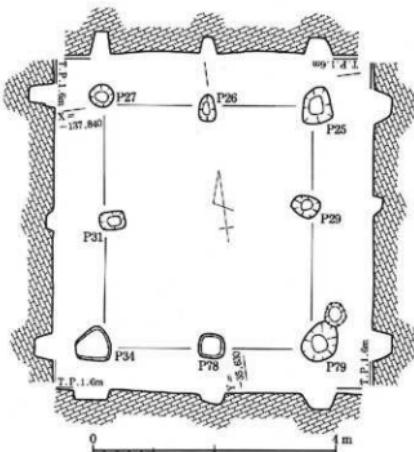
より粘土取り作業において切り出した粘土塊を小船などで、水路を使って運び出していたものと思われる。水路は調査区の東側を流れる古川に通じていたものと推測される。近世の洪水の記録として1802年の「点野・仁和寺切れ」などが知られている。調査区全体に広がる上層の洪水砂層はこの時のものと考えられる。堤防復旧や治水工事の際に粘土取り作業が頻繁に行われていたことが窺われる。中世では後背地化していた時期と耕地化した時期があり、建物と耕作地が点在していたことが判った。

(2) 第2面

第2面相当の遺構として掘立柱建物、建物ピット、井戸、炭化物を含む溝、畦畔などを検出した。検出面はT.P. 1.45 ~ 1.55 mを測る。地形は調査区の北側はほぼ平坦で、北側の微高地から南側に向かって徐々に低くなる。調査区の中央部から南側では谷状地形を示し、一気に落ち込む。また、遺構も極端に希薄になる。

掘立柱建物 検出面において建物ピットと思われる柱穴を約900余個検出した。整理した結果、掘立柱建物として11棟を復元することができた。また、建物ピットであるが建物を復元するに至らなかつたものも多く存在する。掘立柱建物は幾重にも重複が見られ、幾度か建替えが行われたことが判つた。建物の主軸方向はおおよそN - 8° ~ 12° - Eを示す。掘立柱建物のピット番号は調査時に付けた番号をそのまま採用する。

掘立柱建物2 集落域の北側中央部で検出した建物。2間(5.0m) × 5間(12.5m)の南北棟。柱穴の上層は近世の粘土取り跡の削平を受ける。柱の抜き取り跡が見られる。柱穴の平面形は円形ないし隅丸方形を示す。検出径は $30 \sim 45cm$ 、深さは $20 \sim 55cm$ を測る。粘土取り跡の削平を受けない柱穴の深さは $30 \sim 55cm$ である。埋土は掘形内が暗オリーブ灰色シルト、柱の



第40図 D区、第1面・掘立柱建物1 平・断面図

抜き取り跡内はオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を含む。北側の側溝内、また側溝壁内で北東部に相当する建物ピットを確認したが、側溝の掘削時および側溝の崩壊等で欠損したため、図示する事ができなかった。柱穴内および柱穴の周辺に柱根の残るもののが見られた。ピット447は上部が裂けた形態を示す柱根を残す。柱根の太さは12cmを測る。ピット356は粘土取り跡作業中に柱根が抜けたもので、粘土取り跡内の柱穴に近接して太さ15cmの柱根が置かれていた。この他、建物の廃絶時には幾本かの柱根が残っていたものと思われる。遺物としてピット474から黒色土器杯、ピット512から黒色土器碗片が出土している。

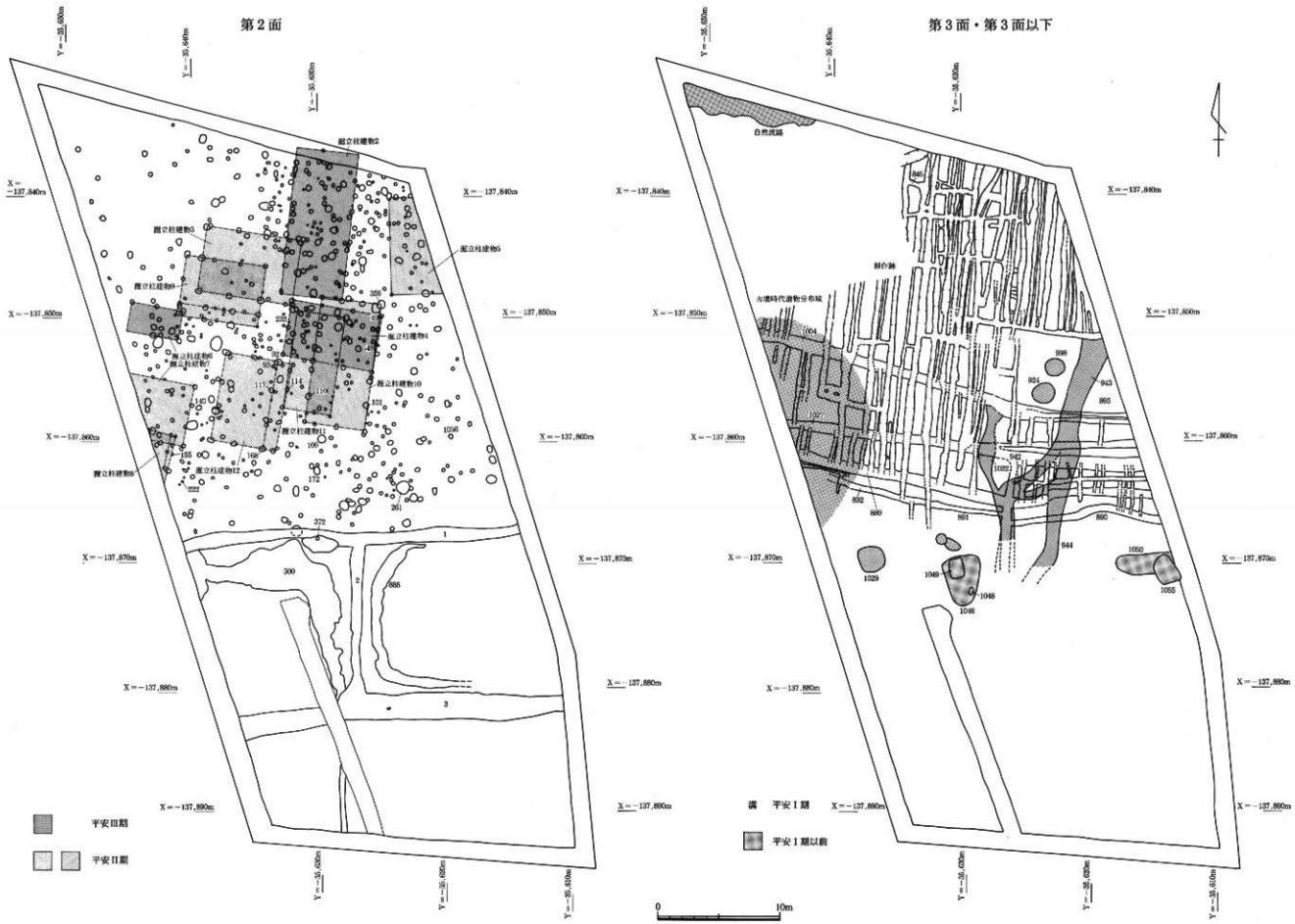
掘立柱建物3 集落域の北側中央部で検出した建物。2間(5.4m)×3間(8.0m)の東西棟。柱穴の上層は近世の粘土取り跡の削平を受ける。また一部で柱の抜き取り跡が見られる。柱穴の平面形は方形ないし隅丸方形を示す。検出径は30～58cm、深さは13～72cmを測る。上層の削平を受けないものは深さが40～72cmである。埋土は柱の抜き取り跡内はオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を多く含む。掘形内が暗オリーブ灰色シルトである。柱根の残っているものが多く、ピット199、348、374、536、902などがある。建物南側の柱根は4本とも残っている。柱根の太さは約20cmである。柱抜き取り時に上部が裂けた形態を示す柱根も見られた。建物の廃絶時にわずかに整地を行ったものと思われる。遺物としてピット374から上師器壺片などが出土している。

掘立柱建物4 集落域のはば中央部で検出した建物。2間(4.8m)×3間(7.4m)の東西棟。柱穴の平面形はほぼ円形を示す。検出径は25～50cm、深さは20～57cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトで僅かに炭化物を含む。掘形内は暗オリーブ灰色あるいはオリーブ灰色シルトである。柱の抜き取りは確認できなかった。また、柱根も検出されなかった。遺物としてピット483から土器皿が出土している。

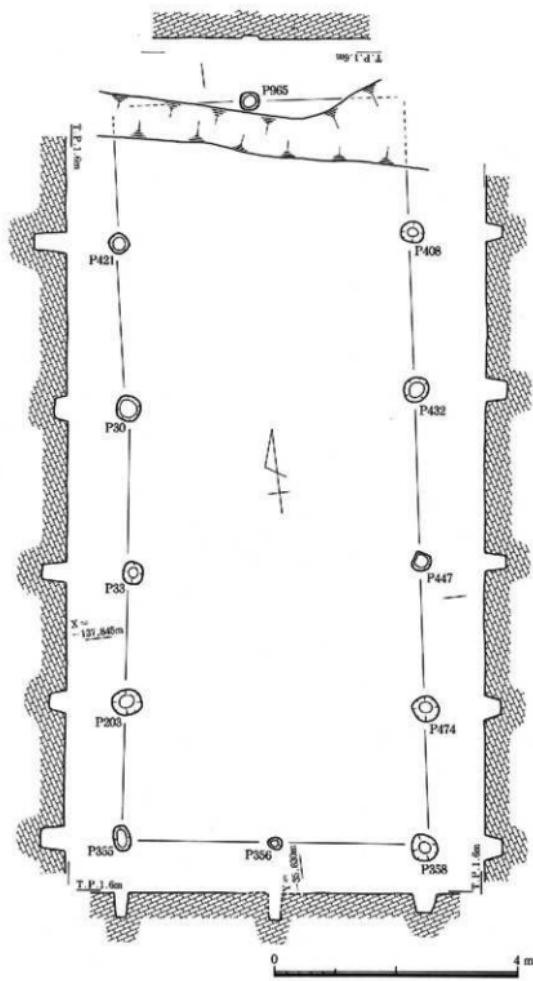
掘立柱建物5 集落域の東側北端部で検出した建物で、北側および東側は調査区外に広がる。2間(4.0m)×3間以上(7.5m～)の南北棟。柱穴がやや不揃い気味であるが総柱の掘立柱建物であると思われる。建物の主軸方向はN-3°-Eを示す。柱穴の上層は近世の粘土取り跡の削平を受ける。柱穴の平面形はほぼ円形を示す。検出径は30～40cm、深さは20～33cmを測る。埋土はオリーブ黒色または黒色粘質シルトで炭化物を含む。柱の抜き取りは確認できなかった。

掘立柱建物6 集落域の西側中央部で検出した建物。1間(2.5m)×2間(4.4m)の東西棟。柱穴の上層は近世の粘土取り跡の削平を受ける。柱穴の平面形は方形ないし円形を示す。検出径は50cm、深さは10cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を含む。柱の抜き取りは確認できなかった。遺物は出土しなかった。

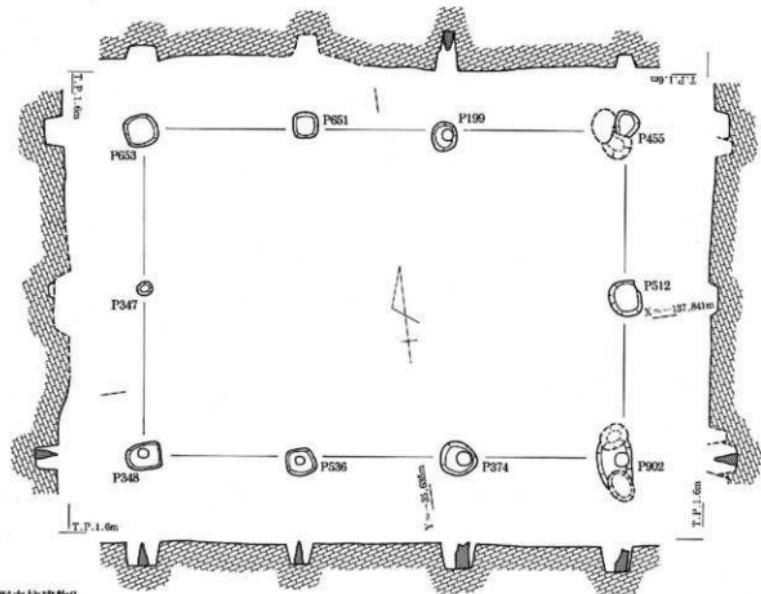
掘立柱建物7 集落域の南西側で検出した建物。西側は調査区外に広がる。1間以上(2.3m～)×3間ないし4間(5.6～7.5m)の南北棟。建物ピットは不揃いで、桁行は3間として検出したが、さらに南に伸び4間になる可能性もある。桁行の1間は狭く約1.8mである。柱穴の平面形はほぼ円形を示す。検出径は20～50cm、深さは5～26cmを測る。埋土は黒褐色およびオリーブ黒色粘質シルトである。柱の抜き取り跡は確認できなかった。遺物として



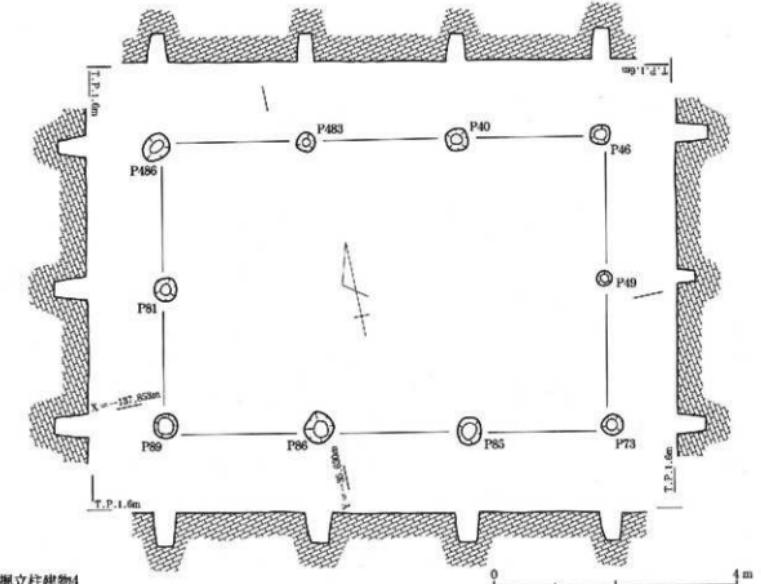
第41図 D区、第2~4面・全体図



第42図 D区、第2面・掘立柱建物2 平・断面図

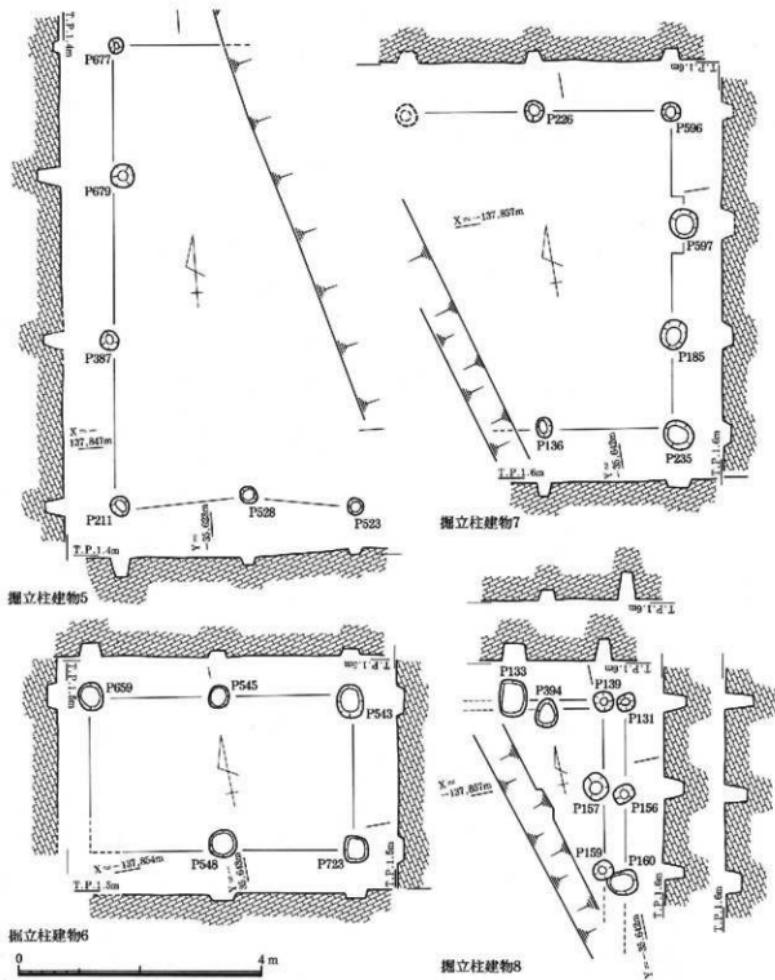


掘立柱建物3



掘立柱建物4

第43図 D区、第2面・掘立柱建物3・4 平・断面図

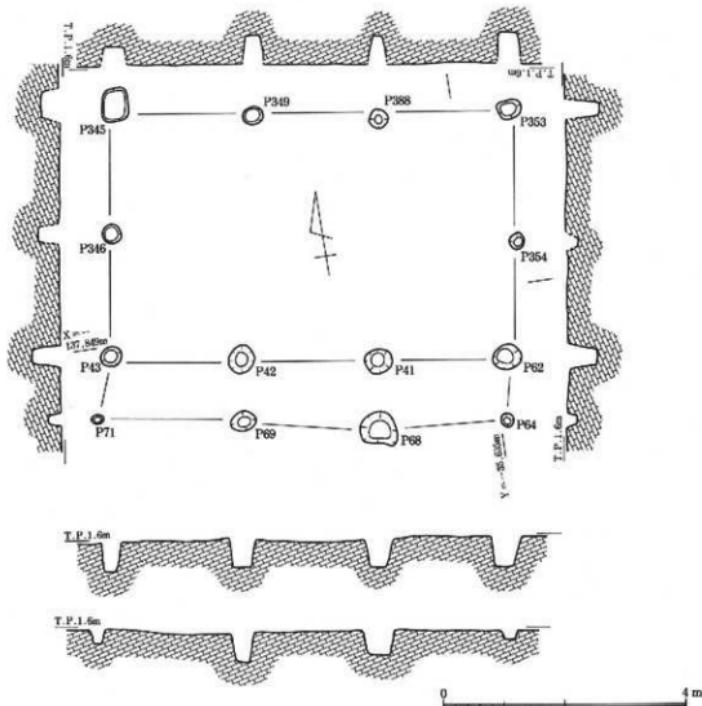


第44図 D区、第2面・掘立柱建物5～8 平・断面図

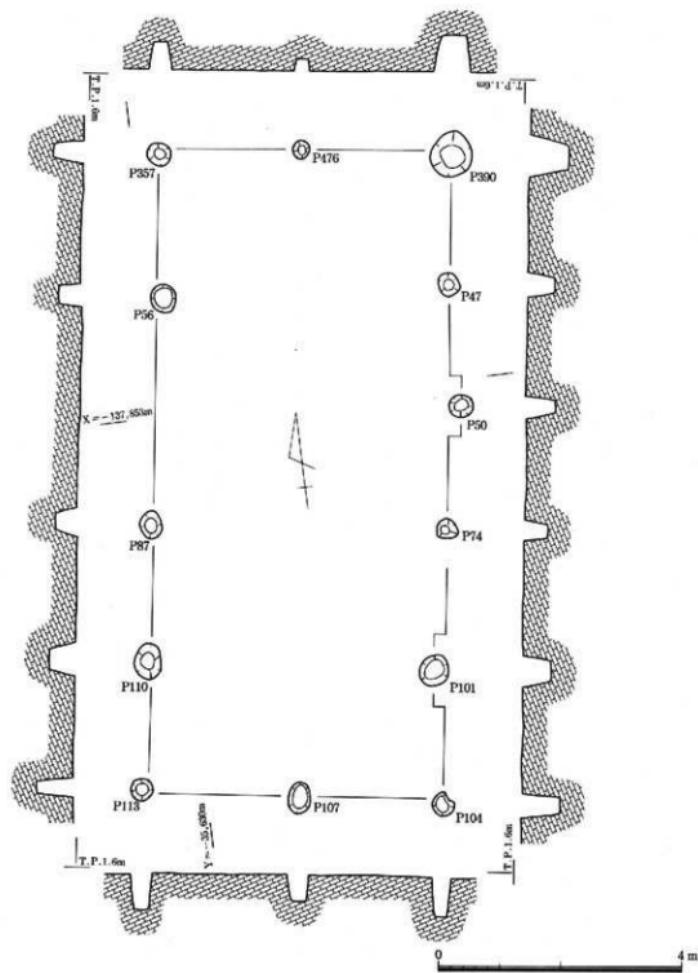
黒色土器片などが出土している。

掘立柱建物8 集落域の南西側で検出した建物で、西側は調査区外に広がる。1間以上(2.0m～)×1間ないし2間以上(2.7m～)の南北東。さらに建て替えに伴う柱穴跡が並列して見られる。柱穴の平面形は円形であるが、建て替えに伴う柱穴は歪んだ台形を示す。検出径は20～50cm、深さは25～45cmを測る。埋土は黒色ないしオリーブ黑色粘質シルトで炭化物を含む。堀形内は灰色粘質シルトである。

掘立柱建物9 集落域の北西部で検出した建物。2間(4.2m)×3間(6.7m)の東西棟で南側に1間の庇が付くもの。柱間寸法は1間が約2.1mである。柱穴の上層は近世の粘土取り跡で一部削平を受ける。柱の抜き取り跡が見られる。柱穴の平面形は方形ないし梢円形を示す。検出幅は30～55cm、深さは20～50cmである。上層の削平を受けないものは深さが35～55cmを測る。埋土は堀形内が暗オリーブ灰色粘質シルトないし灰色シルト、柱抜き取り跡内がオリーブ



第45図 D区、第2面・掘立柱建物 9 平・断面図

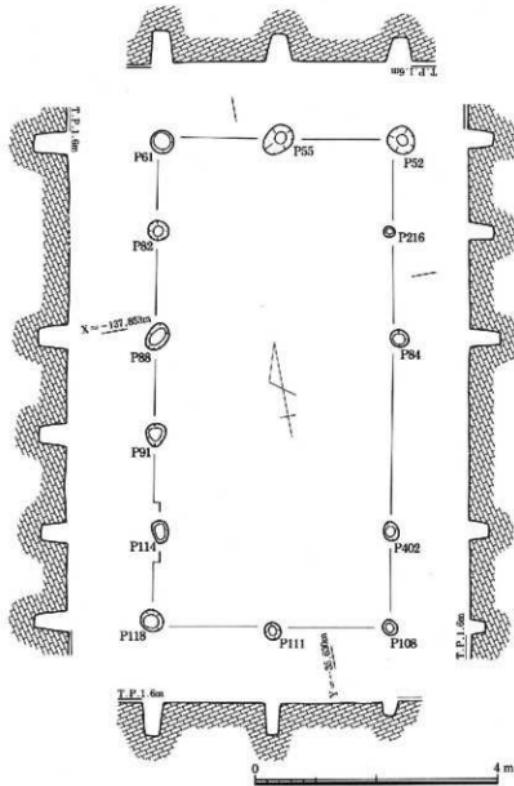


第46図 D区、第2面・掘立柱建物10 平・断面図

黒色粘質シルトで炭化物を多く含む。平安時代中期に焼失した建物を整理した際、柱穴内に多くの炭化物が混入したものと思われる。

掘立柱建物 10 集落域の北側中央からやや東側で検出した建物。2間(4.8m)×5間(10.8m)の南北棟。柱の抜き取り跡が見られる。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を示す。検出径は30~70cm、深さは35~75cmを測る。埋土は堀形内がオリーブ灰色シルト、柱抜き取り跡内がオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を多く含む。建物の焼失後の整理の際、柱穴内に多くの炭化物が混入したもの。遺物としてピット357から黒色土器杯、ピット370から土師器杯などが出土している。

掘立柱建物 11 集落域の中央部で検出した建物。2間(4.0m)×5間(8.0m)の南北棟。桁行の1間が狭く約1.6mである。建物ピットは不揃いであるうえ、東側で建物ピットが検出できなかつたものもある。柱穴の平面形は円形ないし楕円形を示す。検出径は25~50cm、深さは40~65cmを測る。柱の抜き取り跡は確認できなかつた。柱穴の埋土は黒褐色およびオリーブ黒色粘質シルトで炭化物を含む。遺物は土師器片などが出土している。



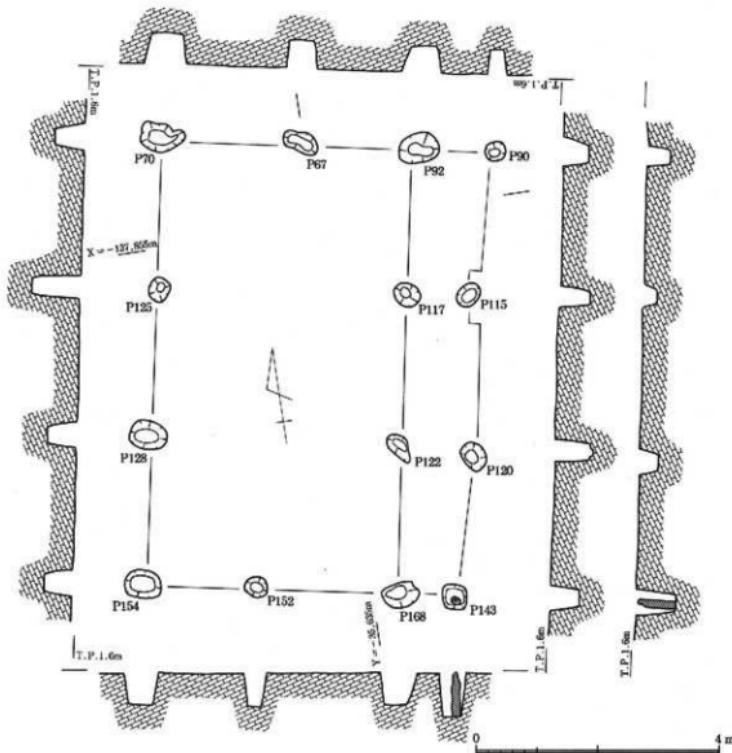
第47図 D区、第2面・掘立柱建物11 平・断面図

掘立柱建物 12 集落域のほぼ中央部で検出した建物。2間(4.2m)×3間(7.4m)の南北棟で東側に1間の庇を持つ。建物廃絶後の柱の抜き取り跡が顕著に見られ、柱穴と横木をさし込んだ柱穴が2つ並列状になるものもあり、柱穴の検出形が大きく変形している。柱穴の平面形は歪んだ楕円形を示す。検出幅は短径30~50cm、長径50~75cm、深さは30~80cmを測る。埋土は堀形内が暗オリーブ色粘質シルトおよび灰褐色シルト、柱の抜き取り跡内がオリーブ

ア黑色粘質土ないし粘質シルトで炭化物、土器の小片などを含む。ピット143には柱根が残っていた。柱根の太さは径11cmである。柱根の下端部側面を面取りしている。出土遺物として黒色土器片、土師器片などの小片が見られた。

建物ピット 復元することのできた掘立柱建物のほかに、建物として明確に復元することができなかつた建物ピットが多く見られた。

ピット200、230、392は集落域の西側で検出した建物ピットで、おそらく1間×2間以上の東西棟であると思われるが、調査区外に広がるため建物の復元はできなかった。柱の抜き取り跡が見られる。柱穴の平面形は隅丸方形ないし円形を示す。検出幅は40cm、深さは20~30cmを測る。埋土は暗オリーブ色ないし暗オリーブ灰色粘質シルトで炭化物を含む。ピット184、80、130、132は集落域の西端中央部で検出した建物ピットで、おそらく2間(4.0m~)×3間(7.0m~)の



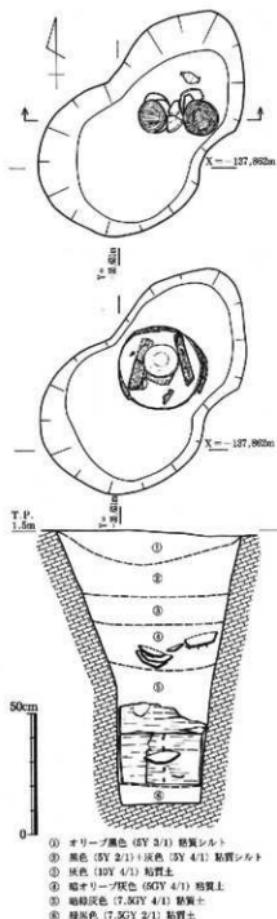
第48図 D区、第2面・掘立柱建物12 平・断面図

南北棟であると思われるが、西側の調査区外に広がるため建物の復元できなかった。柱の抜き取り跡が見られるため、柱穴の平面形は歪んだ梢円形を示す。検出幅は35～70cm、深さは40～70cmを測る。柱穴の埋土はオリーブ黒色ないし黒褐色粘質シルトで炭化物を多く含む。焼失した建物を整理する際に柱を抜き取ったものと思われる。ピット412、407、502は北側で検出した建物ピットで、おそらく2間（4.4m～）×2間以上（4.0m～）の南北棟で総柱建物であると思われる

が、柱穴が不揃いであるため建物の復元できなかった。建物はさらに北側に広がると思われる。柱穴の平面形は円形および方形を示す。検出径は20～50cm、深さは5～30cmを測る。上層の削平が僅かな柱穴の深さは20～30cmである。遺物はピット407から土師器皿が出土している。ピット100、145、169、262、328は東側中央部で検出した建物ピットで、東側の柱穴が検出できなかったため、明確に建物が復元できなかった。おそらく1間（1.8m）×2間（4.5m）の南北棟であると思われる。柱穴の平面形はほぼ円形を示す。検出径は28～50cm、深さは20～40cmを測る。柱穴の埋土はオリーブ黒色ないし黒色粘質シルトで炭化物を含む。この他、柱根の残るもののがいくつか見られた。ピット40、48、482、491、697などである。柱根の太さは15～20cmを測る。柱穴は検出径60cm、深さが40～70cmを測る。埋土はオリーブ黒色ないし黒色粘質シルトである。柱根の残るもののに柱穴の断面形態で柱の抜き取り跡が見られるものもある。建物ピット内の主な遺物として土師器杯・碗・皿・小皿、黒色土器杯・碗、土師質甕・羽釜、綠釉陶器、須恵器などが出土している。建物ピットはいずれも調査区の北側に集中しており、畦畔より南側では建物ピットは認められなかった。この畦畔が平安時代の集落域の南限を区切るものである。

井戸（井戸172、1056） 集落域の東側および南側で井戸を検出した。いずれも井戸の下層に曲げ物を伴う。また遺物として墨書き土器が出土している。

井戸172は調査区の中央部、集落域の南端で検出した曲げ物を伴う井戸である。検出径は0.8mの円形を示す。深さは1.2mである。井戸の堀形は開口部から底に向けて徐々に幅が狭くなる筒型の素掘り井戸で、下層に曲げ物を設置し



第49図 D区、第2面・井戸172
平・断面図

ている。井戸の底付近では曲げ物が2段重なって出土した。井戸の包水性は多く調査中も底から水が沸いてきた。埋土はⅠ層（①、②、③）オリーブ黒色粘質シルトで炭化物を含む。埋土はブロック状に堆積する。井戸の廃絶に伴う埋土および後世の埋土である。Ⅱ層（④）暗オリーブ灰色粘質土。土器が重なって出土した。土器埋納時に堆積したもの。Ⅲ層（⑤、⑥）暗緑灰色粘質土。炭化物を含む。Ⅳ層（⑦）オリーブ黒色ないし黒色粘質土。炭化物、木片等を含む。井戸の機能時に堆積した層である。埋土の堆積状況から井戸の廃絶時に土器を埋納し、その後一気に埋めたものと思われる。上層の埋土に炭化物を多く含むことから、平安時代中期の集落が焼失した後、建物跡を整理する際に井戸を埋めたものと思われる。遺物はⅡ層で、土師器杯、黒色土器杯、台付皿、須恵器瓶子などが重なった状態で出土している。土師器杯の裏面に「井」の字を記した墨書き土器、また不明瞭であるが「福」と読める墨書き土器が含まれていた。遺物はほぼ完形品ですべて上面を向いて設置されていた。井戸の下層からは木片とともに完形の土師器杯と黒色土器片などが出土している。土師器杯の回りに検出幅5cm、長さ22cmほどの木片が見られた。墨書きなどは認められなかった。曲げ物は井戸の下層で2段検出した。上段は上部が半分位崩壊していた。検出径は35cm、残存高は5~11cmを測る。2段目は検出径34cm、高さが21cmを測る。曲げ物の止め材は桜の皮と思われるもので、約2cm幅で5段ほどの段が見られた。井戸172は埋納された土器から平安時代中期まで機能し、その後廃棄されたものと思われる。

井戸1056は調査区の東側中央部で検出した曲げ物を伴う井戸である。検出時に上層部を深く掘削したため井戸の掘り込み面は確認できなかった。検出時の検出形は楕円形を示す。検出幅は長径52cm、短径43cmを測る。残存している深さは70cmである。井戸は堀形が底に向けて徐々に狭くなる筒型の素掘り井戸で、下層に曲げ物を設置するもの。井戸の底付近で遺物が出土した。遺物は完形の土師器杯と黒色土器片、土師器甕片、藁、砥石、木片などである。土師器杯は上面を向いた状況で出土した。土師器杯に隣接して径10cmほどの輪状になった藁を検出した。水分を多く含んでいたため、取り上げることはできなかった。おそらく何らかの祭祀に関わるものと思われる。曲げ物は腐食が激しく木質を残すのみであったため、取り上げることはできなかった。曲げ物は短径37cm、長径46cmの楕円形で、残存高は10cmである。井戸1056は出土した土器から平安時代中期まで機能し、その後廃棄されたものと思われる。

溝状遺構（遺構500、888）調査区の中央部で東西方向および南北方向の畦畔によって区切られる区画の中で、浅い窪み状の堆積状況を示す溝状遺構。検出面はT.P.1.30mである。遺構500は畦畔によって区切られる西側の区画内をフの字状に流れる溝状遺構。調査区の西端を北側から流れる溝状遺構から分岐して、東西方向の畦畔の南側に沿って東側に伸びる。さらに中央部で南北方向の畦畔に沿って南下して伸びるもの。遺構の検出幅は1.0~4.0m、深さは30cmを測る。遺構の断面形は緩やかなU字形を示す。東西方向の畦畔の南側が特に幅が広くなっている。遺物も散逸的に多く見られた。埋土は①オリーブ黒色粘質土で炭化物を含む。②黒褐色粘質土で炭化物層が帶状に入る。③灰色粘質土ないしオリーブ黒色粘質土で炭化物を少し含む。①、②層

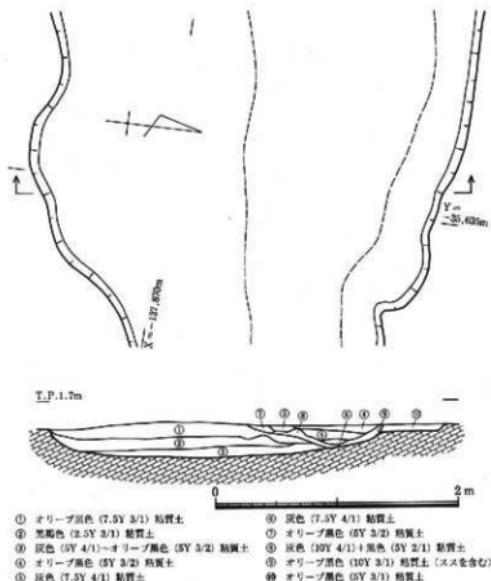
は遺物を多く含み、土師器杯・皿・小皿・碗、黒色土器碗、須恵器壺・台付杯・瓶子、土師質壺、綠釉陶器、焼けた石、砥石などが出土している。遺構888は畦畔によって区切られる東側の区画内を逆コの字状に流れる溝状遺構。東西方向の畦畔の南側に沿って西側に伸び、中央部で南北方向の畦畔に沿って南下する。さらに東西方向の畦畔の北側に沿って東側に伸びるもの。遺構の検出幅は0.5~1.2m、深さは25cmを測る。埋土は遺構500と同様で炭化物を多く含む。遺物も遺構の北側から多く出土している。土師器杯・皿・碗、黒色土器碗、土師器壺、綠釉陶器、砥石、焼けた石などである。遺物はいずれも細かく割れており完形品は見られなかった。炭化物を伴う層からの出土であることから、平安時代中期の集落が焼失し建物を整理する際に、建物に伴う遺物を東西および南北区画の畦畔外に廃棄したものと考えられる。

畦畔 調査区の中央部で東西方向および南北方向に伸びるもの。畦畔の検出幅は0.8~1.2m、高さは15cmである。畦畔の区画は東西方向が一辺17m以上、南北方向が12mを測る。検出面はT.P.1.40mで南側に向かうほど低くなる。この東西方向の畦畔を境に北側は平安時代の集落域が広がり、南側は極端に遺構が希薄となる。畦畔で区切られた区画内では耕作が行われていた。しかしながら平安時代中期の集落が焼失し建物を整理した際、東西方向の南側の区画内に遺物や炭化物が投棄されていることから、耕作地として機能していた時期は短かったものと思われる。

畦畔は耕作地として開拓された際に造られたものであるが、東西方向の畦畔は特に集落域の区切りを示すものである。

第2面では平安時代中期の掘立柱建物、井戸、畦畔などを検出した。掘立柱建物および多くの建物ピットを検出した。建物は調査区の北側に集中しており、畦畔より南側では建物ピットは見られなかったことから、東西方向の畦畔は集落域の南限を示すものである。また、掘立柱建物は建物の主軸方向、柱穴の検出状況などから時期差があり、幾度かの建替えが認められる。さらに墨書き器および埋納土器を伴う井戸を検出した。

平安時代の一般的な集落とは



第50図 D区、第3面・溝500 平・断面図

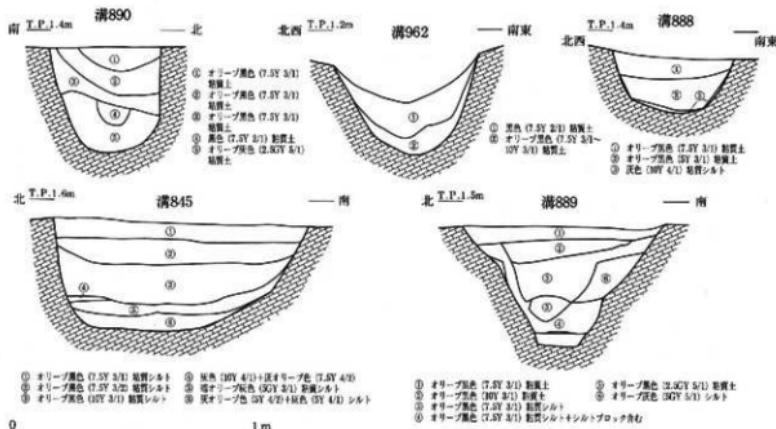
やや様相を異にする集落であると考えられる。

(3) 第3面

第3面相当の遺構として平安時代中期に集落域が南側に広がる以前の耕作跡、および集落域の南限を示す区画溝、素掘りの井戸などを検出した。検出面はT.P. 1.20 ~ 1.40 mを測る。地形は調査区の北側はほぼ平坦であるが、南側に向かって徐々に低くなる。また、調査区の中央部から南側は谷状地形を示し遺構は希薄となる。

耕作溝 調査区の北側で主に南北方向に伸びる多くの耕作溝を検出した。耕作溝の検出幅は30 ~ 50cm、深さは10 ~ 25cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘質シルトおよび暗オリーブ灰色シルトである。検出面はおよそT.P. 1.35mである。溝間は0.6 ~ 1.0mである。耕作溝から検出された遺物として土師器杯、甕、黑色土器杯、綠釉陶器、須恵器などがある。耕作溝が幾度も重複していることから、いくらかの期間、耕作が行われていたことが判る。これらの耕作溝は自然地形を利用したものではなく、ある程度平坦に整地した後に耕作地となったものと思われる。

溝（溝891、890、892、889、1027、1004） 調査区を東西方向に伸びる溝。耕作地から宅地へ移行する際に設けられた溝で、集落域の排水施設および集落域の境界を示す区画溝と考えられる。溝は4重になっており、集落域に近いほうから溝1004、溝1027、溝889、溝892に続く溝891と溝890である。各溝の検出形は集落域に近い溝ほど検出幅が広くまた浅く、集落域より離れる溝は深くなる。溝の検出幅は50 ~ 120cm、深さは20 ~ 55cmを測る。溝の断面形は集落域に近い溝はなだらかなU字形であるが、外側に位置する溝889はやや深いV字状を示す。埋土はオリーブ黒色粘質土層と粘質シルト層の互層で境目に炭化物が帯状にはいる。下層はオリーブ

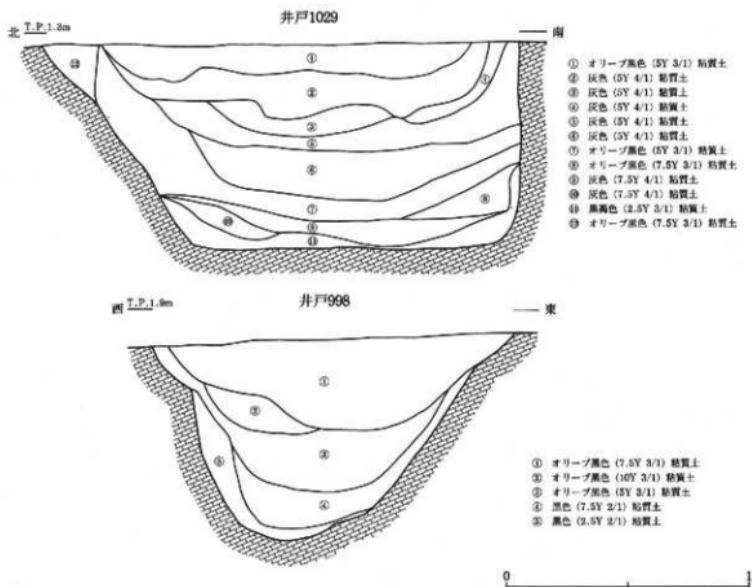


第51図 D区、第3面・遺構断面図

灰色粘質土層とシルト層の互層からなる。流水と堆水の時期があったことが判る。遺物は土師器壺、杯片、黒色土器片などが出土している。溝 1004、1027、889、892などが同時に並存していたかどうかは不明であるが、耕作地としていた時期から一気に集落域が拡張されたと考えられることから、4 本の溝は並存していた可能性が高い。

井戸（井戸 924、998） 調査区の東側中央部あたりで検出した素掘りの井戸。集落域の東端に位置する。井戸 924 の検出形は円形を示す。検出径は 1.7 m、深さは 0.9 m を測る。検出面は T.P. 1.15 m である。堀形は開口部からやや内側に入りその後ほぼ垂直に下るもの。埋土は上層がオリーブ黒色および灰色粘質土で炭化物を含む。ブロック積み状の堆積状況を示す。下層は黒褐色粘質土である。遺物として土師器羽釜などが出土している。井戸 998 は検出径が 1.5 m、深さは 85cm を測る。検出面は T.P. 1.10 m である。堀形は U 字形を示し広い開口部より底に向かって徐々に狭くなる。埋土は上層がオリーブ黒色粘質土で炭化物を含む。中層はオリーブ黒色ないし黒色粘質土である。下層は黒褐色粘質土でブロック積み状の堆積状況を示す。井戸 998 は井戸 924 より下層で検出していることから、機能時期が先行していたものと思われる。

その他の遺構 遺構 845 は調査区の北側中央部で検出された溝状遺構である。検出形は方形を



第52図 D区、第3面・井戸1029、998 平・断面図

示す。検出幅は一辺が 0.7 ~ 1.05m、深さは 45cm を測る。検出面は T.P. 1.40m である。埋土は上層がオリーブ黒色粘質シルトで炭化物が帶状に数条に入る。また炭化物や小土器片を含む部分もある。下層は灰色および灰オリーブ色シルトと粘質土の互層を成す。おそらく一時期は溝として機能していたが集落の拡大にともない埋められたものと思われる。遺物は土師器小片などが見られる。

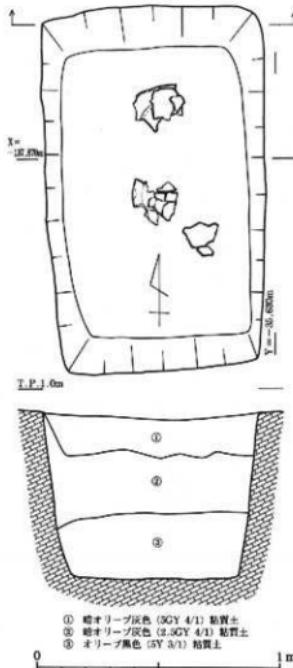
第3面では広域に整地した後、耕作地化され、さらに集落域の拡大に伴って耕作地が宅地化された変遷を追うことができた。調査区内では、平安時代中期に集落域の拡大が推し進められたのであろう。集落域の境には幾重にも溝を配していることから、排水等の水利に努めていたものと考えられる。計画的に造られた集落であることがうかがえる。

(4) 第3面下層

第3面下層相当の遺構は、第3面検出時後に下層確認のために一部深く掘削し、部分的に検出した遺構であるため面として捉えることはできなかったものである。遺構として土坑、井戸、自然流路などを検出した。さらに古墳時代の遺物を含む遺構、遺物分布地点を検出した。地形は北側から南側に向かって徐々に低くなるものである。

井戸（遺構 1029） 調査区の西側中央部で検出した素掘りの井戸。検出形はやや変形した方形を示す。検出幅は 1.98m、深さは 85cm を測る。検出面は T.P. 1.25m である。埋土は上層がオリーブ黒色粘質土、中層は灰色粘土で植物遺体および木片等を多く含む層とオリーブ黒色粘質土で、植物遺体および木片等を多く含む層の互層からなる。下層は黒褐色粘質土層である。出土遺物として土師器杯・碗、須恵器瓶子などがある。埋土の堆積状況から井戸はある程度の時期幅をもって徐々に炭化物や木片等を含む不純物が堆積したもの。最後は集落域を拡大する際に廃棄され埋められたものと思われる。

土坑（遺構 1046、1048、1049） 調査区の中央部で東西方向の区画溝跡の南側で検出した不定形土坑である。遺構 1046 は検出形が逆三角形を示す窪地状の土坑である。検出高は T.P. 1.00 ~ 1.20 m である。検出幅は東西方向の底辺が 3.5m、南北方向が 4.5m を測る。深さは 20cm である。埋土は上層がオリーブ黒色粘質土で下層に炭化物および植物遺体層が帶状に入る。下層は暗オリーブ灰色シルトである。遺構 1046 の中に土器出土土坑 1049、1048 が含まれる。土器出土遺構 1049 は遺構 1046 の北側に位置するもので、検出形は長方形



第53図 D区、第3面・土坑1049
平・断面図

を示す。検出幅は長辺が1.5m、短辺が0.9mを測る。深さは70cmである。埋土は上層が暗オリーブ灰色粘質土で植物遺体を多く含む。中層は暗オリーブ灰色粘質土でカルシウム粒、植物遺体を多く含む。下層はオリーブ黒色粘質土である。遺物として土師器の甕と鍋が出土している。遺物の検出面はT.P. 0.70mである。遺構1048は遺構1046の東側に位置するもので、埋上下層の暗オリーブ灰色粘質シルト層から土師器杯が出土している。

土坑（遺構1050、1055） 調査区の中央部で東西方向の区画溝跡の南側で検出した溝状遺構。遺構1050は東側中央部で検出された溝状遺構である。東側は偏溝で切られている。残存検出長は東西5.4m、検出幅は1.7mを測る。深さは10cmである。断面形は浅いレンズ状を示す。埋土は上層がオリーブ黒色粘質土、下層が暗オリーブ灰色シルトである。出土遺物は土師器杯、碗、黒色土器碗、須恵器台付杯などである。遺構1050を切るように溝状遺構1055が広がっている。遺構1055の検出形はやや丸みを持つ方形を示す。検出長は長辺が2.5m、短辺が1.9mを測る。深さは20cmである。埋土は上層がオリーブ黒色粘質土で下層に炭化物および植物遺体層が帶状に入る。下層はオリーブ黒色粘質土で炭化物、遺物を含む。遺物は土師器杯、黒色土器片などが出土している。

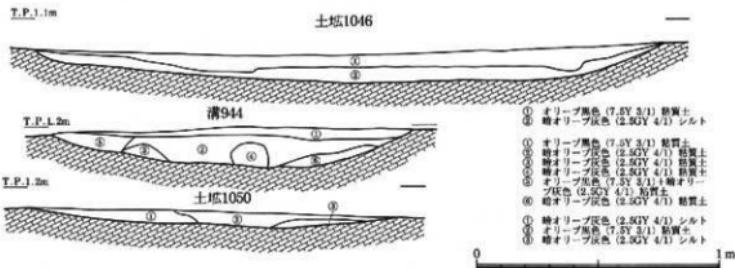
自然流路（遺構942、944、962、1032） 調査区を北側から南側方向に流れる流路である。遺構944は調査区の北東側から中央部を南下する流路で、途中で遺構942と遺構962に分岐する。検出面はT.P. 1.00～1.15mで、南側に向かって緩やかに傾斜する。検出幅は1.7m、深さは16cmを測る。流路の断面形は浅いU字形を示す。埋土は上層がオリーブ黒色粘質土で炭化物を含む。中層は暗オリーブ灰色粘質土で土器片を含む。下層は暗オリーブ灰色粘質土である。遺物として須恵器片、土師器片などが出土している。遺構942の検出幅は0.6～1.0mで、深さは25cmを測る。断面形はなだらかなU字形を示す。埋土の堆積状況は遺構944と同様である。遺構962の検出幅は0.6mで、深さは40cmを測る。断面形はU字形を示す。埋土は上層が黒色粘質土、下層がオリーブ黒色粘質土である。遺構1032は調査区の西側を南北方向に流れる流路である。検出面はT.P. 0.98～1.05mで南側に向かって緩やかに傾斜する。検出幅は2.7m、深さは10cmを測る。埋土はオリーブ黒色粘質土である。出土遺物として黒色土器杯、土師器杯などがある。遺物は耕地化に伴う整地が行われた際に混入したものと考えられる。これらの流路は耕作地される以前の自然地形に沿うもので、幾筋かの流路が一時的に流れているものと思われる。

自然流路（溝1下層・北壁内出土遺物） 調査区の北側で北東側から西方向に流れる流路で、古代から中世にかけて存続していたものと思われる。検出面はT.P. 1.32～1.40mを測る。流路の北側は調査区外になるため全容は不明である。溝1は検出幅が2.5m以上、深さは44cmを測る。溝の断面形は緩やかなすり鉢状を示す。埋土は上層が灰オリーブ色粘質シルト、中層が暗オリーブ灰色粘質土で、下辺に植物遺体層が帶状に入る。下層はオリーブ黒色粘質土で炭化物、植物遺体を含む。遺構の最下層部から遺物が出土している。調査区北西隅に設定し

た北側壁内から出土したもので、土師器小壺、甕、須恵器甕、広口壺などの破片が散逸的に検出された。出土した遺物から古墳時代末期のものと思われる。溝1は溝の方向や検出状況などからA区で検出された古墳時代の溝（溝16）とつながっていたものと推測される。

その他の遺構（遺構598、633～640、943） 調査区の中央部西側において、古墳時代の遺物を含む遺構および遺物分布地点が点在している。遺構の検出面はおよそT.P.1.40mで周辺地より僅かに微高地を示す。遺構598は本来第2面の遺構で建物ピットであるが、遺構の下層から須恵器杯蓋が出土している。遺構633～640は第2面で検出した遺構であるが、古墳時代の遺物分布地点内に含まれるものである。遺物は土師器甕・甕・碗、須恵器甕・杯蓋・杯身、土師器高杯脚底部などである。第3面下層で検出した溝943は、埋土から須恵器杯蓋、土師器甕などが出土している。さらに上層の遺構であるが、第1検出面の溝173から土師器甕、溝229から須恵器杯身などが出土している。遺物分布地点で出土した遺物は古墳時代末期に相当する。おそらく古代において耕作地を開墾する際、僅かながら起伏のあった地形を平坦にしたものと思われる。低地の自然流路や井戸などは埋められ、また微高地であったところに存在した前代の遺構は削平されるなどしたのであろう。

第3面以下の遺構は、主に耕作地の整地、開拓および集落域の拡大が行われる以前もので、井戸、土坑、溝、自然流路などを検出した。耕地化に伴う開拓として微高地の削平、窪地の盛土などを行ったものと思われる。さらに、古墳時代の遺物を含む遺構、遺物分布地点が検出され、新たな古墳時代の集落の広がりが想像される。



第54図 D区、第3面・遺構断面図

(5) 平安時代中期の掘立柱建物について

D区の調査では平安時代の掘立柱建物および建物ピットを多く検出することができた。検出した柱穴跡は幾度かの重複が認められ、長期間に渡って集落域を形成していたものと判断される。柱

穴内には炭化物を多く含むもの、柱を抜いた跡の顯著なものなどが見られ、柱穴の形態および埋土の状況などに違いが見られた。掘立柱建物の柱穴の検出状況、建物の主軸方向などから平安時代中期の掘立柱建物を分類すると、3時期に大別することができる。①掘立柱建物が焼失する以前のもの、②建物が焼失したもの（平安Ⅱ）、③焼失後の建替えを行ったもの（平安Ⅲ）である。また、A区、B区、C区で検出された掘立柱建物や顯著な遺構なども合わせて分類するものとする。

① 掘立柱建物が焼失する以前のもの（掘立柱建物 5、7、11）

掘立柱建物の主軸方向がN-2～5°-EまたはN-8～12°-Eを示す。建物ピットは不揃いで柱間距離や位置が不安定せず、柱穴の検出できなかったものもあり、ばらつきが見られる。9世紀中頃から後半頃に相当する。その他、C区-3面の建物ピット、C区-2面の土坑46、B区-3面およびC区-3面の焼土坑などが該当する。

② 建物が焼失したものの（掘立柱建物 9、10、12）

掘立柱建物の主軸方向がN-8～10°-Eを示す。建物ピットは造りが安定し、建物の配置、方向性などには若干規画性が認められる。柱穴内には多くの焼土、炭化物などが混入している。建物が焼失したもので柱根を抜き取る際、横木などを用いて取り除いているため、柱穴が大きく変形したものと思われる。9世紀末頃に相当する。その他、A区-3面の掘立柱建物3、建物ピット46、B区-2面の焼土坑3,4などが該当する。

③ 焼失後の建替えを行ったもの（掘立柱建物 2、3、4、6、8）

掘立柱建物の主軸方向がN-8～12°-Eを示す。建物ピットは造りが安定し、建物の配置、方向性などにはやや規画性が認められる。柱穴内にはススなどが含まれる。柱穴内に柱根の残るものも見られることから、建物の建て替え時に支障のない程度に柱根を抜き取ったものと思われる。10世紀初頭から中頃に相当する。その他、A区-2面の建物ピット82、A区-3面の土坑98、B区-2面の建物ピット35などが該当する。

この他、10世紀末期～11世紀頃に相当するものとして、A区-2面の掘立柱建物1、6、7、C区-2面の掘立柱建物、建物ピットなどが該当する。

これまでの調査により、復元することができた建物はおおむね2間×3間、2間×5間程度のもので、規模が小さく、建物の配置についても都庁のように、整然とした規画性をもつとは言い難いものである。また、瓦がほとんど検出されなかったことから、瓦葺の建物は存在しなかったものと考えられる。さらにD区の中央部以南では建物や顯著な遺構が検出されず、地形的にも低くなることから住居域の南限であることが判った。高柳に茨田郡の郡衙が存在すると推測されているが、今回の調査区内で検出された掘立柱建物は郡衙の中心的建物とは考えにくく、むしろ郡衙に付随する関連施設、ないし郡衙に近接する集落群の建物であると考えられる。

（杉本）

第3項 遺物

D地区からは他の地区に比べると、遺物の量は多く、コンテナにして、22箱分が出土した。

(1) 遺構出土

第1面の遺構としては近世の溝があげられるが、中からは古墳時代から平安時代の遺物が出土している。(132)は溝2出土の土師器の皿。(135)は溝3出土の土師器の杯、(148)は溝285出土の土師器の壺である。(149)は溝194より出土した綠釉陶器の椀。色調から京都系と思われる。(166)は溝10出土の須恵器杯蓋である。

また、中世に属するとされる掘立柱建物1のピット27からは、(124～127)のように平安時代の遺物が出土している。遺構の検出状況から中世と考えられているので、混入と言うことになる。(124、125)は、篠窯産の須恵器の鉢である。前者は口縁部付近になると内湾気味になり、口頸部は外反し、口縁端部は内側にやや肥厚するという特徴をもつ。一方、後者は口縁部付近になると内湾し、そのまま丸い口縁部に移行している。体部の器壁は非常に薄い。

第2面と認識されている平安時代の掘立柱建物とそれに付随するピットからも遺物は出土している。多くの柱根は抜き取られているので、その後で入り込んだことになる。

掘立柱建物8のピット156からは、(140、146)に示した黒色土器B類が出土している。(146)は炭素の吸着状況が悪いので判断に迷ったが、B類と考えた。掘立柱建物10では、(131)がピット110から出土した。土師器の皿で、口縁部は外反し、そのまま丸く終わっているのが特徴。薄い器壁をもち、胎土は粗い。また、ピット357からは(163)のような黒色土器A類の椀の底部も出ている。内面にはミガキの後に暗文が施されている。掘立柱建物11では(145)がピット114から出土した。黒色土器A類の椀で、口縁内面に沈線がめぐる。掘立柱建物12では(121～123)がピット117から出土している。(121)は土師器の皿の小破片で、胎土は精良。(122、123)は黒色土器A類の椀の破片である。また、(143)と(144)に示す黒色土器A類の椀も、ピット168とピット92よりそれぞれ出ている。

(128、129)はピット232から出土した土師器の杯である。いずれも、口縁端部は丸く終わっている。(129)は径1mmを越える砂粒を含む。(130)はピット109から出土した土師器の杯。(133)はピット372出土の土師器の皿。(134)はピット101出土の土師器の杯。残存度は非常に悪い。(136)はピット222出土の土師器の杯で、口縁部は強い横ナデにより外反気味に終わっている。(138)も上師器の杯。小破片のため、口径は不正確。(139)はピット288出土の黒色土器A類の破片。(141)もピット140出土の黒色土器A類の破片である。(147)はピット93出土の黒色土器の底部であるが、炭素がはがれてしまっている。

(150)はピット440出土の黒色土器A類の杯である。復元口径17.0cm、器高5.2cmを測る。(164)も同じところから出土した黒色土器A類の椀。(153)・(154)は土師器の杯でピット637から出土した。

(155)～(158)はピット633から出土した。(155)・(156)は土師器の杯、(158)は緑釉陶器の底部である。(160)はピット745から出土した土師器の杯である。(162)はピット860から出た

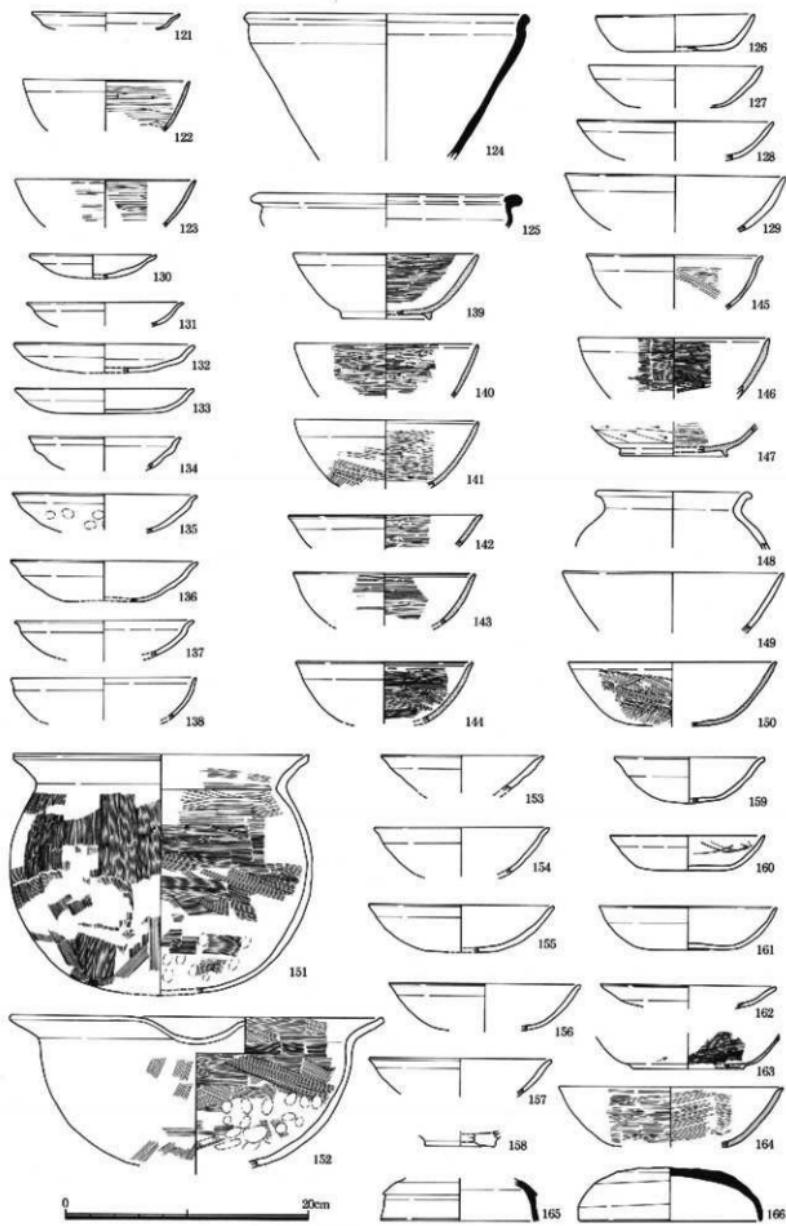
土師器の皿。(163)はピット357出土の黒色土器A類の椀である。高台は断面三角形を呈する。内面には、ミガキの後で暗文が施されている。

(167)～(174)は井戸172出土の土器である。(169)が曲物内から、あとは埋土の中層から出土した。(167)～(171)は土師器の杯で、(171)以外は完形品である。いずれも、口縁端部は丸く終わり、体部外面に指頭圧痕が認められる。口縁部付近から内面全体にはナデが施されている。(168)の底部には「井」という墨書がある。また、写真図版にも載せておいたが、(170)の口縁端部内面には黒色物が付着している。灯明皿に使用されていたものと考えられる。(172)は須恵器の壺である。口縁部は欠損している。篠窯産と思われる。(173)は黒色土器A類の皿で、口径14.0cm、器高2.1cmを測る。(174)は黒色土器A類の椀。口径13.4cm、器高4.0cmとやや小ぶりである。両者ともに外面にはケズリが残り、内面にはヘラミガキがおこなわれている。なお、(175)は井筒に使われていた曲物である。復元すると、口径36.0cm、器高14.0cmを測るが、この資料は実測図作成後に崩壊してしまった。この他にも、(137)が井戸172の上層から出土している。口縁部は小さく外反している土師器の杯である。この井戸の時期だが、土師器の杯には、ケズリやミガキの手法は見られず、口縁端部が丸く終わるものばかりで、小さくつまみあげられるものがないということからすると、9世紀後半という範疇で捉えておきたい。

(176)～(187)は溝888から出土した。(176)～(181)土師器の杯・皿である。口縁部は丸く終わるものから、端部をつまみ上げて肥厚させるものもある。(180)はいわゆる「て」の字状口縁をもつ皿で、器壁厚は2mmと非常に薄い。(182)～(185)は黒色土器A類の椀である。(186)は須恵器の底部、(187)は土師器の壺である。出土遺物には時期差があるようだが、「て」の字状口縁の土師器の出土しているので、最終埋没時期は10世紀の中頃であろうか。

(188)～(203)は溝500から出土した。(188)・(191)は土師器の杯。口縁部は丸く終わっている。(192)・(193)は土師器の皿で、口縁端部を丸く仕上げるものと、わずかに肥厚せるものとがある。(195)・(196)は黒色土器A類の椀である。(196)は火を受けており、炭素はなくなっている。(197)は綠釉陶器の底部の破片。内面にはミガキが施されていることが観察される。軟質であり、京都系のものと考えられる。(198)～(202)は土師器壺。口縁端部の形態にバラエティーが認められる。(203)は須恵器の鉢。口頭部をもち口縁部にむけて外反する形態である。篠窯産と思われる。

(151)・(152)は第3面で検出された土坑1049から出土した土師器である。(151)は口径24.0cm、復元高19.8cmを測る。口縁端部は平坦面を作り出し、わずかにくぼんでいる。内外面ともにハケ調整が施される。外面には分厚く煤が付着している。(152)は口径30.4cmの片口の鉢である。外面は煤がまば全面を覆っているが、ハケメが部分的に観察される。内面も同様にハケ調整であるが、口縁部の方が粗い目をしている。C区の土坑146出土のものと大きく異なる。(159)は土坑1054で検出された土師器の杯。(161)は土坑1056から出土した土師器の杯である。粘土紐を巻き上げたあと、指によって成形された痕跡が観察できる。口縁部は横ナデがおこなわれている。底部に墨書がおこなわれているが、判読はできなかった。

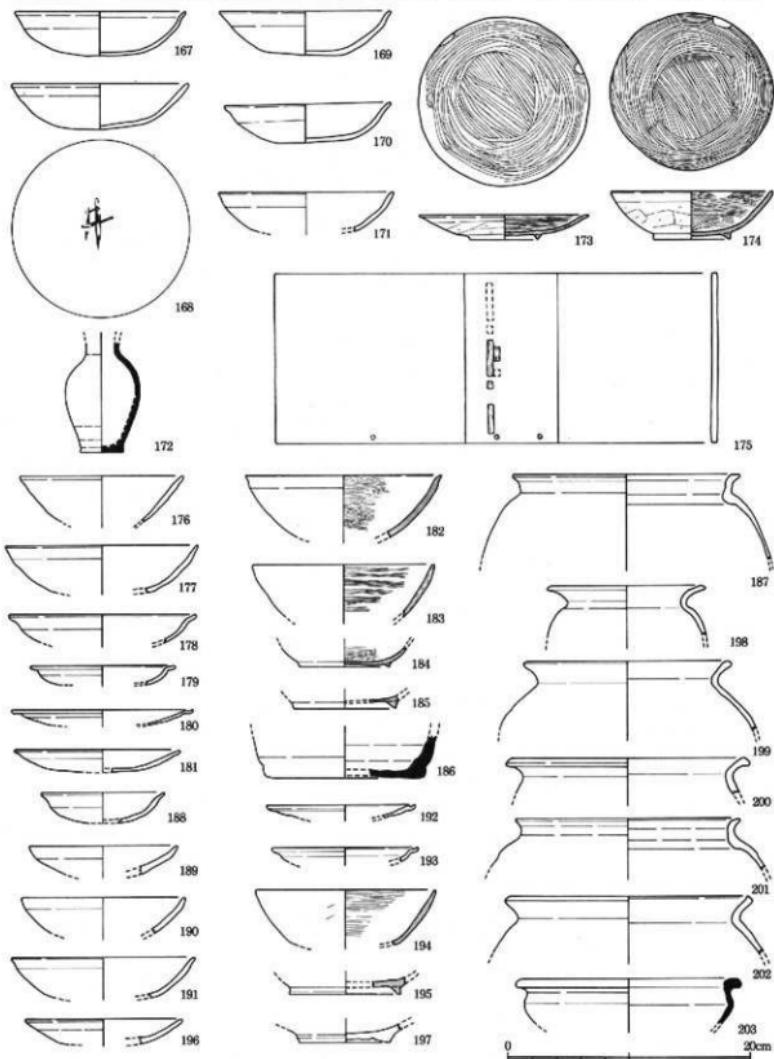


第55図 D区、遺構出土遺物実測図（1）

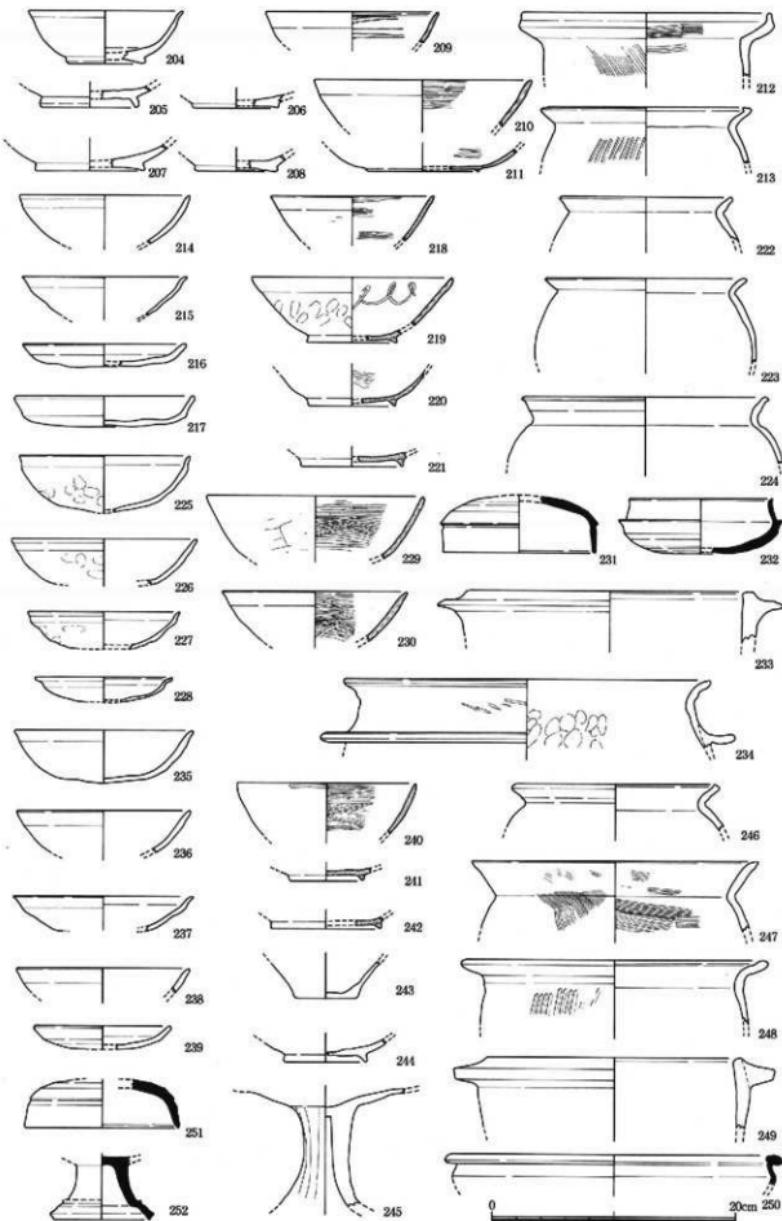
そして、(165) は第3面下層で検出された溝943出土の須恵器蓋である。

(2) 包含層出土

(204) ~ (252) には包含層出土の遺物をまとめた。第1面の上層では、近世の遺物の図化はお



第56図 D区、遺構出土遺物実測図（2）



第57図 D区、包含層出土遺物実測図（1）

こなわなかった。同じ層からでたもので図化に耐えられるもの、特徴的なものを、(204)～(213)に示した。(204)・(207)・(208)は京都系の縁軸陶器の底部片である。(205)・(206)は灰軸陶器の底部片である。(209)は瓦器碗で、口縁部内面には沈線が走る。内面に粗い暗文が観察される。(210)は黒色土器A類の破片。(212)・(213)は土師器の壺である。

(214)～(224)は第2面の上層で検出された。(214)・(215)は土師器の杯、(216)・(217)は上師器の皿である。(218)～(221)は黒色土器A類の碗。(219)ではミガキのうちに暗文が施される。(222)～(224)は土師器の壺である。

(225)～(234)は第3面の上層で検出された。(225)～(227)は土師器杯、(228)は上師器の皿である。底部から口縁部にいたるところで大きく外反し、口縁端部はやや肥厚している。

(229)・(230)は黒色土器A類の碗である。(213)・(232)は須恵器の杯蓋で、(233)・(234)に示した土師器の羽釜も出土している。(233)のような昔原分類による摂津C型に属するものもあれば、(234)のように口縁部が外反し肩部に水平の鉤をめぐらす河内B型に属するものもある。後者は生駒山西麓産の胎土である。

(235)～(252)は、第3面下層遺構を検出する際に出土した。(235)～(238)は土師器の杯であり、土師器の皿(239)も出土している。(240)は黒色土器A類の碗、(241)～(243)は黒色土器B類の碗である。(243)は弥生土器の底部の破片。(244)は灰軸陶器碗。底部の内面には軸薬はかかっていない。外面の軸のつき方からするとつけがけされたものであろう。折戸53号窯式に併行する時期と考えられる。(246)～(248)は土師器の壺、(249)は土師器の羽釜である。(250)は須恵器の鉢の破片。(251)は須恵器杯蓋、(252)は須恵器の高杯の脚部である。また、(252)のような土師器の高杯の脚部も出土している。

(253)～(257)には古墳時代の土器をまとめた。側溝から出土したので出土層位の不明なものがある。(253)は土師器の鉢。口縁部は頸部からわずかにくびれて、外反している。火を受けたような痕跡を認める。(254)は鉢の底部。外面はタタキ成形、底部付近は横方向にケズリが施されている。韓式系土器の技法的特徴をもつ。ただし、肉眼で観察する限り、ほかの土師器と胎土が異なるわけではない。

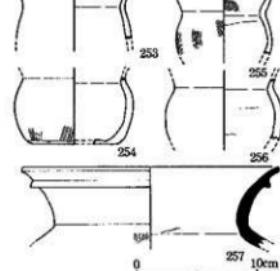
(255)も鉢の破片で、外面には縱方向にハケ目がある。

(256)は、口縁部、底部を欠損しているが、(255)と同じ器種と考えられる。

(257)は、須恵器の壺の口縁部である。外面には、わずかに平行タタキの痕跡が認められる。ローリングを受けている。口縁端部は平坦面をなして終わっている。口縁部の残りが悪いので、傾きは多少上下があるかもしれない。TK216型式に併行するものと捉えておきたい。

また、写真だけだが、包含層より産地不明の耳壺の体部片(286)と、平瓦(287)も掲載した。後者には布目が認められる。

(権宜田)



第58図 D区、包含層出土遺物(2)
(286)と、平瓦(287)も掲載した。後者には布目が認められる。

第5節 E区の調査成果

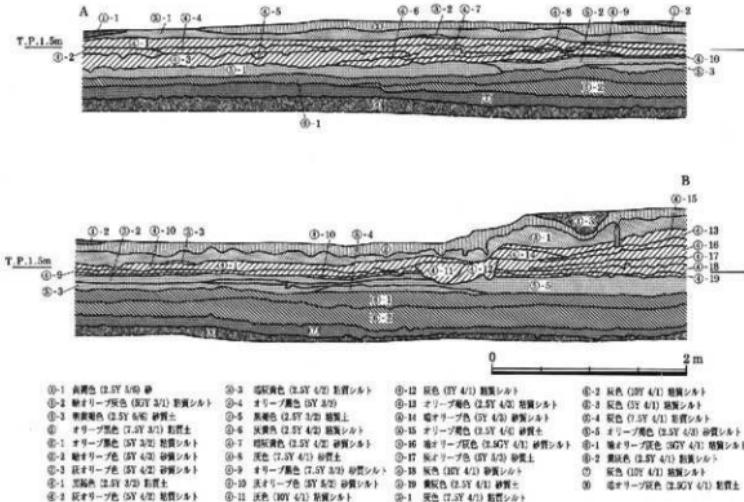
本調査区では、近世以降の耕作に伴うと考えられる段、古代の畠状の造構1条を確認するにとどまった。遺物の出土も少なかった。

第1項 層序

機械掘削し、旧耕土、盛り土を除去からの層については以下のとおりである。近世の遺物包含層(④層)として、調査区の北側では3層が堆積していた。ただし、南側では砂層とシルト層が互層になっており、包含層の最上層のレベルは北側よりも30cmほど高くなっていた。この層は、いずれも自然堆積層であり、後述するF地区の河川に伴う堆積層と考えている。中世の遺物包含層(⑤層)は3層ほどに分かれた。さらに下の古代の遺物包含層(⑥層)については、北側では1層であったが、途中からは2層になっている。

土層は全体として、北から南へと低くなる。いずれの層も境界は上下に入り組んだ形になっており、明確な不整合面を確認するには至らなかった。すなわち、生産の場ではあっても、生活の場という状況は見いだせなかったのである。各層からの遺物の包含量はA～D区までと同様に少なかったが、基本的に下層から上層へ移るにつれて、概ね新しい傾向にはあった。

なお、古代の遺物包含層の下には、黒色バンドと呼んでいた暗オリーブ灰色粘土質シルトが堆積



第59図 E区、東壁断面図

していた(⑦層)。この層も、南へといくにつれて低くなっている。この層より下の層から、遺物を確認することはできなかった(⑧層)。

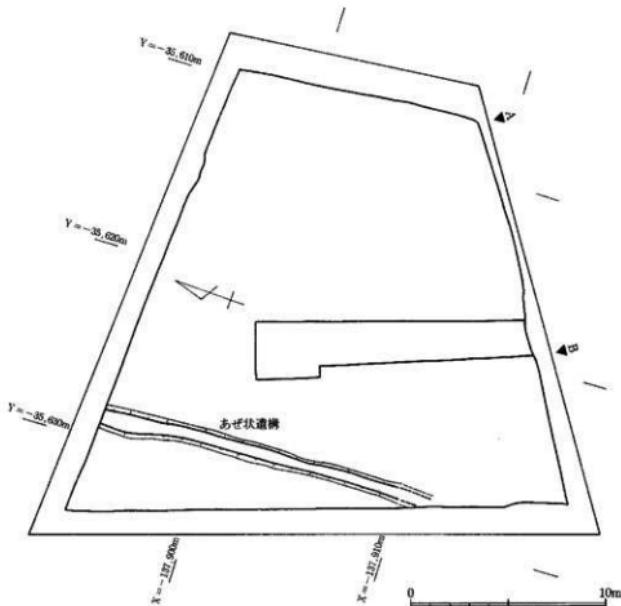
第2項 遺構

近世に相当すると思われる面では、段を確認した。水田か、畑作かは明らかではないが、耕作に伴うものであったと思われる。ちなみに、この段周辺では、径2~3cmの木材を多数確認した。土留めの機能を果たしていたものと推測する。続く、中世の面での遺構は未確認である。

古代に相当する面では、D地区から続く畔状の高まりを検出した。幅110cm前後、高さ5~10cmを測る。断面観察によると、この高まりは上層から削平を免れたために形成されたものではなく、疑似畦畔ではない。明確ではないが、盛土によって形成されたと考えざるを得ない。

第3項 遺物

近世包含層以下、各層からは、陶磁器、瓦器、黒色土器、土師器、須恵器が、コンテナにして1/2箱出土したけれども、小破片であったため図化はおこなわなかった。
(福宜田)



第60図 E区、全体図

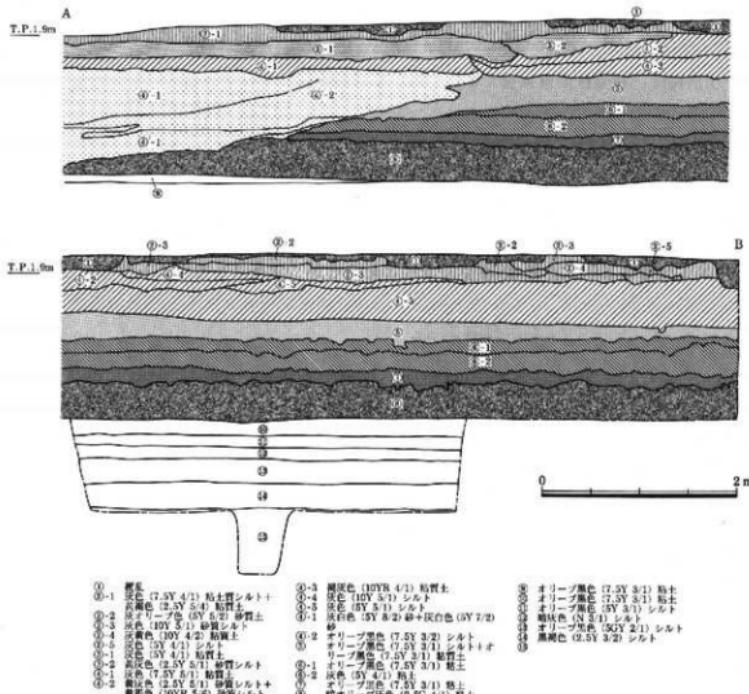
第6節 F区の調査成果

本調査区では、近世に埋没した流路1条と、古代と考えられる畠状の高まり1条を確認した。遺物は全体に稀薄だったが、流路中より弥生～近世にかけてのものが出土した。

第1項 層序

包含層からの遺物の出土は非常に稀薄であった。層の時期は、E地区との対応関係から決めたところもある。現状では、図示したように、④層を近世遺物包含層、⑤層を中世遺物包含層、⑥層を古代遺物包含層と捉えている。E区と同様に、層の境目は上下に入り組んでおり、明確な遺構面は形成されていなかった。

この調査区では、さらに下の層の堆積状況の確認もおこなったが、いずれの層からも、遺物を確認することはできなかった。⑨層は、⑦層の下に広がる黒色バンドである。また、⑮層には、多数の



第61図 F区、東壁断面図

植物の葉が含まれていた。これらについては、花粉・珪藻分析をおこなった。結果については、第5章を参照いただきたい。

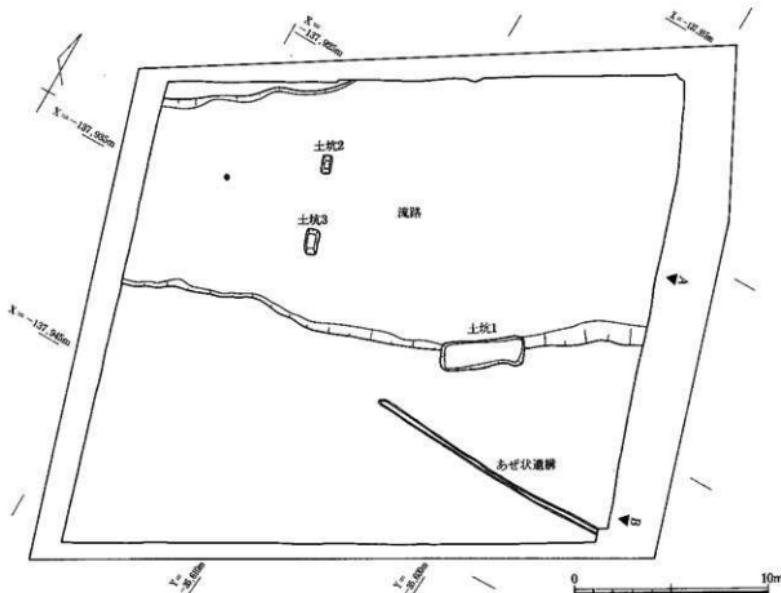
第2項 遺構

近世の遺物包含層を除去したところで、土坑と流路を検出した。

土坑1は長辺4m、短辺2.5m。深さ75cmを測る。断面観察によれば一気に埋められていた状況が観察されたが、性格については定かでない。

流路は、調査区を東西に横切る形で検出した。南側の肩部は確認できたものの、北側について未調査区に肩があったものと推測される。この流路出土の遺物は、ほとんどが時期のわからない土師器の破片であった。流路の最下層部分からは曲物や黒色土器、須恵器、土師器が出土した。この流路の最終埋没時期は近世と考えられる。なお、最下層付近から奈良時代から平安時代の土師器や須恵器、黒色土器などが出土した。これらの遺物には完形品も含まれている。土層を検討したところ、東側では近世の流路で完全に削平されていたが、西側の断面で、わずかに落ち込みを確認した。この落ち込みも、人為的なものとは考えられず、自然のものであると判断している。

あぜ状遺構は、調査区の南東部で確認した。裾部分で幅60cm前後、高さ15cm前後とE地区



第62図 F区、全体図

よりは少し小さい。ただし、土の堆積状況は同じであった。E地区の方向にはほぼ直行するので一連のものと考えた方がいいであろう。

第3項 遺物

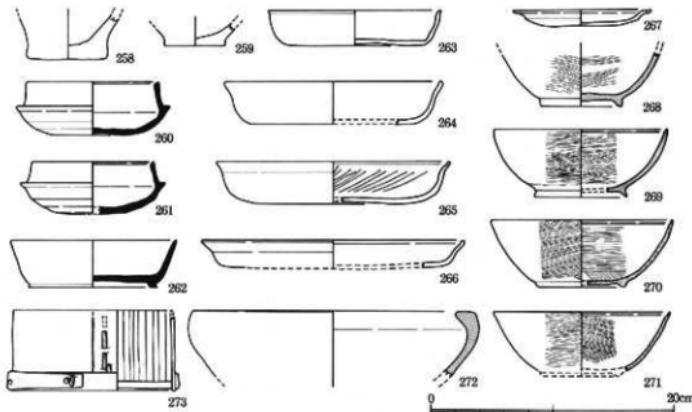
コンテナにして4箱の土器類が出土した。そのうち自然流路出土の遺物のいくつかを図示した。上層では近世のものが含まれていたが図示していない。少量だが、各時期のものが含まれている。

(258)・(259)は弥生土器の底部。(260)～(262)は須恵器の杯身である。

(263)～(265)は土師器の杯である。(263)は口径14.0cmを測る完形品。口縁端部はわずかに外側に拡張している。(265)は半分程度の遺存度である。復元口径18.8cmを測る。口縁端部は内側に沈線があり、また内面には右上がりの放射状の暗文が観察できる。内外面さらには底部まで非常に丁寧に磨いている。(266)は土師器の皿である。小破片のため、復元した口径は多少前後するかもしれない。(267)も土師器の皿である。

(268)～(271)は黒色土器である。(269)は黒色土器A類の椀である。内外面を磨いているが、外面にはわずかにヘラ削りの痕跡が観察される。口縁内面には沈線が走る。(270)黒色土器B類の椀である。内外面には丁寧なミガキがかけられている。口縁内面には沈線が施されている。興味深いのは体部には補修孔がついている点である。

(272)は瓦質土器の鉢である。この他にも瓦質土器はわずかながら出土している。また、(273)は小型の曲物である。口径12.8cm、器高6.6cmを測る。底部も遺存している。



第63図 F区、出土遺物実測図

第4項 出土遺物について

事実報告の章を終わるにあたり、A区～F区までの遺物の特徴を簡単に整理しておく。

(1) 旧石器時代～弥生時代中期

この時期の遺物は見られない。

(2) 弥生時代後期

後期前半の土器がわずかながら出土した。

(3) 古墳時代

前期の遺物は認められない。中・後期の土器は、わずかながら調査区全域に遺物が分布する。ここでは、数は少ないが、初期須恵器と韓式系土器が出土している点を特筆しておきたい。

(4) 飛鳥～奈良時代

飛鳥時代の遺物は皆無である。奈良時代のものはわずかだが出土している。

(5) 平安時代

この遺跡の中心的な時期であり、施釉陶器・黒色土器・須恵器・土師器などがまとまって出土している。以下で、それぞれについて略述する。

緑釉陶器 数多く出土している点が注目される。緑釉陶器は京都系がほとんどだが、近江系も若干認められる。

灰釉陶器 黒笛 90号窯式が多いが、折戸 53号窯式のものもある。

黒色土器 器種としては、椀がほとんどで、一部皿あるいは鉢が認められる。杯もわずかに存在する。内面にのみ炭化物が吸着したA類が圧倒的に多い。

須恵器 篠塚産の須恵器が出土している。器種としては鉢と小型の壺である。

土師器 杯の場合、底部にケズリを施すものは皆無である。体部に指押さえの痕跡が残り、口縁部にヨコナデが施されるものばかりである。口縁端部は、丸く終わらせるものと、つまみ上げるものとが拮抗して存在する。皿についても同様であるが、いわゆる「て」の字状口縁をもつものが、わずかながら存在する。

墨書き土器 3点出土した。土師器の杯が2点、須恵器の杯が1点ある。土師器のうち1点は「井」と書かれていたが、もう1点については判読できなかった。また、須恵器の資料については資料が散逸してしまい、報告できなかった。

以上の状況をまとめると、平安時代の中では9世紀中頃のものがもっとも遡る。そして9世紀後半から10世紀後半にかけての遺物がまとめて存在する。この間、遺跡としては間断なく継続していたようである。

(6) 中・近世

瓦器の出土量は、黒色土器の量に比べると格段に少ない。しかも、11世紀代の古い特徴をもつ確実なものは出土していないので、平安時代の後半に、いったん遺跡は断絶期を迎えたようである。そして12世紀後半以降、該当する遺物がわずかがら出土するようになる。こうした遺物の出土量

の変化が、この地域の土地利用の変遷と大きく関わっているものと思われる。

(7) その他

フイゴの羽口 厳密に言うと時期の比定は難しいわけだが、もっとも量の多い平安時代に属する可能性が高いと思われる。

砥石 示したのは1点だけだが、ほかにも数点認められる。これらも、基本的には平安時代に属するものと考えている。

瓦 写真で1点掲載しただけだが、ほかにも10数点程度の平瓦が出土している。

これらの遺物の出土も、平安時代の高柳遺跡の性格を考える上で重要な視点をもたらすものと言えよう。

主要参考文献

伊野近富「窯窓原型と陶邑原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第37号 1990

菅原正明「畿内における上釜の製作と流通」『文化財論叢』1983

寺沢薰・森井貞雄「各地域の様式編年 河内地域」「弥生土器の様式と編年」近畿編I 1989

田辺昭三「須恵器大成」角川書店 1981

横田賢次郎・森田勉「太宰府出土の輸入陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 1974

中世土器研究会編「概説 中世の土器・陶磁器」1995

橋本久和「畿内の黒色土器」(I)『中世土器の基礎研究』II 1986

橋本久和「大阪北部の古代後期・中世土器様相」『高槻市文化財年報』昭和63・平成元年度

1991

伊野近富「窯窓原型と陶邑原型の須恵器について」『京都府埋蔵文化財情報』第37号 1990

菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1983

百瀬正恒「平安時代の綠釉陶器」『中世土器の基礎研究』II 1986

(禪宣田)

第4章 まとめ

第1節 弥生時代の焼失住居について

C区第3面の北側において、弥生時代の竪穴住居を検出した。竪穴住居は焼失しており、住居床面直上から火災で焼け落ちたと思われる屋根を構成する垂木材、屋根材、壁板材などが壁側から中央部に向けて放射線状に広がり堆積していた。炭化材として角材、丸太材、板材などが見られた。おそらく桁梁、垂木等が焼け落ちたものと思われる。その他、壁構内で縦板材の痕跡を確認することができた。また、屋根材として藁や草の炭化物を含む焼土層なども検出した。ここでは炭化材の検出状況を整理し、問題点の把握につとめたい。

1. 検出状況

- ①住居内の中心部に向けて、幅約10cmほどの割り板材、丸太材などをほぼ放射線状に検出した。しかしながら、主柱と思われる炭化材は確認できなかった。
- ②壁溝周辺において中心部に向けて放射線状に倒れ込む、棒状の炭化材や板状の炭化材を検出した。また、僅かではあるが横方向の炭化材も見られた。
- ③壁溝内で検出径2～3cmの小柱穴を50～70cm間隔で検出した。小柱穴内には棒状の炭化した木片（木舞）と炭化物が含まれる焼土層の埋土が認められた。
- ④壁構内で小柱穴に挟まるように厚さ2～3cm、検出幅15～20cmほどの板状の縦板材が焼土化したもの、あるいは焼土を含む埋土が板状に並んでいる痕跡を確認した。
- ⑤壁溝外に40～50cm離れて、住居址は同心円状に50～70cmの間隔で小柱穴列が巡る。さらに50～70cm外側に離れて、もう1条の小柱穴列がめぐることが判った。
- ⑥住居中央部で炉跡の上層部やその付近で藁や草などを含む焼土層を検出した。
- ⑦炭化材の材質としてブナ科コナラ節またはクヌギ節のものであることが判った。

2. 問題点と課題

炭化材、炭化物の検出状況から上屋構造および壁構造の復元を試みるうえで、様々な資料、手がかりを得ることができた。加えて、検出状況からさらに検討していかなければならない点も見られた。

- ①壁構内に縦板材の痕跡が見られたこと。
- ②壁構内に小柱穴がほぼ等間隔に並び、板材を挟みこむように配置されていること。
- ③壁溝外に小柱穴が同心円状に巡ること。

今回検出した状況を手がかりとして、竪穴住居の上屋構造および壁構造について検討し、復元できるよう調査、研究を進めることができればと考えている。ここでは問題点と課題の提示になったが、別に稿をまとめる機会を見つけてみたいと思っている。

第2節 高柳遺跡の遺構の変遷について

高柳遺跡はこれまで主に平安時代の遺跡として周知されてきたが、今回の調査の結果、断続的で

はあるが弥生時代から近世に至るまでの複合遺跡であることが判った。弥生時代の竪穴住居跡、平安時代の掘立柱建物跡、井戸、焼土坑、溝などの遺構と、弥生時代や古墳時代を含む遺物を検出することができ、貴重な資料を得ることができた。特に平安時代の掘立柱建物については 20 棟余りを確認し、集落域の拡大の様子をうかがうことができた。さらに平安時代の集落域の南限を確定することができたことも重要である。検出された遺構をもとに高柳遺跡の遺構の変遷についてまとめ、若干の検討を加えてみたい。

1. 弥生時代・古墳時代

高柳周辺ではじめて弥生時代の竪穴住居が検出され、寝屋川市西部低湿地における弥生時代集落の存在が明らかになった。これまで古川沿いの守口市や門真市でも、弥生時代の遺構や遺物が検出されており、銅鐸が出土したことなどは知られている。今回の調査で弥生時代の竪穴住居の検出によって、古川水系低湿地の弥生時代の集落形成を考える上での1つの資料となるであろう。今後これらの弥生時代の遺構出土地点との関連についての解明が大きな課題となる。

古墳時代については遺物を伴う遺構を検出し、古墳時代の遺構の広がりを確認した。古墳時代後期すなわち6世紀後半頃の溝、土坑、掘立柱建物、自然流路であり、その時期の遺物も検出した（D区第3面下層、A区第3面遺構142、溝18、掘立柱建物2、B区第3面遺構33、溝10、ほか）。これまでにも、古墳時代の遺物は数点出土していたが、遺構に伴うものではなかった。今回の調査においては断片的な検出であったため、遺構全体の性格を明確に捉えることはできなかつた。古墳時代の集落についての解明も重要な課題である。

2. 平安時代

古墳時代後期以降、平安時代中頃までの遺構は希薄となる。自然地形に沿った自然流路、素掘りの井戸、土坑や溝などが散逸的に見られたが、ある時期に整地され集落域を形成するようになる。平安時代の遺構については大きくⅢ期に分け考えてみたい。

平安時代Ⅰ期 平安時代中期の集落域が南側に拡大されるまでの時期である。主な遺構として、A区第3面の耕作溝跡、D区第3面の耕作溝跡・多重の区画溝・畦畔・素掘りの井戸などがある。平安時代の集落の形成とともに、前代の自然流路を埋めるなどの開発、耕地整地を行ったと考えられる。D区の調査区中央部の畦畔で耕作溝は終結しており、耕作域の境を示す。畦畔の南側は遺構が希薄となる。その後、集落域の拡大が徐々に計られ、東西方向の区画溝が多重に設定される。集落域を区画する溝であり、排水等の水利に努めていたものと思われる。

古川を挟んで南東方向に対置する神田地区では集落域の周りを溝が巡る輪中が見られる。高柳においても集落域の周りを溝で区切っていたのではないかと思われる。集落域の形態について検討する資料になると思われる。また、平安時代の開発の時期、契機についても明らかにすべき課題となるだろう。

平安時代Ⅱ期 集落域の拡大にともない耕作地が宅地化され、掘立柱建物が立ち並ぶ。掘立柱建物は幾度かの建替えが認められる。また、焼失し柱穴に炭化物が入るものなどが見られる。区画溝

および畦畔の南側には顯著な遺構も見られないことから、平安時代の集落域の南限を示すものである。主な遺構として、D区第2面井戸172、掘立柱建物5・7・11・9・10・12、A区掘立柱建物3、C区第3面およびB区第3面の焼土坑などが該当する。焼土の入った焼土坑は土器焼成あるいは鋳造関係遺構と考えられ、集落域とは別に生産域を形成していることが判った。D区第2面の井戸172からは墨書き土器も検出されている。

平安時代Ⅲ期 集落域での焼失後、掘立柱建物の建替えが行われたもの。D区掘立柱建物2・3・4・6・8、A区第2面建物ピット82、D区畦畔内溝500、888などが該当する。遺構の中に炭化物が多く含まれ、建物の焼失後の整地に伴う遺物の廃棄なども見られる。

高柳には茨田郡の郡衙が存在すると推測されているが、今回の調査区内で検出された掘立柱建物は集落域の南限に位置することから郡衙の中心的建物とは考えにくい。むしろ郡衙に付随する関連施設、ないし郡衙に近接する集落群の建物であると考えておきたい。

茨田郡の中心的施設は今回の調査区の北方に位置すると思われる。高柳遺跡の北側の地点には高柳庵寺がある。現在ある長榮寺付近から古瓦が検出されたことから、古代寺院が存在したと考えられている。この古代寺院を茨田寺とする説があり、この付近は茨田郡の中央部に位置し、茨田郡茨田郷の所在地に比定されている。さらに郡衙の所在を推定している(藤沢一夫「寝屋川市誌」『寝屋川市域の古代寺院』)。高柳庵寺と高柳遺跡は直線距離にして約500mである。郡衙の規模は、足利健亮によると方三町近くに及ぶということである(「郡衙の境域について」『歴史研究』11、1969年)。高柳庵寺周辺に茨田郡の中心的施設を想定すると、茨田郡の郡衙の規模はかなり大きかったことになる。郡衙の中心的施設の所在については今後の課題である。さらに高柳遺跡の東南側約400mに位置する平安時代の集落跡である神田東後遺跡との関係の解明も必要であろう。

3. 中世

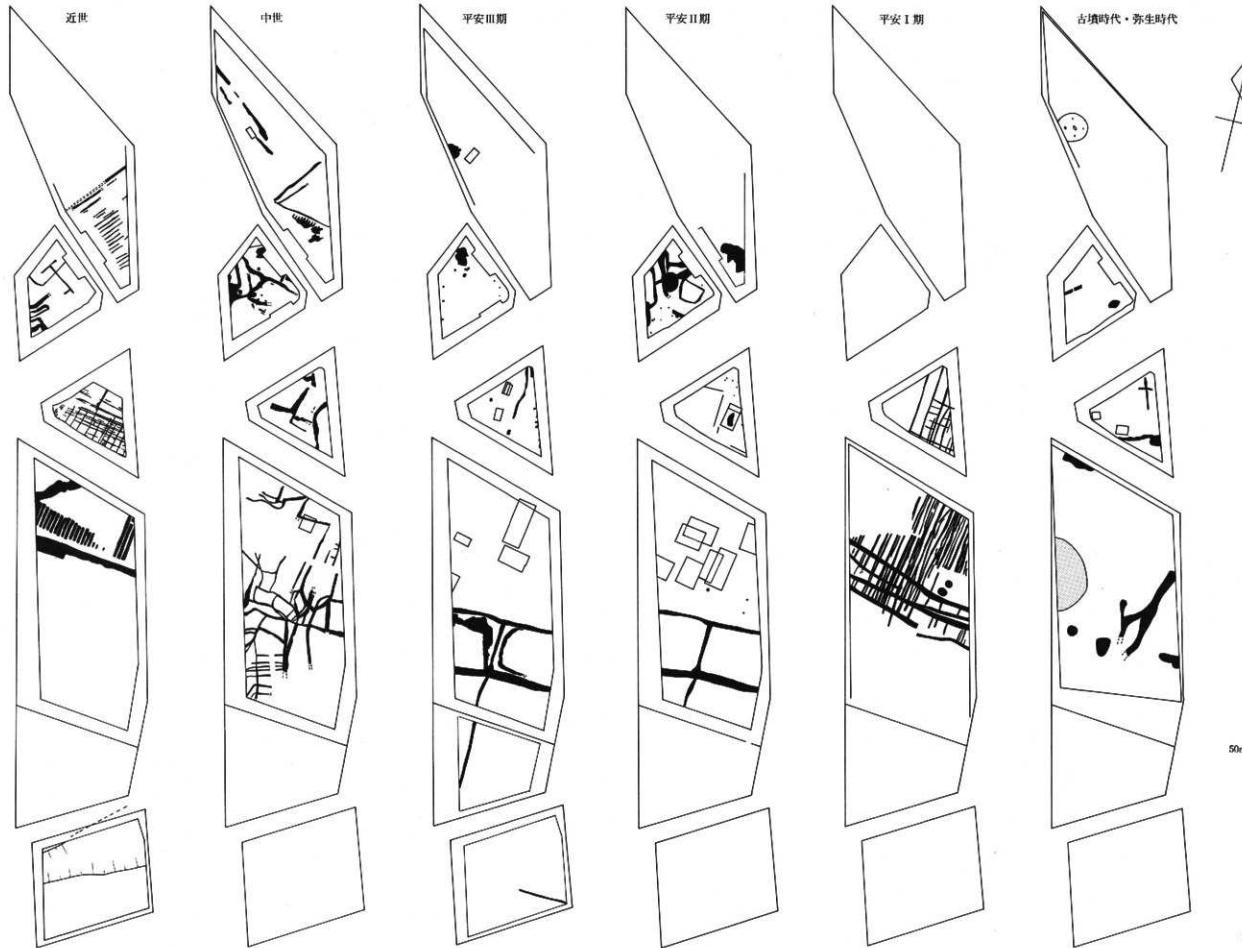
中世にはいったん後背地化していた時期があるが、その後は耕地化したようである。中でもB区は低い位置に当たることから、明確に性格付けられる遺構も少なく、住居地や耕作地としては適さなかつたものと思われる(B区第1面、A区第2面、D区第1面)。浅い不定形土坑は洪水などの名残りをとどめる湿地状の窪み堆積であると思われる。また、地形に沿って流れる自然流路跡が多く見られる。

平安時代の集落が衰退した後、高柳の集落の中心は移動したものと思われるが、旧古川の自然堤防上で散逸的に建物跡や耕作溝跡などが見られる(A区第2面、D区第1面掘立柱建物1)。

南北朝時代になると、幕府の威信も衰え、楠木正成による四条畷合戦などで旧九個荘以西の地が相当の被害を蒙ったとされる。この頃から後背地になっていたものと推測できる。

4. 近世

近世において近世の耕作溝、水路、粘土取り跡などを検出した(D区第1面、C区第1面南側、A区第1面)。近世の洪水の記録として1802年の「点野・仁和寺切れ」が知られているが、調査区全体を覆う洪水砂層はこの時のものと考えられる。D区において検出された粘土取り跡では規則



第64図 高柳遺跡 造構変遷図

正しく粘土を切り出す様子を観察することができた。また、近接する水路を利用して切り出した粘土塊を運び出していたものと思われる。水路は古川、淀川に通じていたものと推測され、古川、淀川などの堤防復旧や治水工事の際に粘土取り作業が頻繁に行われていたことが窺われる。

古川筋は古代において仁徳天皇期に築造された「茨田堤」の位置を示すもので、古代から治水の難関とするところであった。また、水運を利用して発展した地域でもある。当時の流通ルートや治水を考える上の資料となると思われる。

これまでの調査の結果をふまえ、高柳遺跡の変遷について考えてみたが、遺構の性格を十分に把握することはできなかった。多くの資料を得ることはできただけども、さらに多くの課題が提起されることとなった。本来なら様々な角度から資料分析を行うべきであろうが、十分に活かすことができなかつたことについては自ら恥じ入るところである。積み残された課題は今後の周辺地域の調査によって明らかにされることを期待し、まとめとしたい。

(杉本)

参考文献

- 寝屋川市教育委員会 「高柳遺跡」 1991
寝屋川市教育委員会 「神田東後遺跡」 1989
寝屋川市史編纂委員会 「寝屋川市史」 第1巻 1998
寝屋川市役所 「寝屋川市誌」 1966
寝屋川市教育委員会 「茨田堤と茨田屯倉～古代の茨田郡を考える～」『歴史シンポジウム資料』 1999
藤沢一夫 「寝屋川市域の古代寺院」『寝屋川市誌』 1966
石野博信 「火災住居跡の課題」『日本原始・古代住居の研究』 吉川弘文館 1990
浅川滋男編 「先史日本と住居とその周辺」 同成社 1998
山中敏史・佐藤興治 「古代日本を発掘する5 古代の役所」 岩波書店 1985
山中敏史 「古代地方官衙遺跡の研究」 塙書房 1994

第5章 自然科学分析の結果

第1節 高柳遺跡における花粉、珪藻およびプラント・オパール分析

川崎地質株式会社

1.はじめに

高柳遺跡は大阪府中部、寝屋川市に位置する。本報は、遺跡周辺の古環境変遷の推定を行うために、大阪府教育委員会が川崎地質株式会社に委託して実施した各種分析調査の概報である。

2.試料について

図1に示す2地点で試料を採取した。各地点の柱状図および試料採取層準を、図2、3の花粉ダイアグラム中に示す。柱状図右側の数字が試料番号で、採取深度に示した。また、柱状図左側に推定堆積年代を示した(註)。

3.分析方法および結果

花粉、珪藻分析処理は、それぞれ渡辺(1995a,b)に従い行った。また、プラント・オパール分析処理は藤原(1976)のグラス・ビーズ法に従い行った。顕微鏡観察は400倍、あるいは必要に応じ600倍、1000倍を用いて行った。花粉分析では原則的に木本花粉総数が200個体以上になるまで同定を行い、同時に検出される草本化石も同定した。珪藻分析では、原則的に珪藻化石総数が200個体以上になるまで同定を行った。しかし、一部の試料では花粉化石および珪藻化石の含有量が少なかったために、木本花粉化石総数あるいは、珪藻化石総数で200を越えることができなかった。また、プラント・オパール分析では、付加したガラスピースの検出量が400個体以上になるまで同定を行った。

花粉分析結果を図2、3の花粉ダイアグラムに、珪藻分析結果を図4、6の珪藻ダイアグラムおよび図5、7の珪藻総合ダイアグラムに、プラント・オパール分析結果を図8、のプラント・オパールダイア

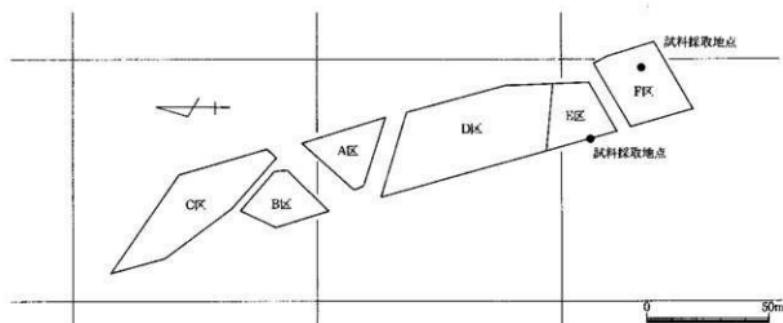


図1 試料採取地点位置図

ラムに示す。

花粉ダイアグラムでは、同定した木本花粉総数を基数にした百分率を各々の木本花粉、草本花粉について算出し、スペクトルで表した。また右端に各分類毎の相対料を示すグラフを付けた。珪藻ダイアグラムでは、同定総数を基数にした百分率を各々の種類について算出し、スペクトルで表した。珪藻総合ダイアグラムのうち左端の「生息域別グラフ」は、同定した全ての種類を対象に、それぞれの要因(生息域)ごとに百分率で表したものである。その他の4つのグラフは、淡水種の珪藻についてそれぞれの要因ごとに百分率で表したものである。プラント・オ・パールダイアグラムでは、同定数を単位重量あたりの含有量に換算した値をスペクトルで表した。

4. 花粉分帶

以下では過去から現代への時間軸に沿って花粉組成の変化を見るために、下位から上位に向かい花粉分帶の結果を示す。

(1) II 帯(F区試料No.7～1、E区試料No.10)

アカガシ亜属が卓越するほか、スギ属が10～20%程度の出現率を示す。草本花粉では、最下位の試料No.7でガマ属、カヤツリグサ科が高率を示し、その他の試料ではイネ科が高率を示す。

草本花粉の出現傾向から、試料No.10をb亜帯、他をa亜帯とした。

(2) I 帯(E区試料No.9～3)

II帯同様にアカガシ亜属が卓越するが、II帯に比べやや低率となる。一方、モミ属、マツ属(複維管束亜属)、ツガ属、スギ属がやや高率になる。草本花粉では試料間でばらつきがあるが、イネ科(40ミクロン以上)が高率を示す傾向にある。

5. 地域珪藻帯の設定

珪藻分析結果をもとに地域珪藻帯を設定した。珪藻組成の変遷を見るために、下位から上位に向かって記載する。

(1) V 帯(F区試料No.7、6)

浮遊種の *Melosira granulata* が卓越する。

(2) IV 帯(F区試料No.5～2)

底生種の *Cymbella* 属、*Eunotia* 属、*Pinnularia* 属が卓越する。

(3) III 帯(F区試料No.1、E区試料No.10)

浮遊種の *Melosira granulata* が卓越する。

(4) II 帯(E区試料No.9～3)

底生種の *Cymbella* 属、*Coccconeis* 属、*Pinnularia* 属、*Epithemia* 属が卓越する。

(5) I 帯(E区試料No.2、1)

浮遊種の *Melosira granulata* が卓越する。

6. 古環境変遷

ここでは、出土遺物から推定された時期毎に、前年度調査の諸分析結果を含めて、推定できる古

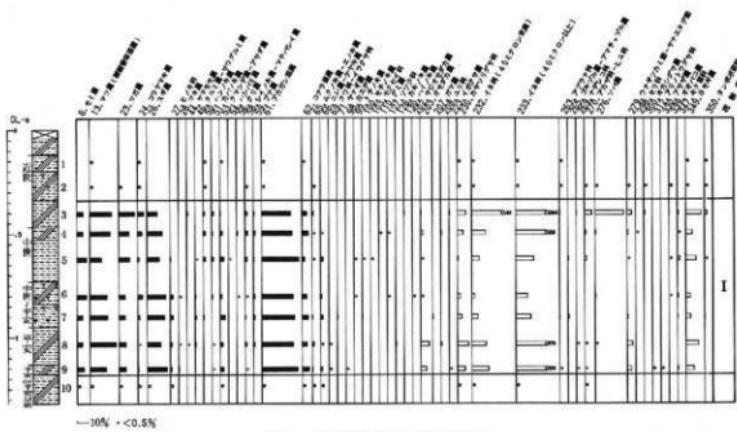


図2 E区花粉ダイヤグラム

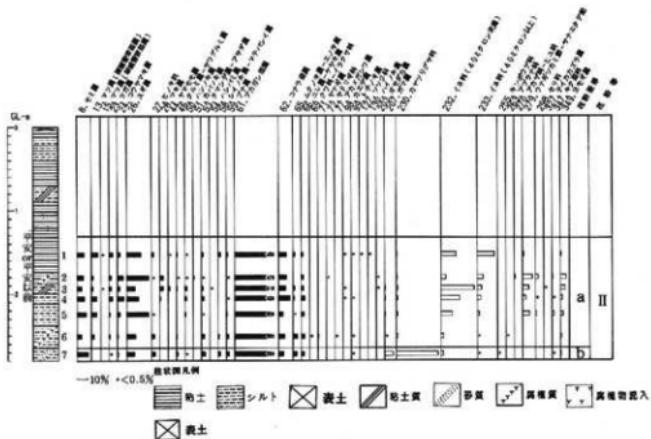


図3 F区花粉ダイヤグラム

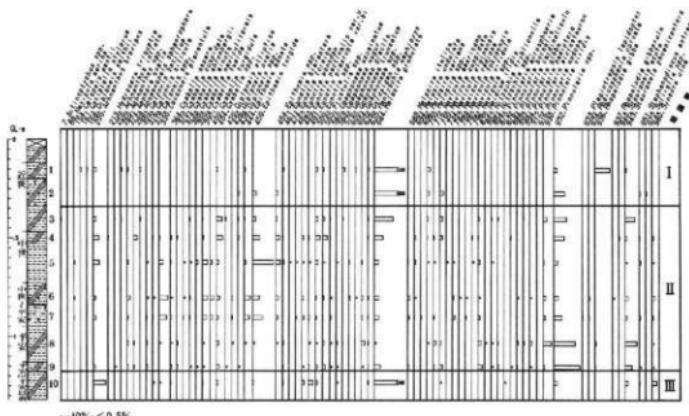


図4 E区珪藻ダイヤグラム

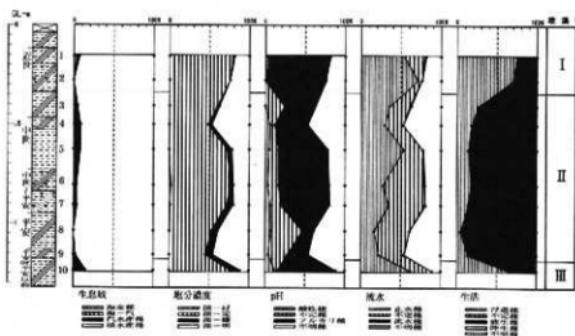


図5 E区珪藻統合

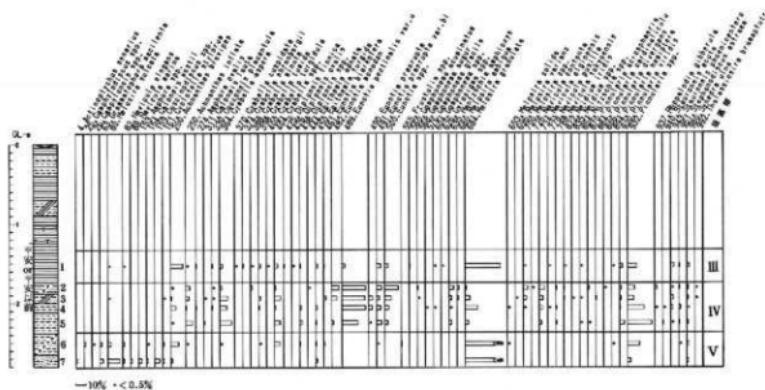


図2 F区珪藻ダイヤグラム

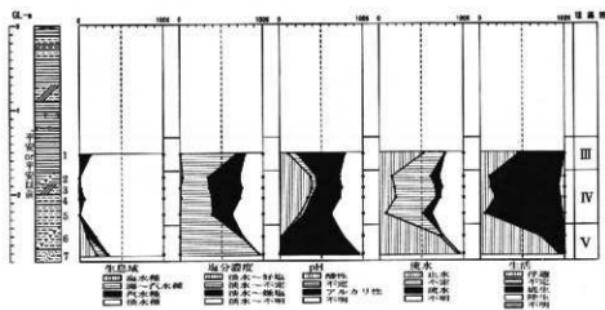


図7 F区珪藻統合

環境について述べる。

(1) 平安時代あるいはそれ以前

花粉組成でアカガシ亜属が卓越し、スギ属を伴うという特徴がある。この特徴と古谷(1979)との比較から、この層準が弥生時代頃～古墳時代頃に堆積した可能性が指摘できる。また、I帯に入る大型のイネ科花粉やイネのプラント・オパールの出現から稲作が示唆され、弥生時代以降の植生を示すとしても矛盾しない。

一方でII帯ではスギ属の出現率が安定していない。試料No.6と5の間でのスギ属の出現率の変化を増加傾向を見た場合、下位の試料No.7、6層準が縄文時代晩期頃の堆積物であっても、古谷(1979)と矛盾しない。また、II帯では稲作を示唆する要素が全く検出されず、縄文時代の植生を示すとしても矛盾はない。

また、II帯では人間活動の証拠は全く検出されず、I帯に入つてからの稲作要素の検出が高柳遺跡における人間活動の検出の始まりである。

珪藻帯の内、V帯およびIII帯では浮遊種が卓越し、海～汽水種も検出される。一方IV帯では底生種が卓越し、海～汽水種もほとんど出現しない。このことから、湖沼～沼沢湿地～湖沼という変化が起こったことが示唆される。高柳遺跡の立地を考えた場合、2度の「湖沼」環境はいわゆる「河内潟(湖)」の一部であった可能性のほか、淀川の影響で「三日月湖」のような小さな湖が形成された可能性もある。また2度目の湖沼環境は、古墳時代以降に頻繁に起きたと推定されている「河内湖」の排水不良により出来た可能性もある。

花粉分析結果およびプラントオパール分析結果より、最下部のII帯b亜帯では、カヤツリグサ科、ガマ属の花粉が高率になる一方、イネ科のプラント・オパールは検出されない。この時期には湖沼の端にはガマ類や、カヤツリグサ科の水生植物が繁茂していたと考えられる。

a亜帯に入ると、一転してイネ科花粉、ヨシ属のプラントオパールが大量に検出され、調査地周辺に蘿原が広がっていたと考えられる。カヤツリグサ科の成育していた種類にもよるが、花粉化石からはb亜帯とa亜帯の間に大きな堆積環境の変化は考えにくい。また、珪藻分析からも同様である。b亜帯の時期とa亜帯の時期に時間間隙があり、一時的に調査地近辺が乾燥環境になり、ガマ類やカヤツリグサ類の成育が不可能になり、その後ヨシが成育したとも考え

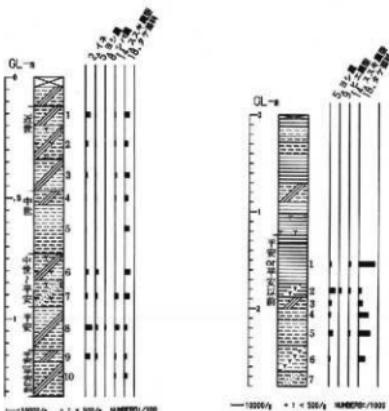


図8 プラントオパールダイヤグラム

られる。

丘陵(あるいは低地)から北摂や生駒山地北部の山麓には、カシ類を主要素とする照葉樹林が広がっていたと考えられる。また、モミ、アカマツ、ツガ、コウヤマキ、スギなどの温帯針葉樹林が山地中腹から山頂に広がり、高山の山頂部にはブナ林も分布していたと考えられる。

(2) 平安時代から近世

花粉組成の特徴は、淀川対岸の茨木市玉櫛遺跡で得られた同時代の花粉組成(川崎地質,1994)と類似する。

珪藻では底生種が卓越する。また種構成では、沼沢湿地で優占する傾向にある *Cymbella* 属、*Coccineis* 属、*Pinnularia* 属、*Epithemia* 属の諸種が優占する。一方で、同層準ではイネのプラント・オバールが多産する傾向にあり、イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率も高い。詳細に検討すると、試料No.5、4ではイネプラント・オバールの含有量が他の試料に比べ少なく、試料No.7～5ではイネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率が他の層準に比べ低くい。

上位から下位へのプラント・オバール、花粉の(生物擾乱や、耕作による)潜り込みを考慮すると、試料No.3層準が耕作土で試料No.4、5層準はそれに先立つ沼沢湿地であった可能性が指摘できる。また、試料No.3層準ではソバ属の花粉が高率を示すことからも、この層準が旧耕作土であったことが判る。

試料No.7、6層準でのイネのプラント・オバールの含有量はやや高いものの、イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率はあまり高くない。このことから、同層準が耕作土であったか否かの判断できない。

試料No.9、8ではイネのプラント・オバールの含有量が高く、イネ科(40ミクロン以上)花粉の出現率も高いことから、この層準が耕作土であったと考えられる。

したがって平安時代頃と近世には、遺跡内あるいは周辺は水田が広がっていた可能性が高い。また近世には休耕田を利用して畑が作られ、ソバが栽培されていたと考えられる。一方平安時代から中世頃には、水田が広がっていたか否かはつきりしない時期があり、中世には一時沼沢地化した可能性もある。

遺跡の周囲に広がる北摂山地から生駒山地にはカシ類を要素とする照葉樹林が広く分布する一方で、部分的にアカマツを要素とする二次林が分布拡大傾向にあり、スギ、モミ、ツガなどの温帯針葉樹林も中腹から山頂部には広く分布していたと考えられる。

(3) 近世

珪藻化石では浮遊種の *Melosira granulata* が卓越し、湖沼での堆積が推定される。一方で、イネのプラントオバールは多産し、花粉の検出量が少ないながらもイネ科(40ミクロン以上)の出現率は高い。また、ソバ属の花粉も高率で出現する。プラント・オバール、花粉の出現傾向からは、この地点は水田あるいは畑であったと考えられ、湖沼の中であったとは考えにくい。浮遊種の珪藻化石は、水田の盛土として外部からもたらされた可能性もある。

したがってこの時期にも、遺跡内あるいは周辺には水田が広がっていた可能性が高い。また前半

では休耕田を利用して畑が作られ、ソバが栽培されていたと考えられる。

7.まとめ

高柳遺跡で花粉、珪藻、プラント・オパール分析を実施した結果、以下のことが明らかになった。

(1) 花粉分析結果より、I、II带の地域花粉帯を設定した。また、II带をa,b亜帶に細分した。

(2) 既知の花粉分析データとの対応から、II带が弥生時代頃から古墳時代頃に堆積した可能性が指摘できる。また、最下部は縄文時代に堆積した可能性もある。

(3) 珪藻分析結果より、I～V带の地域珪藻帯を設定した。

(4) 出土遺物から明らかになった時代毎に、遺跡周辺の堆積環境、植生を考察した。特筆すべき点は、以下の事柄である。

① 平安時代頃までは、遺跡周辺は淀川沿い、あるいは河内湖に関連する湖沼あるいは沼澤湿地であった。

② 平安時代以降開拓され、水田耕作が行われた。しかし、一時的に水田が放棄された可能性もある。

③ 近世には畑作も行われ、ソバが栽培されていた。

引用文献

古谷正和(1979)大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷.第四紀研究,18,121-141.

川崎地質株式会社(1994)玉櫛遺跡の花粉、プラント・オパール分析.池田西遺跡 発掘調査概要・I
註

調査区の断面との対応関係は以下のとおりである。

E区	資料番号1	土層番号4-1	F区	資料番号1	土層番号8
	2	4-4		2	9
	3	4-3		3	10
	4	5-2		4	11
	5	5-5		5	12
	6	5-3		6	13
	7	6-1		7	14
	8	6-2		8	15
	9	7			
	10	8			

第2節 高柳遺跡出土土器に付着する赤色顔料のXMA分析

川崎地質株式会社

1. 分析方法

大阪府教育委員会より提供を受けた土器を対象に、赤色顔料付着する朱色部分、および全く赤色顔料が付着しないその他(白色)部分をごく少量削り取り、以下に示す要領でXMA分析を行った。分析にあたり、各試料2点での分析を行った。

試料前処理：コーティング(Pt-Pd)

使用装置：走査電子顕微鏡：日立製作所製 S-4500

X線マイクロアナライザ：EDAX 製 DX-4 Super UTW(エネルギー分散型)

加速電圧：25kV

図1

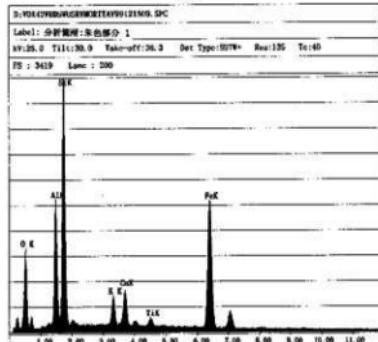


図3

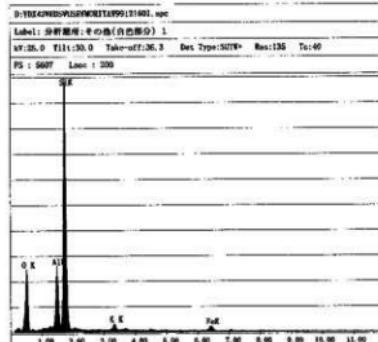


図2

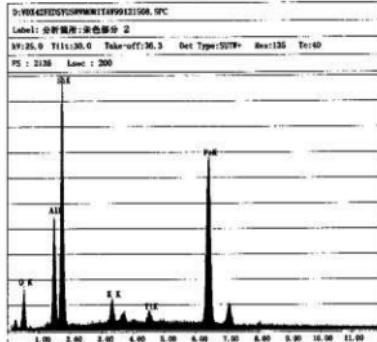


図4

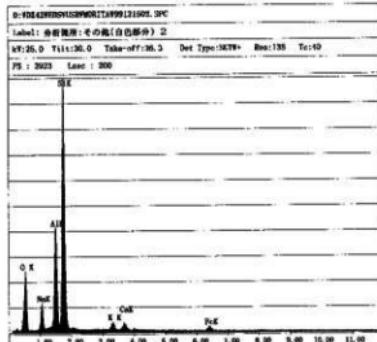


表1 分析結果一覧表

分析箇所	検出元素
朱色部分1	<u>O</u> , <u>Al</u> , <u>Si</u> , K, Ca, Ti, <u>Fe</u>
朱色部分2	<u>O</u> , <u>Al</u> , <u>Si</u> , K, Ti, <u>Fe</u>
その他(白色)1	<u>O</u> , <u>Al</u> , <u>Si</u> , K, Fe
その他(白色)2	<u>O</u> , Na, <u>Al</u> , <u>Si</u> , K, Ca, Fe

アンダーラインはメインピークを示す。

2. 結果

表1に分析結果一覧表を、XMA分析結果を図1～4に示す。

3. 顔料の推定

図1～4で明らかなように、朱色部分での「Fe」のピーク強度がその他(白色)での「Fe」のピーク強度に比べて高いことが分かる。また、赤色顔料のもう一つの元素である「Hg」は、いずれの試料からも検出されなかった。

このことから、赤色顔料は「ベンガラ(Fe₂O₃)」であった事が分かる。

第3節 高柳遺跡検出建物部材樹種鑑定の結果

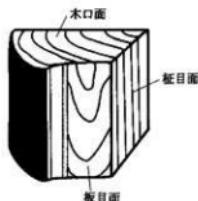
(財)元興寺文化財研究所

樹種の分類は、花、果実、葉など、種ごとに分化の進んだ器官の形態に基づいている。しかし、木材組織は、種ごとの分化が進んでいないため、組織上大きな特徴を有する種を除き、同定できない場合がある。種の同定が困難な場合は、科、亜科、族、亞族、属、亞属、節、亞節(分類の大きい順)いずれかで表す。

*科、亜科、族、亞族、属、亞属、節、亞節、種の分類は、主に原色日本植物図鑑(保育社)による。

1. 切片作製

カミソリの刃で遺物をできるだけ傷つけないように注意しながら、木材組織の観察に必要な木口面(横断面)、柾目面(放射断面)、板目面(接線断面)の3方向の切片を正確に作製する。



2. 永久プレパラート作製

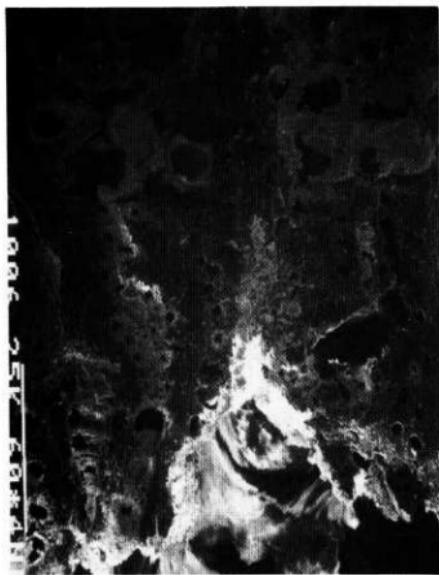
切片はサフラニンで染色後、水分をエチルアルコール、n-ブチルアルコール、キシレンに順次置換し、非水溶性の封入剤(EUKITT)を用いて永久プレパラートを作製する。

3. 同定方法

針葉樹については、早材から逸材への移行、樹脂道の有無、樹脂細胞の有無及び配列、ラセン肥厚の有無、分野壁孔の形態等、広葉樹については道管の大きさや配列状態および穿孔の形態、柔組織の分布や結晶細胞の有無、放射組織の形態等を生物顕微鏡で観察し同定する。

4. 顕微鏡写真撮影

木口面は30倍、柾目面は広葉樹100倍・針葉樹200倍、板目面50倍で撮影する。

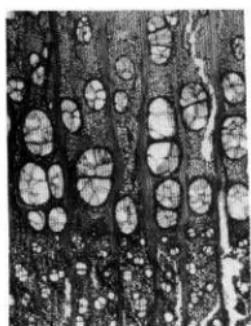


木口
60倍



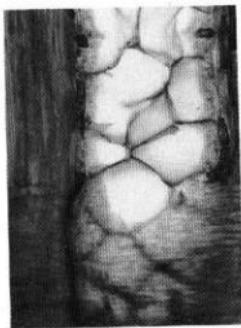
板目
120倍

1. 炭化材3 ブナ科(コナラ節またはクヌギ節)



木口

30倍



柾目

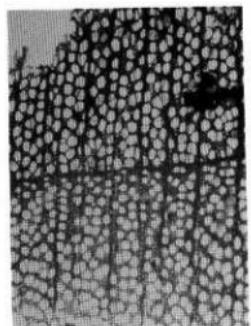
100倍



板目

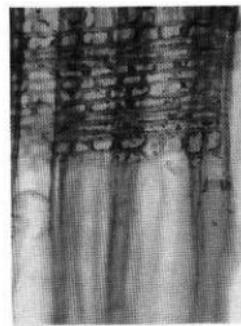
50倍

2. 柱根 (S3) ヤマグワ



木口

30倍



柾目

100倍



板目

50倍

3. 柱根 (S2) カツラ



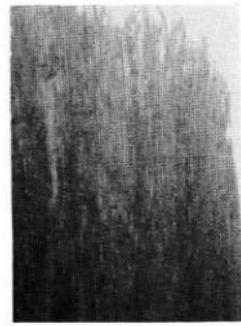
木口

30倍



柾目

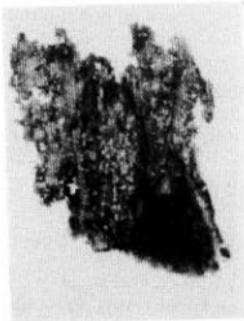
100倍



板目

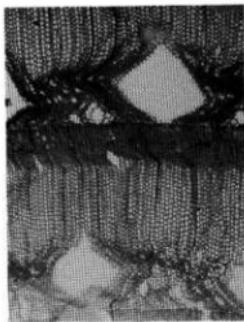
50倍

4. 硙板 (S3) シイ属?

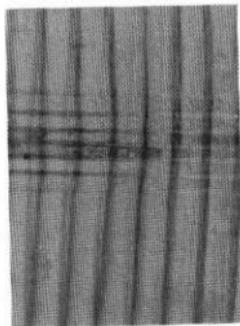


木口 30倍

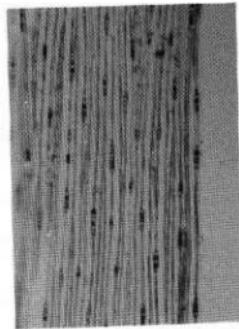
5. 硬板 (S1) 不明



木口 30倍

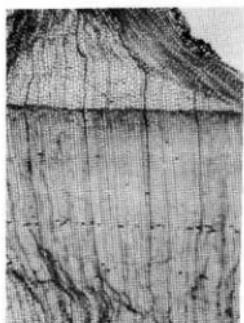


柾目 200倍

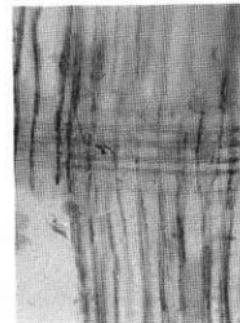


板目 50倍

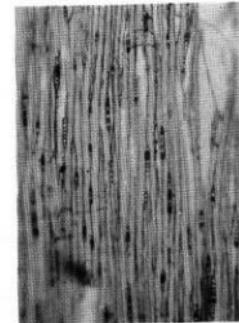
6. 柱根 (374) スギ



木口 30倍

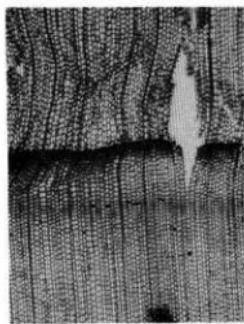


柾目 200倍



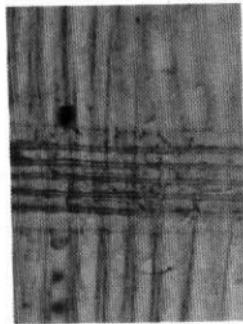
板目 50倍

7. 柱根 (143) ヒノキ科



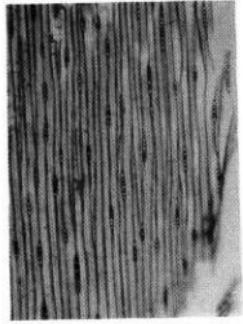
木口

30倍



柾目

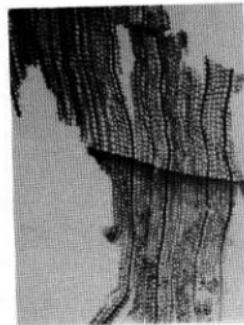
200倍



板目

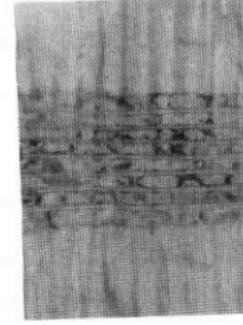
50倍

8. 柱根 (996) スギ



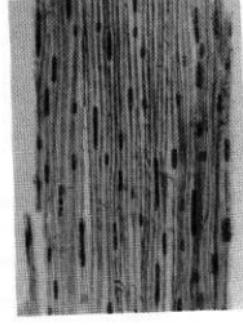
木口

30倍



柾目

200倍



板目

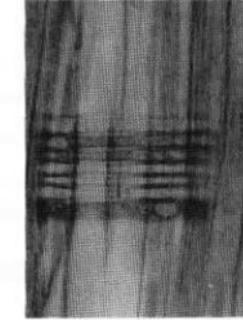
50倍

9. 柱根 (348) スギ



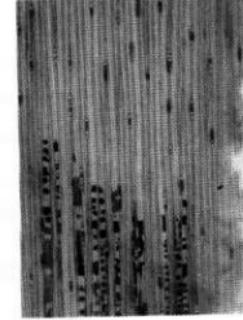
木口

30倍



柾目

200倍



板目

50倍

10. 柱根 (902) スギ

(付載)府営高柳住宅受水槽建設に伴う発掘調査

寝屋川市教育委員会 濱田延充

1. 調査の経過

高柳遺跡での府営高柳住宅建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査については、第1期建て替え事業に伴う発掘調査を、平成2年2月～平成3年3月に寝屋川市教育委員会が実施した^[1]。引き続き、第2期建て替え事業に伴う試掘調査が、大阪府教育委員会によって行われたが、明確な遺構・遺物等は検出されず、発掘(本)調査の実施には至っていない。

今回報告するのは、第1期建て替え工事に伴う発掘調査後に計画された府営住宅の受水槽設置部分の調査で、大阪府建築部住宅建設課の依頼を受けて、寝屋川市教育委員会が平成4年9月28日に試掘調査を実施した。その結果、遺構(柱穴)・遺物を検出したので、同課と協議を行い、工事によって遺構の損壊するおそれのある約50m²について発掘調査を実施した。調査は、大阪府建築部住宅建設課が経費を負担し、寝屋川市教育委員会文化振興課文化財保護係濱田延充を担当者として、平成3年3月8日～3月11日に実施した。

本報告は、府営住宅第2期建て替え事業に伴う発掘調査の報告に掲載される予定であったが、上記のとおり第2期については発掘調査が行われず、府営住宅関連の発掘調査の中で唯一、未報告のままとなっていたものである。調査地は今回報告される府道建設に伴う調査地に隣接し、遺跡全体を理解する上でも重要と考えられるため、ここで報告を行う。



2. 調査の成果

現地表下、約1mの盛土・旧耕土層・緑灰色粘土層を機械で除去した後、層厚約10cmの遺物包含層となる灰褐色粘質土層を人力掘削し、その後遺構面の精査を行って遺構の検出に努めた。

遺構面は、東～南側に暗灰色～暗灰緑色の粘土層が広がっており、地形的に低くなっている。この落ち込みについては、自然地形か、人為的なものかは不明である。断面観察の結果、平安時代の遺構面を覆っている遺物包含層を切り込んで遺構が形成されており、遺物等に新しいものを含んでいなかったが、平安時代中期（10世紀）以降の時期のものであると判断される。

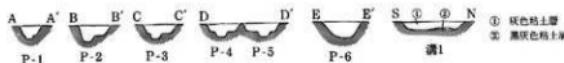
調査区の中央～北西にかけて平安時代の遺構を検出した。検出した遺構は、溝1条、柱穴5基である。溝は幅90cm、深さ10cmで、検出長2mをはかる。埋土は大部分が灰色粘土層であるが、底付近には炭をふくむ黒灰色粘土が薄く堆積している。柱穴は、直径30～50cm、深さ20cm程度のもので、直径10～20cmの柱痕が観察された。溝・柱穴埋土の出土遺物は小片の土器ばかりで、時期決定は困難である。

遺物包含層からは、遺物収納箱（コンテナ）1箱分の土器が出土している。土器は小片のものばかりである。土師器杯・甕・羽釜、黒色土器A類杯、須恵器、灰釉陶器、瓦が認められる。これらは、9世紀末～10世紀前葉で、遺構もおおむねこの時期のものと考えられる。このほか、古墳時代（6世紀末）の須恵器1点が含まれていた。

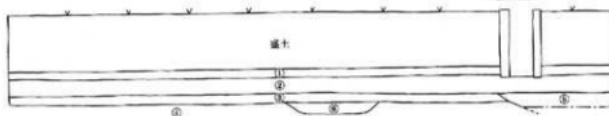
資料化した平瓦2点（1・2）は、凸面に繩目、凹面に布目痕が観察される。（1）は軟質（土師質）に、（2）は硬質（須恵質）に焼き上げられている。府営住宅建設にともなう第1次調査でも数点の平瓦が出土しているが、極めて少量で検出されている建物に瓦葺きのものがあったとは考えがたい。遺跡の北に所在する長榮寺付近からは古瓦が採集されており、古代寺院跡（高柳庵寺跡）の存在が推定されている⁽²⁾。高柳遺跡で出土している瓦も、同遺跡との関連で理解すべきと思われる。

3.まとめ

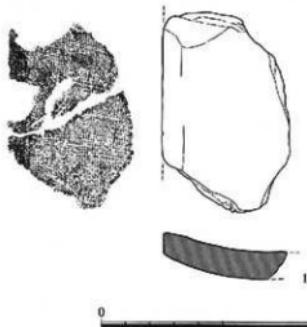
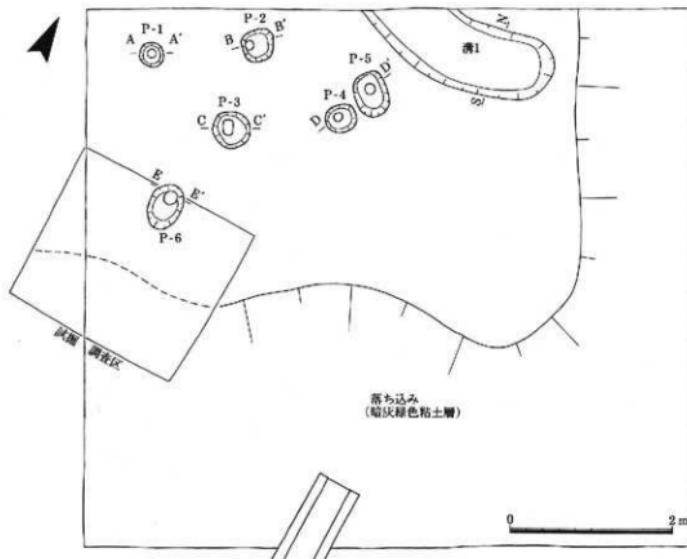
今回の調査によって、高柳遺跡が発掘調査を実施した府営高柳住宅のさらに西側に広がることが明らかになった。平成8年度の個人住宅建設にともなう立会調査⁽³⁾で、府営住宅南側に隣接する地点でも平安時代の遺物包含層を確認している。これらの成果は、本報告書に掲載されている大阪府教育委員会が実施した府道千里山寝屋川線建設に伴う調査でも追認されることとなった。府営住宅第1期建て替え工事区域の西側半分については、試掘調査で遺物・遺構の未検出だったため、遺跡の範囲外として本調査が実施されなかつたが、この区域にも本米遺跡が存在していた可能性が高くなった。なお、今回検出された平安時代の遺構は、隣接する府道調査地の同時期の遺構に対応するものと考えられる。



④ 亂層側面



- ① 黑沃色粘質土層(田耕土) ② 黑沃色粘土層(下部は黄色チップを含む) ③ 黄褐色粘質土層(茶色チップを多く含む・平安時代遺物出土層)
④ 黄色粘土層(褐色チップを多く含む) ⑤ 黑沃色粘土層(落込達み埋土) ⑥ 灰色粘土層(溝1埋土)



- 109 -

註

(1) 寝屋川市教育委員会「高柳遺跡-府宮高柳住宅建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査概要報告書-」

1991年

(2) 藤澤一夫「寝屋川市域の古代寺院」「寝屋川市誌」 1966年

宇治田和生・瀬川芳則「高柳廃寺跡」「寝屋川市史」第1巻 考古資料編。 1998年

(3) 平成9年(1997)1月20日に、寝屋川市教育委員会(担当:濱田延光)が立会調査を実施。現地表面下約80cmで約20cmの厚さの遺物包含層を検出。なお、遺物包含層は南および西に向かって薄くなり湿地状の堆積となっている。

報告書抄録

ふりがな	たかやなぎいせき					
書名	高柳遺跡					
副書名						
巻次						
シリーズ名	大阪府埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	1999-3					
編著者名	杉本清美・瀬川芳則・藤取彩子・濱田延光 他					
編集機関	大阪府教育委員会					
所在地	〒540-0571 大阪府大阪市中央区大手前2丁目 TEL 06-6941-0351					
発行年月日	2000年3月					
ふりがな 所収遺跡名	あたりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯 東経	調査期間	面積 (m ²)	調査原因
たかやなぎいせき ぬちやわしたか やなぎ	ぬちやわしたか やなぎ	27215	47 34 45 25	135 1996年度 1996年11月 ~1997年3月 36 1997年度 1997年10月 ~1998年3月 38 1998年度 1998年8月 ~12月	2,100 1,900 1,236	「都市計画道路千丘寝屋川線」建設
高柳遺跡	寝屋川市 高柳					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
高柳遺跡	集落他	弥生時代後期	堅穴住居	弥生土器	平安時代中期の掘立柱建物群の確認	
		古墳時代中・後期	溝・土坑	有孔円板 須恵器 韓式系土器		
		平安時代中期	掘立柱建物・井戸・溝・土坑	縹軸陶器 灰釉陶器 黒色土器 上部器 瓦		
		中世	掘立柱建物	瓦器		

図

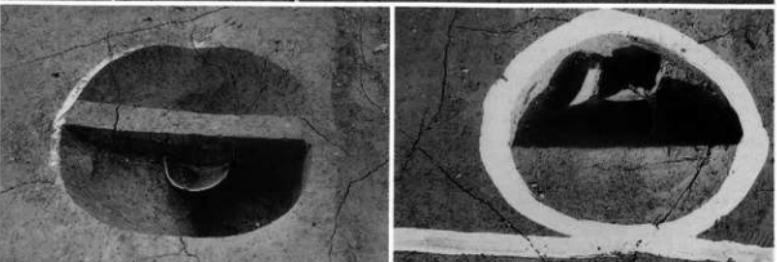
版

図版 1

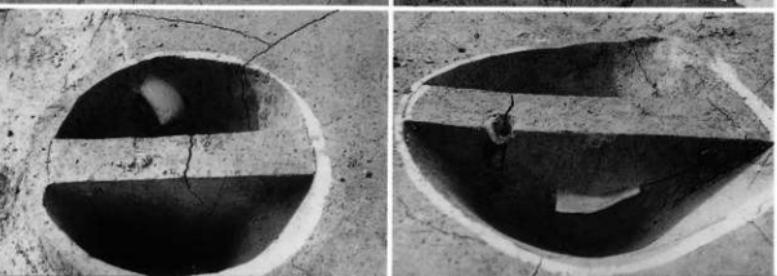
A 区
第 2 面



掘立柱建物 3



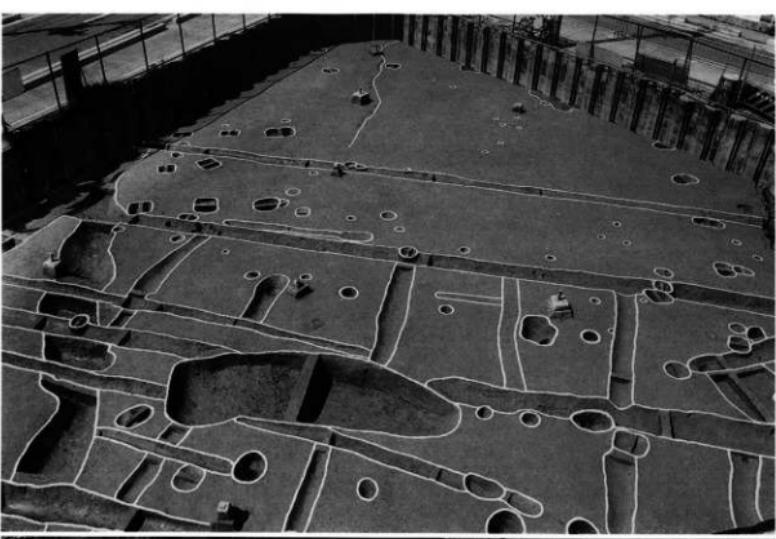
(左) ピット 82
(右) ピット 20



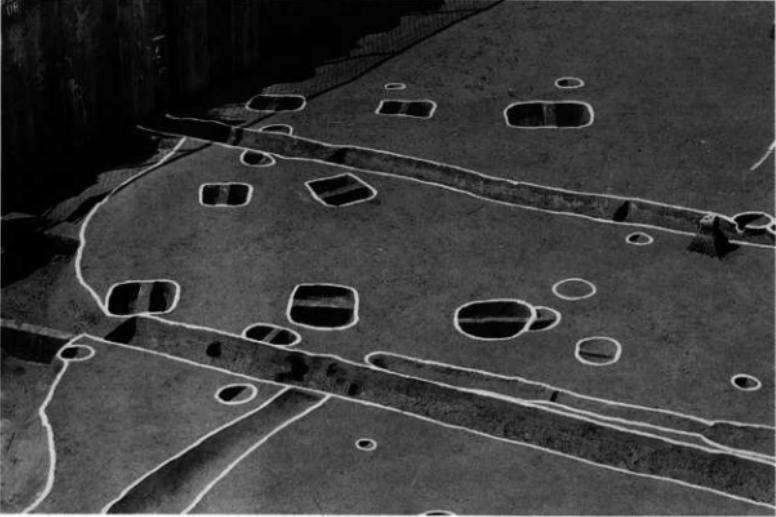
(左) ピット 54
(右) ピット 56

図版 2

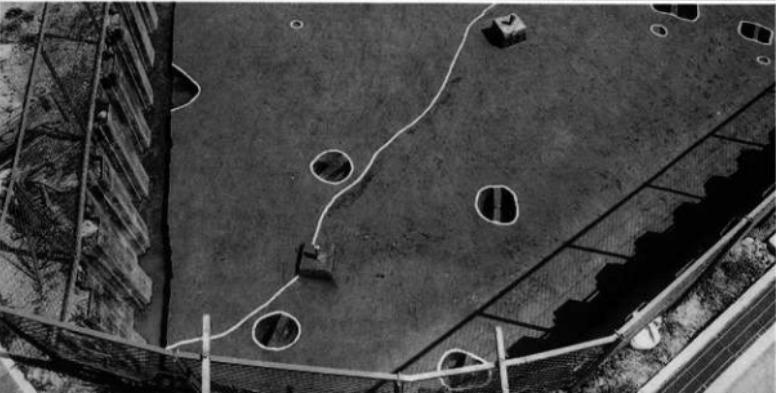
A 区
第 3 面



全景(東から)



掘立柱建物 6



掘立柱建物 5

図版 3

A 区
第 3 面

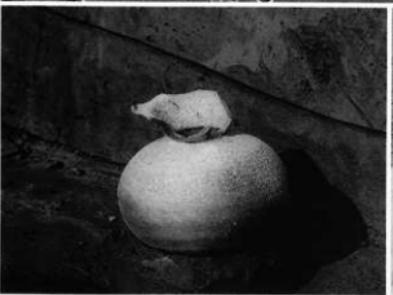
横列 2C
土坑 142



横列 1



(左) 土坑 142
遺物出土状況
(右) 溝 116 断面



(左) ピット 4
(右) ピット 2

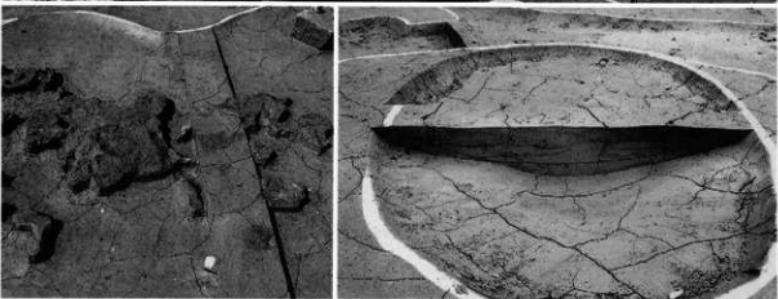




全 景 (南から)



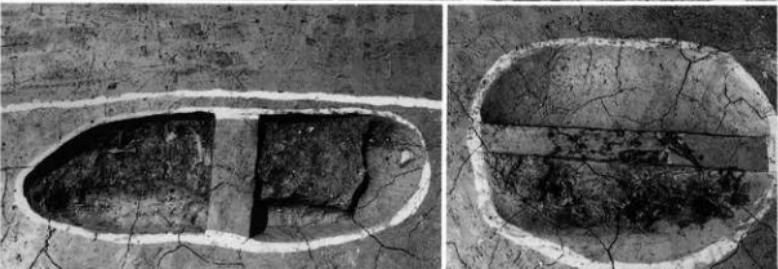
土坑 3



(左) 土坑 3

細 部

(右) 土坑 23



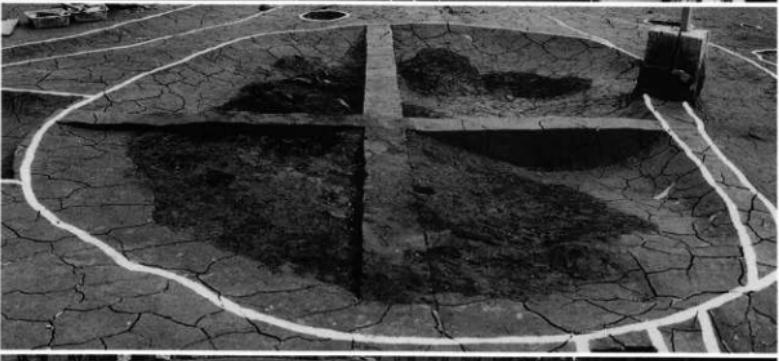
(左) 土坑 4

(右) 土坑 30

図版 5
B 区
第 3 面



全景（南から）



土坑 7 全景



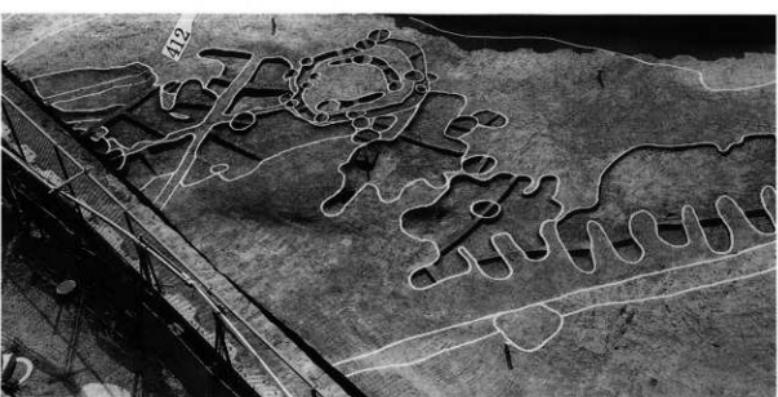
土坑 7 断面



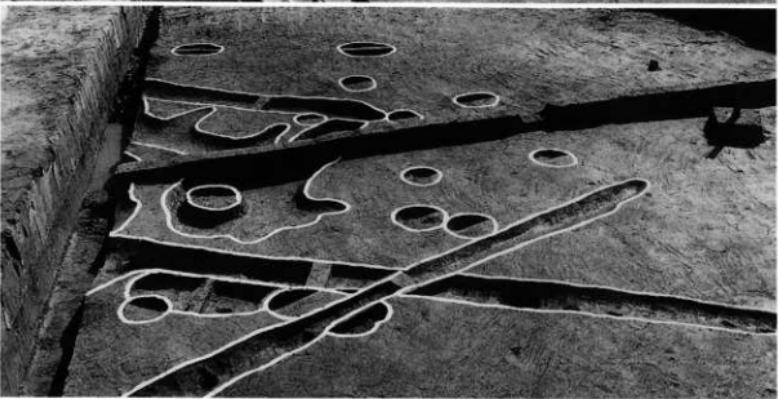
(左) 土坑 7
遺物出土状況



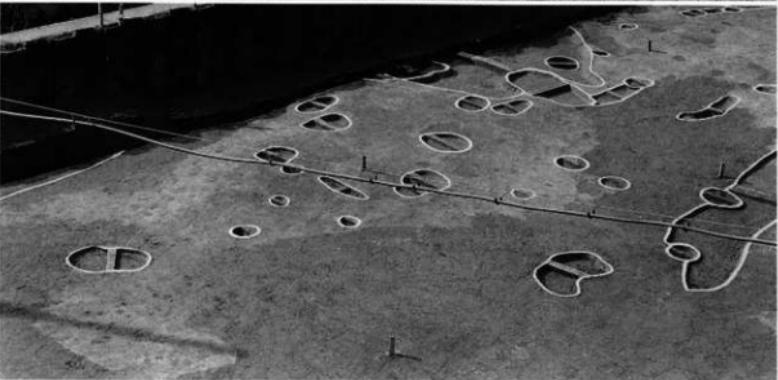
(右) 土坑 33



南半部



南半部（細部）



掘立柱建物 1



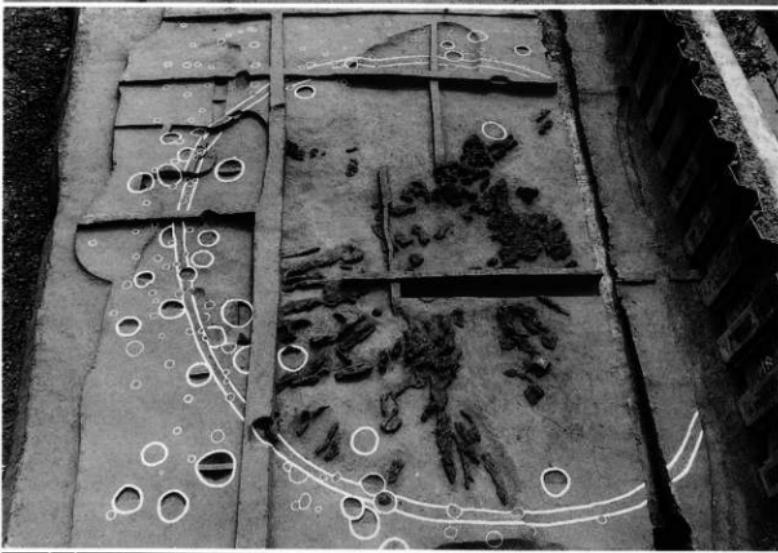
(左) 土坑 46
遺物出土状況
(右) ピット 29



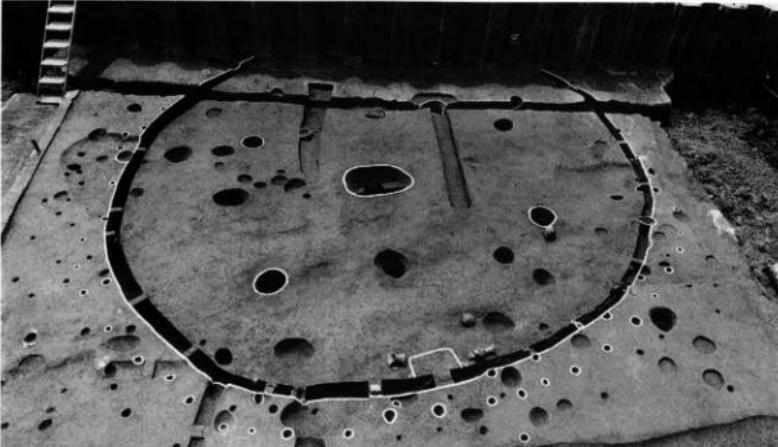
竪穴住居
検出状況



竪穴住居
炭化材検出状況



竪穴住居
発掘状況



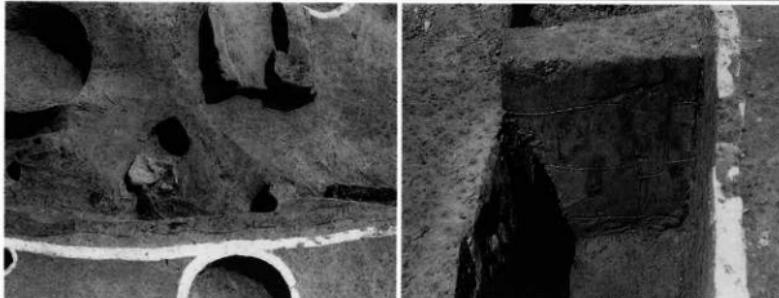
図版 8

C 区
第 3 面

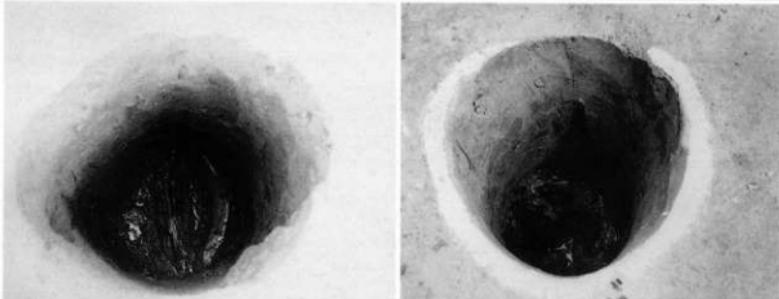
竪穴住居
断面



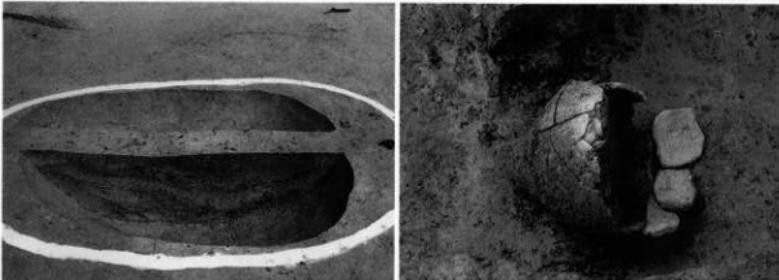
(左) 板材痕跡
検出状況
(右) 周壁溝
断面

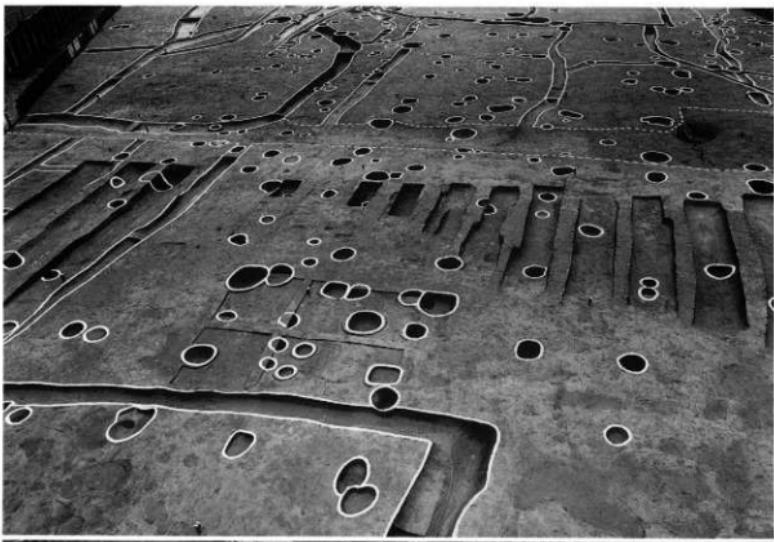


主柱穴
礎板検出状況
(左) ピット1
(右) ピット4



(左) 中央土坑
断面
(右) 土器出土状況





掘立建物 1



溝 (南東から)



畝溝 (南から)

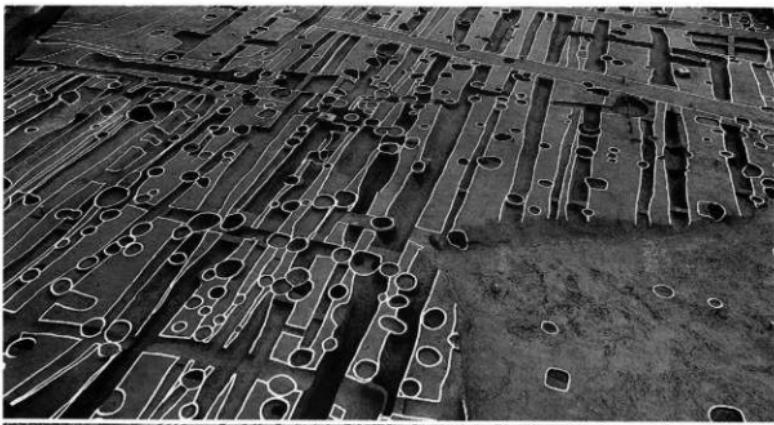
図版 10

D 区

第 2・3 面
航空写真



全景 (北から)



全景 (南から)



(左) 井戸 172
上層
(右) 井戸 1029
断面



(左) 井戸 172
下層
(右) 柱穴



図版 12
E 区



全 景 (北から)



東壁断面

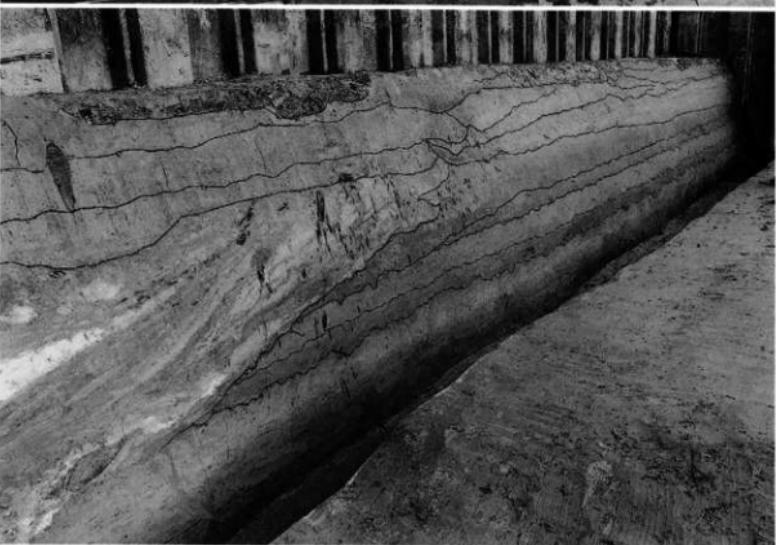


調査地近景

図版 13
F 区



全景(南から)

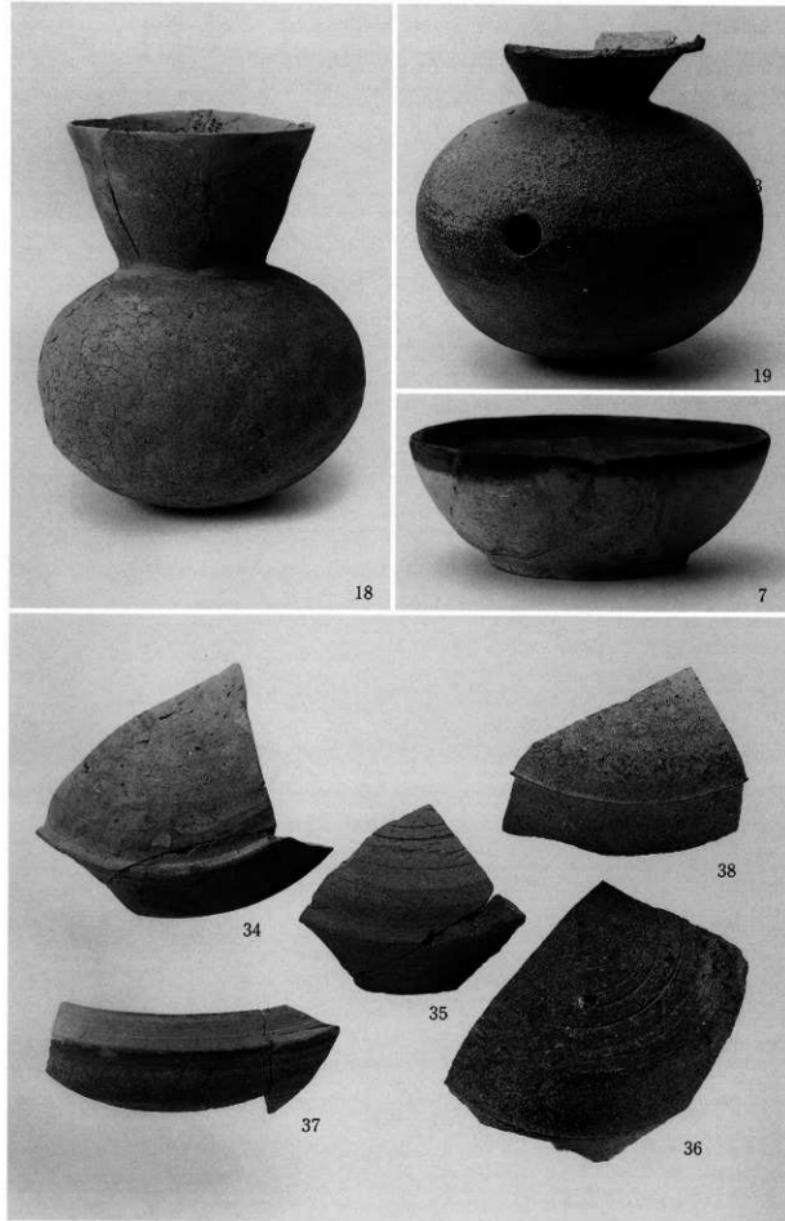


東壁断面

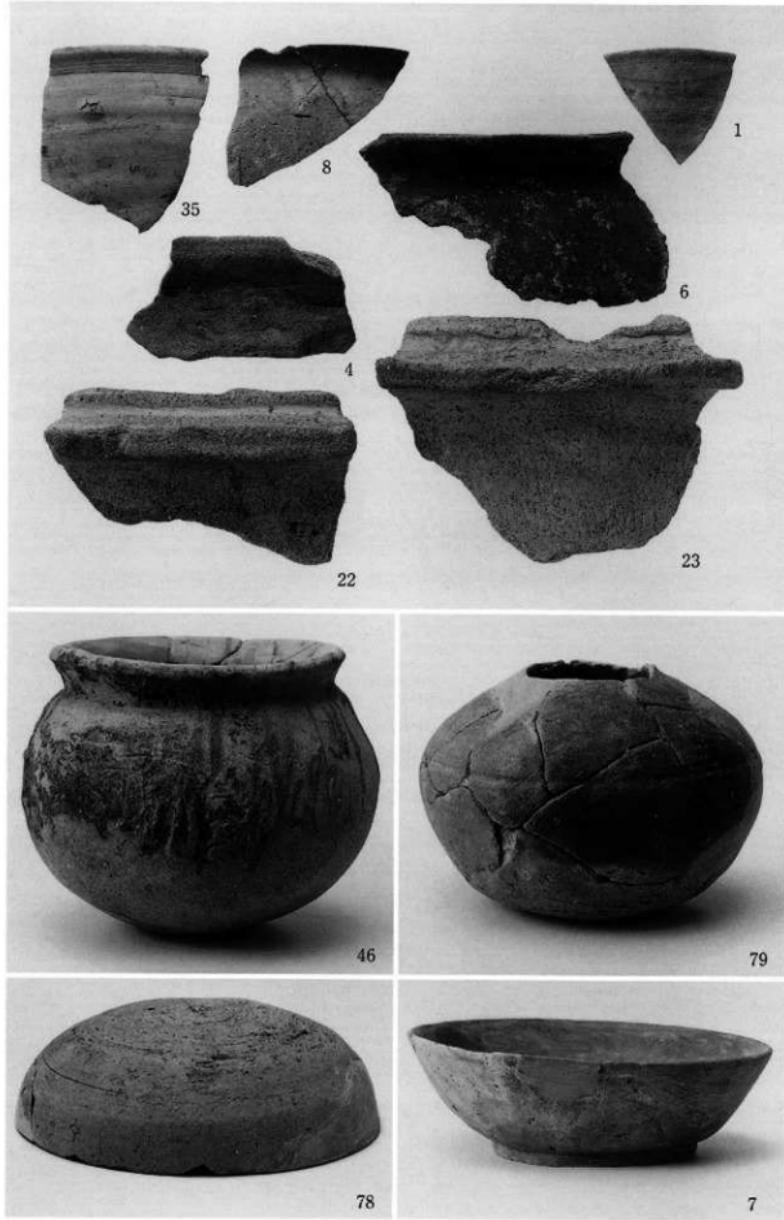


(左) 曲物検出状況
(右) 採掘土層断面

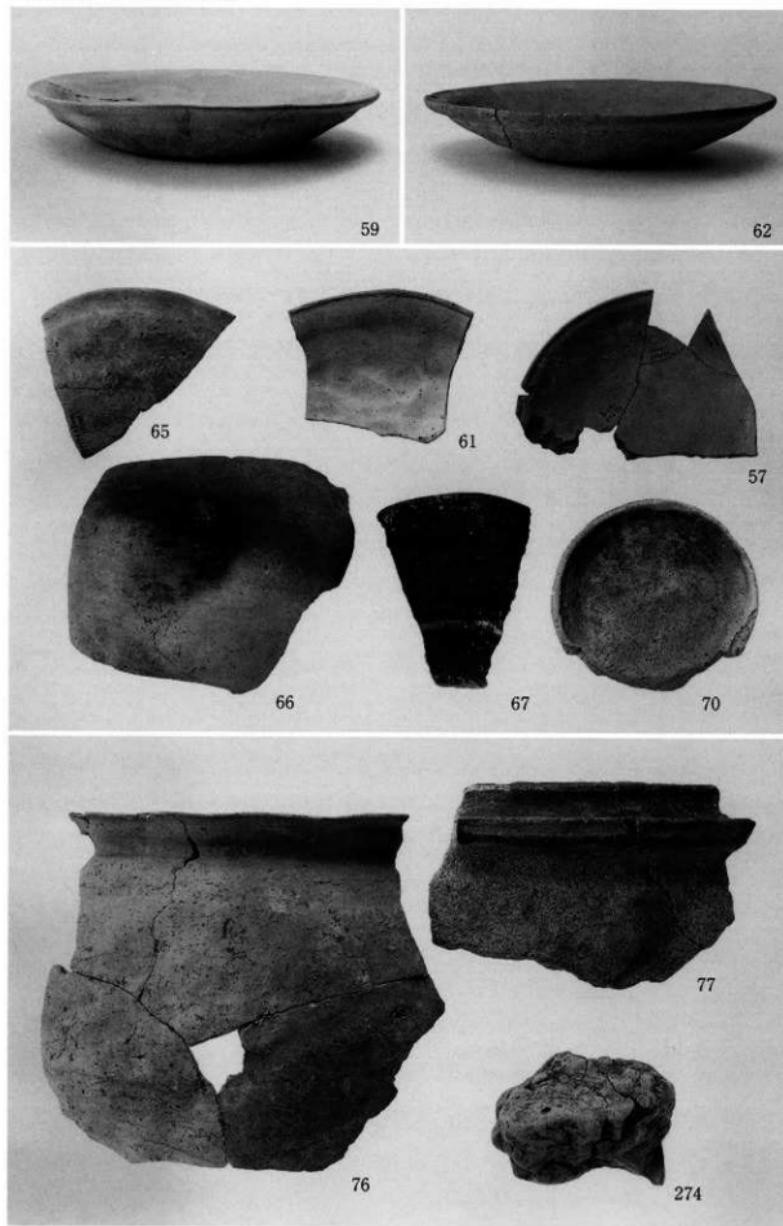
图版 14 A区出土遗物



図版 15 A区・B区出土遺物



图版 16 B区出土遗物



图版 17 C区出土遗物



119



116



118



120



117

図版 18 C・D区出土遺物



107



108



111

113

275



109



112



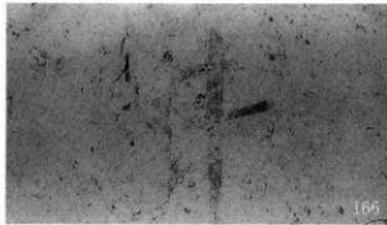
114



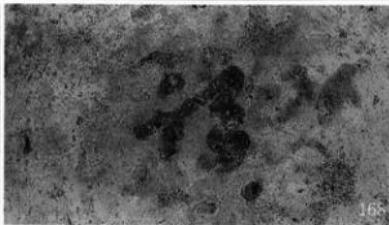
160



168

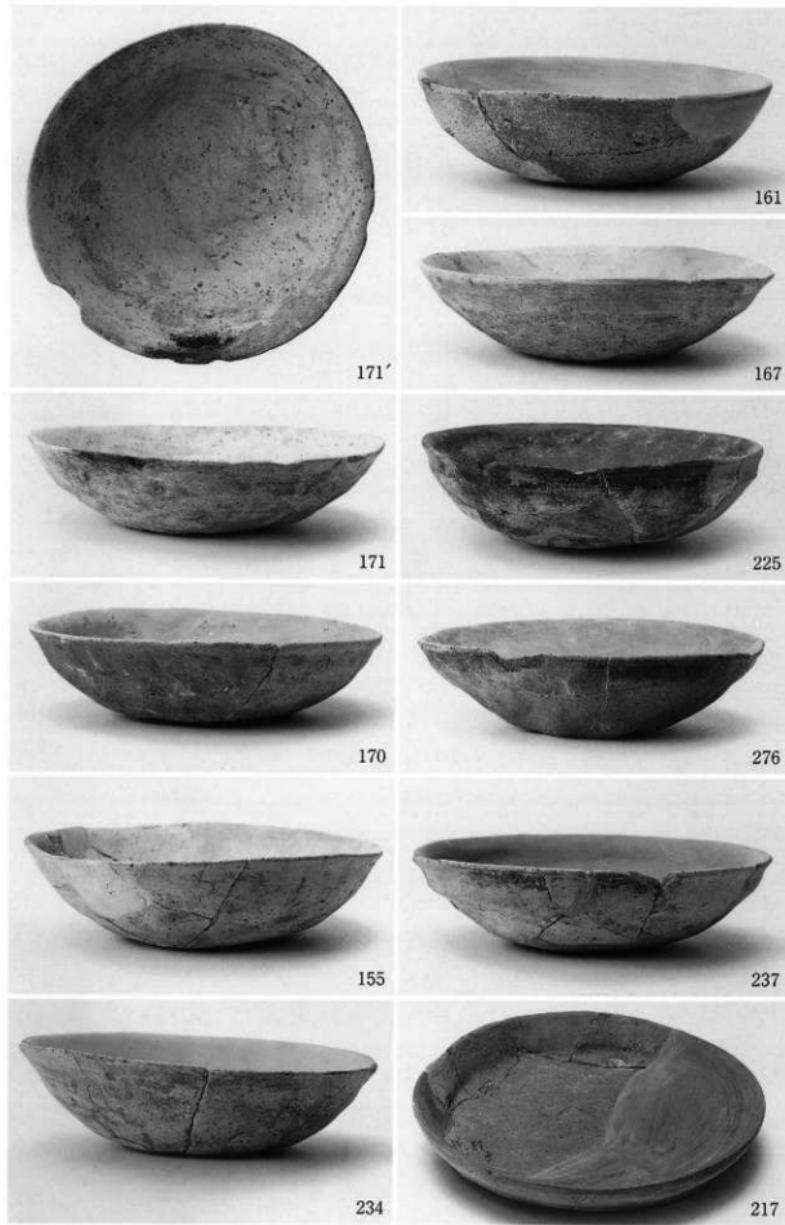


166



168

図版19 D区出土遺物



図版 20 D区出土遺物



133



139



132



217



151



173

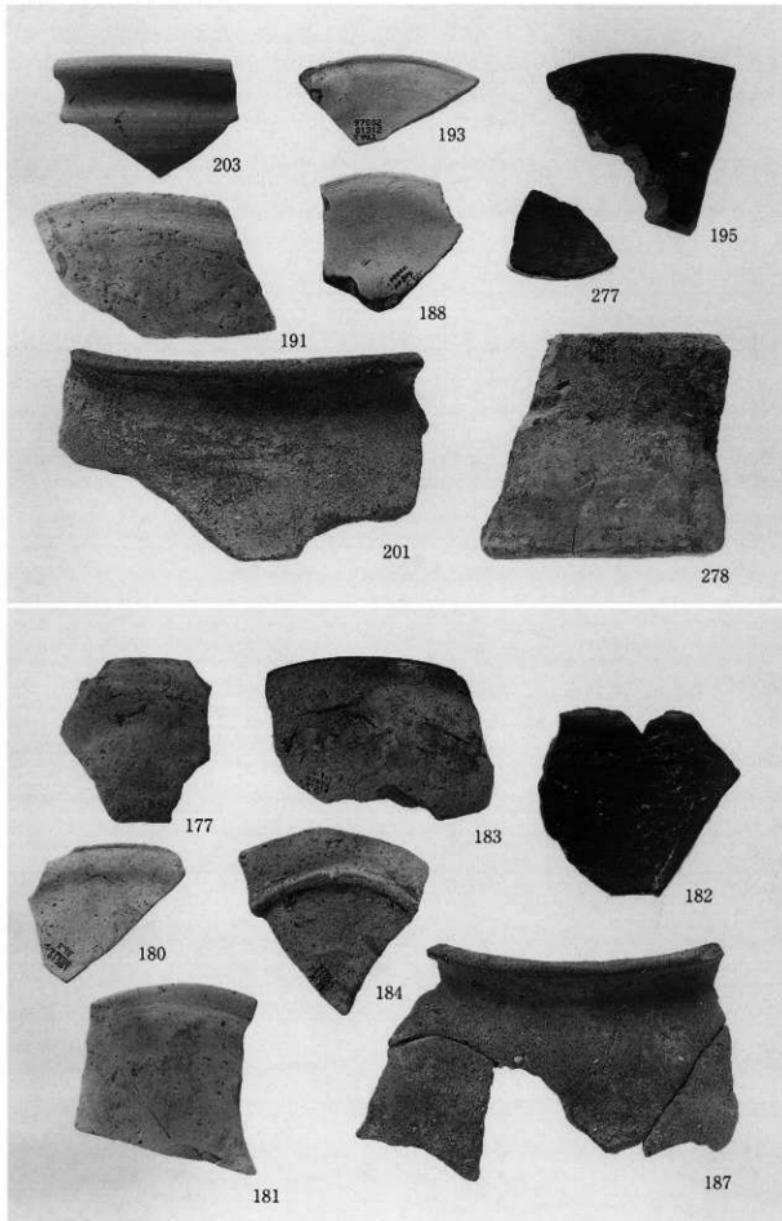


152

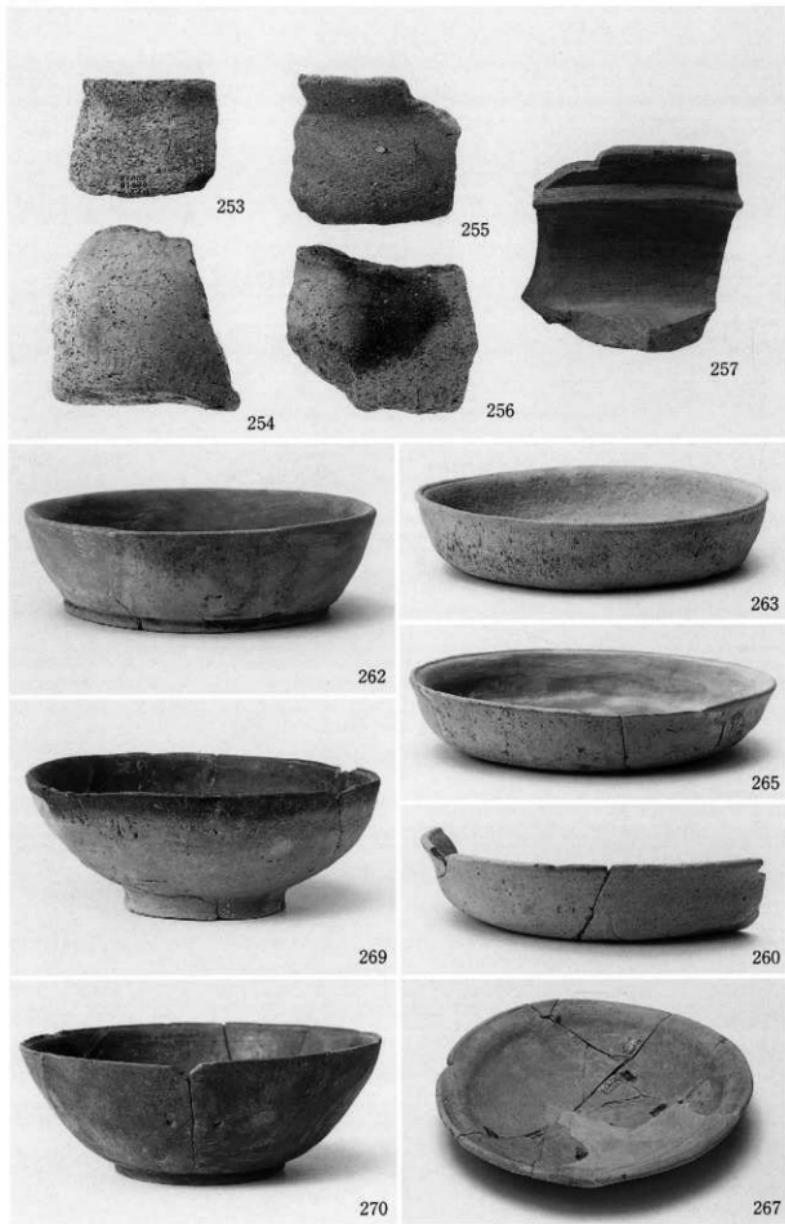


172

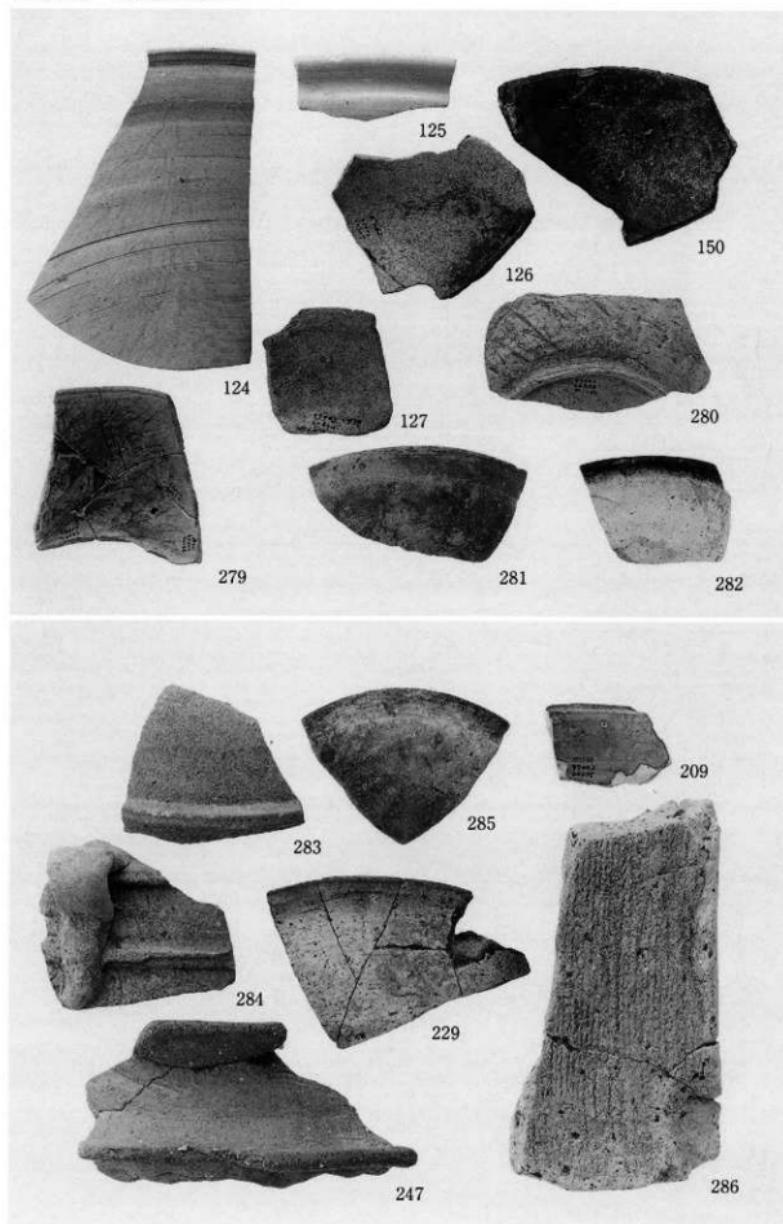
图版 21 D区出土遗物



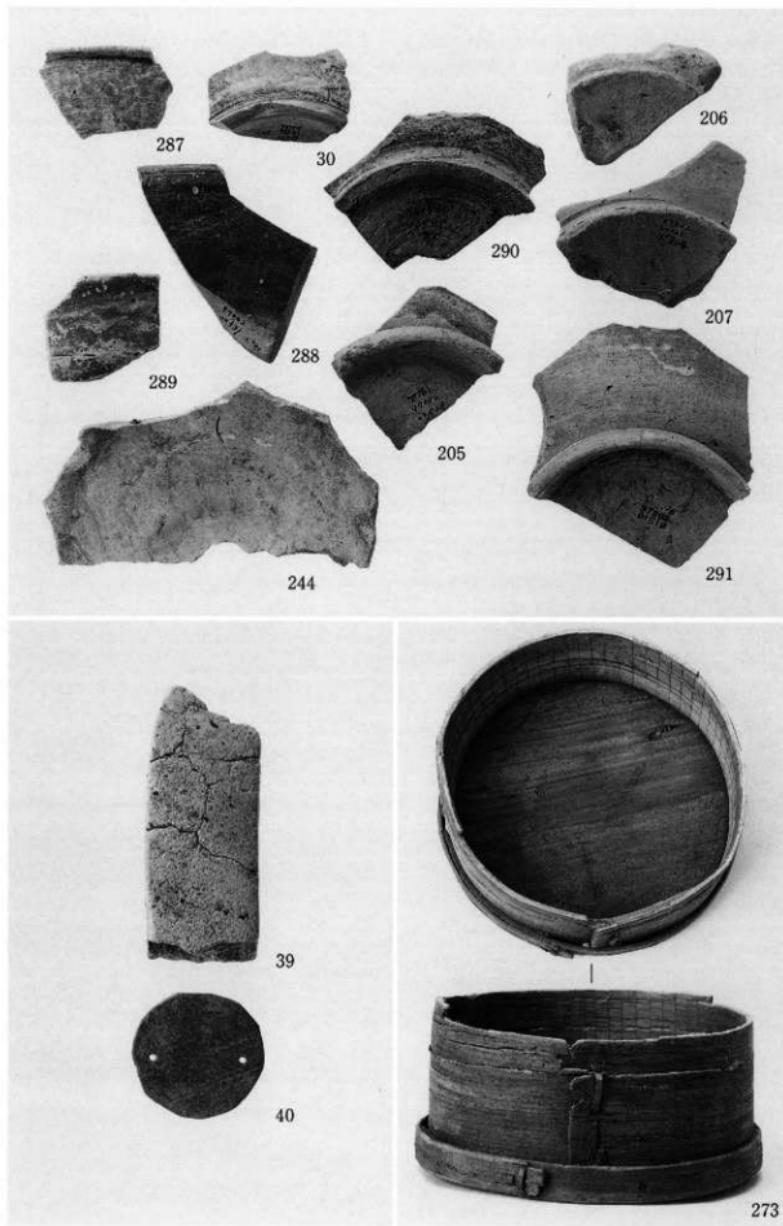
图版 22 D区出土遗物



図版23 D区出土遺物



図版 24 特殊遺物



大阪府埋蔵文化財調査報告 1999-3

高柳遺跡

発 行 大阪府教育委員会

〒540-8571

大阪市中央区大手前2丁目

TEL. 06-6941-0351

発行日 2000年3月

印 刷 (株)中島弘文堂印刷所

TEL. 06-6976-8761

